

発行日：2018 年 2 月 12 日

2017 年度
日本学生オリエンテーリング選手権大会
スプリント、ロング・ディスタンス競技部門
報告書



- 開催日 2017 年 11 月 11 日（土）～ 12 日（日）
・ 11 月 11 日（土） モデルイベント、スプリント競技部門
・ 11 月 12 日（日） ロング・ディスタンス競技部門
- 開催地 スプリント競技部門 : 岐阜県大垣市上石津町 時地区周辺
ロング・ディスタンス競技部門 : 岐阜県不破郡関ヶ原町
- 会 場 時小学校（スプリント）、西田運動広場（ロング）
- 主 催 日本学生オリエンテーリング連盟、岐阜県オリエンテーリング協会
- 主 管 2017 年度日本学生オリエンテーリング選手権大会
スプリント競技部門実行委員会
ロング・ディスタンス競技部門実行委員会
- 後 援 岐阜県、大垣市、関ヶ原町、大垣市教育委員会、関ヶ原町教育委員会、
(公社)日本オリエンテーリング協会
(本大会は、岐阜県スポーツイベント補助金の交付を受け実施しました。)
- 協 賛 十六銀行
- 協 力 関ヶ原観光協会

目次

ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・Page1-2

1	Page3-15
	公式成績・入賞者コメント

2	Page16-27
	スプリント競技部門解説

3	Page28-36
	ロング競技部門解説

4	Page37-68
	大会運営報告

1	大会企画の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page37-38
2	大会の行動計画と実施・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page39-45
3	スプリント競技面の準備経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page46-49
4	ロング競技面の準備経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page50-51
5	運営面の準備経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page52-60
6	当日の運営・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page61-64
7	会計について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	Page65-68

5	Page69-74
	スプリント競技部門 イベント・アドバイザー報告

6	Page75-78
	ロング・ディスタンス競技部門 イベント・アドバイザー報告

7	Page79-83
	将来への提言

8	Page84-85
	選手権の部スタートリスト

9	Page86-87
	大会役員

ご挨拶

日本学生オリエンテーリング連盟会長
河合 利幸



市街地を使ったスプリント競技、GPS トラッキングと大型ディスプレイを使った演出など、これまでにない試みに挑んだ大会でしたが、いかがだったでしょうか。2 日間とも大きな天気の影響もなく、無事にすべての競技を終了できたことは喜ばしい限りです。一方で表彰式・閉会式の終了がかなり遅れ、帰路に影響が出てしまったことは反省点であり、お詫びしたいと思います。

選手権クラスの競技は、スプリント、ロングともいつものように白熱したものとなり、見応えがありました。入賞した選手の皆さん、おめでとうございます。個人的には、ほぼ地元であるこの関ヶ原において関西の女子選手の皆さんが持てる力を発揮し、優勝や入賞するなどしてくれたことが何よりうれしいことでした。

初のインカレ参加となった1年生の皆さんは何を感じたのでしょうか。大学から始めた人には競技としてのオリエンテーリングの魅力、部内の仲間や他大学のライバル達と競い合うことの楽しさ、そして目標としてのインカレの厳しさの一端を感じてもらえたのであれば幸いです。自分なりの目標を定め、それを達成するために日々努力すること。それは自分を成長させることであり、勉強でも部活でも違いはありません。真剣に取り組む価値のあることです。仕事柄、多くの学生を見ていますが、そういう人は輝いて見えますし、自然と応援したくなります。

最後になりましたが、多忙な日々の合間を縫って準備を進めていただいた実行委員会並びに岐阜県協会とその関係者の皆さん、ご苦労様でした。地元関係者の皆様には、様々な面で多大なるご支援ご協力をいただき、本当にありがとうございました。主催者の日本学連を代表して、厚く御礼申し上げます。

日本学生オリエンテーリング連盟幹事長
瀬川 出



インカレロング競技が終わったあとの、表彰式までの独特な時間が好きです。

二日間の自分の結果、仲間の結果、ライバルの結果が全て出揃う。その結果に満足する人もいれば、悔しがる人もいる。感想を言い合う人がいて、仲間をねぎらう人、ライバルを称える人がいる。そんな人たちが思いを強くし、また新たな感情や決意が芽生える、あの時間。「太陽は沈み切っていないながら、まだ辺りが残光に照らされているほんのわずかな、しかし最も美しい時間帯」を「マジックアワー」と呼ぶそうですが、あの時間は私たち学生選手にとっての「マジックアワー」なのではないでしょうか。そして次のインカレに向けて、また新しい物語が始まるのだと思います。

さて、今年の秋インカレは新しい試みが多く、今まで以上に一層盛り上がったと言えるのではないのでしょうか。初の市街地スプリントはどうだったでしょうか。私にとっては、今まで走ったレースの中で最も楽しいレースでした。地図と現地を対応させた時の、それもインカレという晴れ舞台で行われている興奮は、今までのレースで一番でした。まだ依然として失格者が多い印象ですが、それでも演出を含め、インカレスプリントがいよいよ学生に定着したことを決定づけるような一日になったのではないのでしょうか。また演出にも新しい試みがいくつもありました。選手権クラスはGPSを背負って走り、会場では巨大モニターで選手を確認できました。ベストルートの試走動画とコースの解説をその場でも、また後からでもみることができました。学生選手のほとんどが、これらの演出に驚き、そして楽しんだことと思います。まさに学生最速を決める「決戦！」としてふさわしい舞台でした。

最後になりますが、そのような舞台を用意くださり、ご尽力いただいた実行委員会の皆様、ご協力いただいた地元の方々、並びに秋インカレに関係されたすべての皆様に感謝し、日本学連幹事長の言葉とさせていただきます。

2017 年度日本学生オリエンテーリング選手権大会
スプリント、ロング・ディスタンス競技部門
実行委員長
糸井川 壮大



今年も無事秋インカレが終わりました。厳しい戦いを制し、選手権者となった皆さん本当におめでとうございます。今年も学生の皆さんの熱意が感じられる素晴らしい戦いが繰り広げられたこと、そして皆さんが全力で取り組むに値する大会の運営に関われたこと一運営者としてうれしく思います。

さて、今年の秋インカレは学生の皆さんにとって初めて尽くしのインカレだったと思います。まず、一番に市街地スプリントです。はじめて学生の皆さんの前で市街地スプリントを告知した時の場の高揚感は今でもよく覚えています。今回のインカレはその期待に応えられたのでしょうか？レースの結果にはそれぞれ感想を持っていると思いますが、よく練られた高品質のコースとそれを盛り上げる演出によって総じて期待に応えられたのではないかと考えています。これから毎年のように市街地でインカレスプリントが開催されることは難しいと思いますが、今現役の皆さんがOB/OG になってインカレ運営に関わるようになった時、また市街地でインカレスプリントを実現したいと思えるような大会に今大会がなっていたらこれほどうれしいことはありません。

ロングはスタート直後に広いオープンを走るという普段と違う状況から始まりました。これに動揺した選手も少なからずいたと思います。今年は両競技ともに初めて GPS トラッキングを実施したので心的負荷は例年以上だったのではないのでしょうか。そんな中でも素晴らし走りを見せてくれた学生の皆さんは本当に格好良かったですし、選手権を走れなった人たちが憧れ、「次は自分がこの舞台に立つんだ！」と思える素晴らしい戦いだったと思います。このような舞台が、学生の熱意と OB/OG の熱意が相まってこれからも継続していくことを願っています。

演出面で今年は大型ビジョンと GPS トラッキング

によるライブ中継、現地の試走動画とルート解説、レースの定点カメラ中継など、初めての試みを多数導入しました。どの演出も観戦を非常に盛り上げてくれました。少しでも観戦の面白さが学生の皆さんに伝わっていたらうれしいです。今後もこれらの演出がいろいろな大会で導入されオリエンテーリングが盛り上がっていくことを期待しています。

最後になりましたが、本大会を開催するに当たり多大なるご協力を賜りました上石津の皆様、関ヶ原の皆様感謝申し上げます、実行委員長挨拶とさせていただきます。

1

公式成績・入賞者コメント

1 公式成績

〈スプリント〉 ME 参加人数 66			
順位	氏名	記録	学校・学年
1	種市 雅也	0:14:02	東京大学 2
2	松尾 怜治	0:14:28	東京大学 4
3	角田 貴大	0:14:43	横浜市立大学 4
4	高野 兼也	0:14:50	新潟大学 4
5	大橋 陽樹	0:15:04	東京大学 2
6	杉浦 弘太郎	0:15:06	名古屋大学 4
6	稲森 剛	0:15:06	横浜国立大学 3
8	竹内 公一	0:15:08	名古屋大学 3
9	中野 喬博	0:15:14	東京大学 4
10	齋藤 佑樹	0:15:16	早稲田大学 3
11	椎名 晃丈	0:15:18	東京大学 1
12	宮本 樹	0:15:21	東京大学 3
13	平山 遼太	0:15:22	東京大学 4
14	岩瀬 史明	0:15:23	名古屋大学 4
15	北見 匠	0:15:24	東北大学 2
16	横堀 聖人	0:15:32	東京大学 3
17	桃井 陽佑	0:15:36	慶應義塾大学 2
18	坂梨 敬哉	0:15:37	慶應義塾大学 4
19	南河 駿	0:15:39	名古屋大学 4
20	岩井 龍之介	0:15:45	京都大学 2
21	渡邊 壮	0:15:49	金沢大学 4
22	瀬川 出	0:15:53	東京大学 4
23	殿垣 佳治	0:16:06	東京大学 3
24	堀江 優貴	0:16:09	東北大学 4
25	川島 聖也	0:16:11	神戸大学 2
26	青芳 龍	0:16:12	東北大学 2
27	野田 昌太郎	0:16:15	名古屋大学 4
28	佐藤 俊太郎	0:16:16	東北大学 4
29	大石 洋輔	0:16:21	早稲田大学 1
30	谷口 恵祐	0:16:22	東北大学 2
31	川田 将太	0:16:26	慶應義塾大学 4
32	横田 智也	0:16:29	名古屋大学 4

33	湯浅 博晶	0:16:35	北海道大学 2
33	岡本 洸彰	0:16:35	東京大学 3
33	竹内 元哉	0:16:35	東京大学 4
36	楠 健志	0:16:36	筑波大学 3
37	新田見 優輝	0:16:37	東京大学 3
38	前野 達也	0:16:42	名古屋大学 3
39	谷野 文史	0:16:53	筑波大学 1
40	小原 和彦	0:17:14	東京工業大学 3
41	中西 祐樹	0:17:26	京都大学 4
42	糸 潤哉	0:17:27	東京大学 4
43	渡辺 鷹志	0:17:39	慶應義塾大学 2
44	西下 遼介	0:17:40	慶應義塾大学 2
45	和田 康次郎	0:17:45	慶應義塾大学 4
46	今泉 将	0:18:05	名古屋大学 4
47	高本 育弥	0:18:27	東北大学 3
	有賀 裕亮	DISQ	早稲田大学 4
	佐藤 遼平	DISQ	東京大学 3
	近藤 恭一郎	DISQ	京都大学 4
	下江 健史	DISQ	広島大学 2
	上島 浩平	DISQ	慶應義塾大学 3
	伴 広輝	DISQ	京都大学 3
	緒方 空人	DISQ	大阪大学 4
	伊藤 樹	DISQ	横浜国立大学 3
	加藤 岬	DISQ	東京大学 4
	大田 将司	DISQ	一橋大学 3
	堀尾 健太郎	DISQ	名古屋大学 4
	森河 俊成	DISQ	京都大学 2
	鳥居 洸太	DISQ	東北大学 2
	井上 雄斗	DISQ	東北大学 3
	稲岡 雄介	DISQ	大阪大学 3
	田中 創	DISQ	大阪大学 3
	清水 龍太	DISQ	金沢大学 4
	渡邊 寛希	DISQ	金沢大学 1
	益村 晃司	DISQ	広島大学 4

〈スプリント〉 WE 参加人数 36				〈ロング・ディスタンス〉 ME 参加人数 62			
順位	氏名	記録	学校・学年	順位	氏名	記録	学校・学年
1	佐野 萌子	0:13:39	京都女子大学 3	1	松尾 怜治	1:09:49	東京大学 4
2	増澤 すず	0:14:00	筑波大学 2	2	佐藤 俊太郎	1:11:29	東北大学 4
3	勝山 佳恵	0:14:09	茨城大学 3	3	稲森 剛	1:12:38	横浜国立大学 3
4	宮本 和奏	0:14:27	筑波大学 1	4	種市 雅也	1:13:27	東京大学 2
5	伊部 琴美	0:14:28	名古屋大学 1	5	宮本 樹	1:15:23	東京大学 3
6	伊東 加織	0:14:34	東北大学 2	6	桑 潤哉	1:16:19	東京大学 4
7	長谷川 真子	0:14:37	東北大学 4	7	瀬川 出	1:16:34	東京大学 4
8	出田 涼子	0:14:42	大阪大学 2	8	伴 広輝	1:16:42	京都大学 3
9	香取 瑞穂	0:14:48	立教大学 1	9	加藤 岬	1:17:25	東京大学 4
10	山岸 夏希	0:14:54	筑波大学 3	10	角田 貴大	1:17:29	横浜市立大学 4
11	香取 菜穂	0:15:00	千葉大学 3	11	平山 遼太	1:19:08	東京大学 4
12	木村 るび子	0:15:06	立教大学 3	12	濱宇津 佑亮	1:19:32	東京大学 3
13	長崎 早也香	0:15:11	名古屋大学 4	13	南河 駿	1:19:34	名古屋大学 4
14	森谷 風香	0:15:16	千葉大学 3	14	竹内 元哉	1:19:55	東京大学 4
15	高橋 利奈	0:15:19	日本女子大学 2	14	上島 浩平	1:19:55	慶應義塾大学 3
16	片桐 麻那	0:15:36	名古屋大学 4	16	伊藤 樹	1:20:04	横浜国立大学 3
17	伊佐野 はる香	0:16:12	東北大学 3	16	横堀 聖人	1:20:04	東京大学 3
18	三浦 やよい	0:16:17	相模女子大学 4	18	坂梨 敬哉	1:20:14	慶應義塾大学 4
19	金澤 めぐみ	0:17:06	奈良女子大学 3	19	柴沼 健	1:20:30	早稲田大学 3
20	櫻井 彩菜	0:17:18	相模女子大学 4	20	佐藤 誠也	1:21:47	東北大学 3
21	佐久間 文香	0:17:26	新潟大学 3	21	森河 俊成	1:23:38	京都大学 2
22	久野 公愛	0:17:45	日本女子大学 2	22	長岡 凌生	1:23:58	東北大学 2
23	山内 美輝	0:18:22	新潟大学 2	23	友田 雅大	1:24:31	早稲田大学 4
24	小野 花織	0:18:29	椙山女学園大学 3	24	岩井 龍之介	1:25:18	京都大学 2
25	平松 夕衣	0:18:37	横浜市立大学 3	25	谷口 文弥	1:25:30	東京大学 3
26	山下 桃子	0:18:39	早稲田大学 2	26	長谷川 望	1:26:07	早稲田大学 2
27	青島 千映里	0:18:43	京都女子大学 4	27	田中 創	1:26:19	大阪大学 3
28	鈴木 友紀乃	0:18:55	新潟大学 4	28	三浦 一将	1:27:19	名古屋大学 2
29	羽鳥 咲和	0:21:31	京都女子大学 2	29	近藤 恭一郎	1:27:31	京都大学 4
30	杉原 未奈	0:22:16	奈良女子大学 4	30	平原 誉士	1:27:37	京都大学 4
	岡本 ひなの	DISQ	奈良女子大学 3	31	小林 大悟	1:27:39	筑波大学 4
	小竹 佳穂	DISQ	筑波大学 2	32	前野 達也	1:28:12	名古屋大学 3
	山森 汐莉	DISQ	金沢大学 3	33	大田 将司	1:28:33	一橋大学 3
	鈴木 彩可	DISQ	金沢大学 4	34	高野 兼也	1:28:34	新潟大学 4
	横山 結女	DISQ	椙山女学園大学 3	35	小平 修	1:29:23	東北大学 3
	立花 和祈	DISQ	実践女子大学 3	36	大橋 陽樹	1:29:39	東京大学 2
				37	齋藤 佑樹	1:30:05	早稲田大学 3

38	本村 汰一郎	1:30:43	金沢大学 3
39	上野 康平	1:31:14	東京工業大学 3
40	殿垣 佳治	1:31:25	東京大学 3
41	北見 匠	1:31:27	東北大学 2
42	椎名 晃丈	1:31:40	東京大学 1
43	小原 和彦	1:33:08	東京工業大学 3
44	今泉 将	1:33:33	名古屋大学 4
45	久米 悠介	1:35:57	東北大学 2
46	林 雅人	1:36:57	名古屋大学 3
47	下江 裕貴	1:37:36	広島大学 4
48	大石 洋輔	1:38:13	早稲田大学 1
49	小泉 惇平	1:38:25	東北大学 3
50	松本 萌希	1:38:29	京都大学 3
51	青芳 龍	1:39:38	東北大学 2
52	富田 涼介	1:42:18	東北大学 4
53	岡本 洸彰	1:42:53	東京大学 3
54	渡邊 壮	1:43:18	金沢大学 4
55	中谷 鴻太	1:43:56	東京工業大学 4
55	三好 将史	1:43:56	早稲田大学 2
57	高見 澤翔一	1:44:05	一橋大学 2
58	長井 健太	1:48:57	東京農工大学 3
59	杉浦 弘太郎	1:52:27	名古屋大学 4
60	堀江 優貴	1:56:43	東北大学 4
	是永 大地	DISQ	名古屋大学 4
	下江 健史	DISQ	広島大学 2

12	鈴木 彩可	1:11:08	金沢大学 4
13	山森 汐莉	1:12:04	金沢大学 3
14	櫻井 彩菜	1:12:35	相模女子大学 4
15	山岸 夏希	1:12:52	筑波大学 3
16	村田 茉奈美	1:13:22	フェリス学院大学 3
17	三浦 やよい	1:14:25	相模女子大学 4
18	高橋 利奈	1:14:36	日本女子大学 2
19	立花 和祈	1:14:49	実践女子大学 3
20	河村 優花	1:16:02	名古屋大学 2
21	平松 夕衣	1:18:17	横浜市立大学 3
22	森谷 風香	1:19:33	千葉大学 3
23	木村 るび子	1:20:44	立教大学 3
24	小山 智子	1:21:00	千葉大学 4
25	高瀬 優衣	1:21:26	金沢大学 2
26	大類 茉美	1:21:45	フェリス学院大学 4
27	成澤 春菜	1:24:20	フェリス学院大学 4
28	藤井 菜実	1:26:17	椛山女学園大学 4
29	増田 風見花	1:30:09	実践女子大学 3
30	佐久間 文香	1:35:10	新潟大学 3
31	和田 あゆみ	1:35:52	慶應義塾大学 3
32	久野 公愛	1:51:56	日本女子大学 2
	古谷 直央	2:45:52	横浜市立大学 2
	香取 菜穂	DISQ	千葉大学 3

〈ロング・ディスタンス〉WE 参加人数 34			
順位	氏名	記録	学校・学年
1	勝山 佳恵	0:56:22	茨城大学 3
2	増澤 すず	0:58:37	筑波大学 2
3	臼井 沙耶香	1:01:24	東北大学 3
4	宮本 和奏	1:02:07	筑波大学 1
5	長崎 早也香	1:05:38	名古屋大学 4
6	出田 涼子	1:07:23	大阪大学 2
7	伊佐野 はる香	1:07:48	東北大学 3
8	塚越 真悠子	1:08:18	大阪大学 2
9	佐野 萌子	1:09:09	京都女子大学 3
10	高橋 友理奈	1:09:17	東北大学 3
11	長谷川 真子	1:10:53	東北大学 4

2 入賞者コメント

2.1 スプリント

➤ 男子選手権

優勝 東京大学 2 年 種市 雅也



昨年度は入賞を目標に走り 3 位入賞できました。当時の自分にとっては十分すぎるほど良い結果でした。しかしなぜだか分かりませんがいまいち喜びきれませんでした。トップの伊藤樹さんとはかなりのタイム差があり、入賞を目標に走った自分では優勝には程遠いなと感じました。去年のインカレスプリントの日から、来年こそは優勝を目指して練習して勝つべくして勝ちたいと思うようになりました。勝ちたいと思えば思うほど失敗が怖い気持ちも強くなりました。インカレが近づくにつれ逃げたい気持ちも増してきました。当日の緊張感は去年よりもはるかに大きかったです。それでも優勝したい気持ちとこれまでの練習の日々を思い出すと力が湧いてきました。スプリントはスタートしてから地図に対応するまでが一番大事だと思っているので、スタート前はとにかく地図に集中するぞと思っていました。スタ 1 で少しミスってしまいましたが、そこからはただ目の前の 1 レッグ 1 レッグに集中して最後まで走り切れました。ゾーンに入った感じで、いつも以上の集中力を発揮できました。たった 14 分のレースではありましたが、一瞬たりとも気が抜けず短いよ

うで長いレースに感じました。ゴール後は樹さんの結果が気になりライブリザルトを見ていました。優勝が決まった瞬間はいまいち実感がなかったです。とても不思議な気分になりました。優勝カップをもらい、後日地図を見てラップを見ると現実感が出てきました。とにかく嬉しい。心の底から嬉しかった。今回優勝できたのは OLK には競い合う人がいて、協力して対策してくれる人がいて、応援してくれる人がいたからだと思います。ありがとうございました。来年も優勝を目指して頑張ります。いつでもチャレンジャーの心を忘れずに。初の街中スプリントの試み、GPS トラッキングとても良かったです。素晴らしい舞台を提供していただき本当にありがとうございました！

準優勝 東京大学 4 年 松尾 怜治

まず初めに、インカレスプリント 2017 を運営して下さった運営者の皆さま、最高の舞台を用意していただき本当にありがとうございました。本格的な市街地スプリントということで、かなりの苦勞を窺えましたが、とても楽しいコース・大会でした。また、多大なサポートと応援をしてくださった OLK 関係者の皆さまにも改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

私は、陸上部とは縁もなく、体力に自信タイプでも無い割に、スプリント競技が得意でした。ナビゲーションが追い付くスピード、ギリギリを攻めた走りで最後まで走り切る、そんなスプリントに魅力を感じ、いつしかのめり込みました。単に走力では敵わない相手に勝てる、オリエンテーリングの魅力そのままをこの競技にも感じていました。

昨年度、優勝を目指して走った初めてのインカレスプリントは全く良いレースができず 8 位に終わり、後輩たちが表彰されている姿をただ眺めていただけでした。あの悔しい思いを忘れることなく、スプリントもロングも優勝を目標にこの秋インカレまで取り組んできました。

結果は準優勝。多くの失格者に助けられた形とはなりましたが、規則を守って最後まで走る競技者の義務を守った結果なので、素直にうれしく思います。優勝した種市選手には全く及ばず、完敗でしたが、負けたのが彼だけで良かったです。種市選手をはじめとする OLK メンバーとの切磋琢磨のおかげでここまで上り詰めることができました。本当に感謝してもしきれません。

最後に、スプリント競技は単純な走力がかなり重要ではあるものの、私ほどの走力でも上を目指

せる奥深い競技です。より一層スプリント競技に注目が集まり、もっと盛り上がってほしいと切に願います。後輩の皆さん、ぜひ、この舞台を目指して頑張ってください。そして、このような最高の舞台がこれからも続きますよう、心よりお祈り致します。

第3位 横浜市立大学4年 角田 貴大

インカレスプリントの選手権を走るのは今年で3回目でした。第1回、第2回ともにテクニカルなコースが組まれ、それに続く今年のスプリントは市街地で行われるということで、とても楽しみにしていたレースでした。優勝設定タイムから走力が鍵を握ることがわかっていたので、事前に家の周りの地図でコースを組んでスピードを意識して走る練習をしていました。優勝できたら嬉しいとは思っていましたが、実力的には入賞できたら十分ぐらいに思っていたこともあり、当日はあまり気負うことなくスタートできました。後半になり疲れを感じたときに、ここで粘れるかどうかで勝負が決まると思い、諦めずに走りました。その結果3位入賞することができて素直に嬉しく思います。これまで自分は特別に走力があるというわけではなかったのですが、しっかり走りきれたと思えるレースができ、練習の成果が出せてとても嬉しいです。また、同時に他の選手との差も実感し、まだまだと思う部分もたくさんあり、これからも精進していきたいと思いました。

最後になりますが、このインカレの舞台を準備していただいたこと、たくさんの応援をいただいたことに感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

第4位 新潟大学4年 高野 兼也

昨年のインカレミドル・リレーに引き続き、スプリントでも入賞することが出来ました。私が1年生のときに部内誌にインカレで絶対に入賞すると堂々と宣言しましたが、まさかそのときは3種目で入賞できるなんて決して思っていなかったと思います。

今年は学業や新大会の準備などの兼ね合いで満足できる練習ができませんでした。しかし、それはみんな同じであると思い、限りある時間を何とか有効に活用して練習しました。特に有効だったと思われることは新大会の地図調査と試走です。朝から夕方までフォレストの地図調査をし、夕方からスプリントの試走を毎日行っていました。そのおかげで市街地スプリントという日本では慣

れない環境に人よりも順応できて、当日のレースにスムーズに活かすことができたと思います。

努力すれば必ず報われるとは思いますが、大学生からオリエンを始めて4年間勝つために必死こいて努力すれば、入賞できるレベルにまで成長できるということを証明できたと思います。私は自分にオリエンの才能があるとは思いませんが、私より才能がある人はたくさんいると思うので、ぜひ本気で入賞目指して頑張ってみてはいかがでしょうか。きっと得られるものがあると思います。

最後に入賞が決定したときに自分以上に喜んで祝福してくれた同期、声を枯らして応援してくれたみんな、いままで私に関わってくださったみなさま、本当にありがとうございました。

第5位 東京大学2年 大橋 陽樹

今回、5位入賞という結果には、自分でも驚きました。入賞するだけの実力があったとも、それに見合う努力をして来れたとも思っていないですが、縁あって入賞できたことは本当に嬉しく思います。まだまだ未熟な私が幸運にも入賞することができたのは、私を支えて下さったたくさんの方々のおかげです。

私は直前にならないと頑張れない性分なので、放っておかれるとインカレに向けてもろくに準備をして来れなかったと思います。実際、予想コースをたくさん読んで、航空写真とにらめっこして、ストリートビューで散策しつくす、ということをやったのはインカレ直前の1週間でした。1週間前に行われた地図読み会でみんなが盛り上がっている話についていけず、その熱に押されて自分もやらねば、と思わせてもらったおかげです。地図を作ってもらったり、対策法を教えてもらったり、OLKの人にはとても感謝しています。夏休み明けからトレーニングを重ねてこれたのは一緒にトレーニングをしてくれる人がいたおかげ、毎週途切れることなくオリエンをしてこれたのは運営者のおかげ、インカレ当日スムーズに動けたのは計画を立てたり取りまとめたりしてくれた人のおかげ、レースを頑張れたのはそれまでに支えてくれたすべての人のおかげです。最高のコースを、最高の舞台で走らせてもらって、改めてオリエンターリングが好きだと感じました。インカレの舞台を用意して下さった運営者や関係者の方々にも感謝しています。たくさんの人に感謝するとともに、期待してくれる人に応えられるよう、今後もっと頑張っていきたいと思っています。

第6位 名古屋大学4年 杉浦 弘太郎

この度は、インカレスプリント6位入賞という結果を残すことができ大変嬉しく思います。枠を獲得することを目標に臨んだレースでしたが、まさか選手権メダルまで獲得できることになるとは思ってもいませんでした。2年前の富士見高原スプリントではスタート直後のビジュアルで緊張してしまい散々たる結果に終わってしまいました。今回は終始リラックスした状態で自分の実力を出し切りレースを終えることができました。それもこれも、毎週部員のためにキャンパススプリントを開き、名大のスプリント力向上に貢献してくれた主将の前野君のお陰だと思えます。また、私はピザ配達のアルバイトをしており、日頃から市街地を時速50kmのスピードでナビゲーションする練習をしていたので、それが今回の結果に結びついたのではないかと考えています。

最後に、今まで切磋琢磨し互いに高め合ってきた同期のみんな、入賞に際して多大なるサポートをしてくださったオフィシャルの皆様、ありがとうございました。

第6位 横浜国立大学3年 稲森 剛

この秋インカレでは、スプリントよりもロングに重きを置いていました。スプリントはほとんど完璧なレースをしても入賞できるかできないか微妙な所である一方、ロングではそれなりにミスしても入賞は出来るし、良いレースが出来れば十分に勝ちを狙えると思っていました。しかし、ロング重視の中でも、やはりスプリントでも入賞したいという思いがあり、ストリートビューと航空写真で地図を作製して地図読みを行ったり、横国のキャンパスや近所の公園でスプリントのレースの練習をしたりとスプリント対策も行いました。

レースを終えた時は、もしかしたら入賞しているかもしれないと思いましたが、そんなに遅くないスタートであったのに暫定6位という実況が聞こえ、駄目だったんだなと思いました。その後、多くの選手の失格の報を聞き、何やら入賞しているらしいとなった時は、複雑な心境でした。スプリントで勝つことをずっと目標にして来ていることを知っていた選手達、特に伊藤樹や上島、それに他大の選手も、自分よりも速いタイムを出しながらも失格になり、僕は入賞に滑り込みました。JWOCなどで市街地スプリントの経験が多く、青黄テープや誘導区間への注意もしていたから、入賞の尻尾を掴むことができたのだと思います。

スプリントが得意ではない僕が勝った第1回の

インカレスプリントから2年間、インカレスプリントのレベルは物凄く上がっているように感じます。この流れで来年のインカレスプリントは、さらにレベルが高くなるうえに、今年のインカレがあったのでルールへの理解も進み、スプリントが速くない僕にとって厳しいレースになると思います。その中で結果を残せるようにスプリントの練習も行っていきたいと思います。スプリントは苦手ですが好きです。

最後に、テレインとコース、GPS実況がそろった最高の舞台を与えてくださった運営者の皆様、本当にありがとうございました。

➤ 女子選手権

優勝 京都女子大学 3 年 佐野 萌子



一昨年は完走したけれど最下位、去年はビジュアルでパニックになって DISC とインカレスプリントにいい思い出がなく、優勝できるとは正直思っていませんでした。なんとなくインカレに苦手意識があり、みんなの応援を自分の力にできない、大舞台で実力を出し切れない自分が嫌だと思っていた。また、JWOC に一緒に行った仲間がインカレの大舞台で活躍していて、私もそろそろ結果を残さないと、と焦っていました。このように気持ちはもやもやとしていましたが、これをすっきりさせるにはインカレで結果を残すしかないと思い、トレーニングに力を入れて準備はしっかりとしてきました。

今年は市街地スプリントだったので、去年以上に走力とナビゲーションのバランスを意識してトレーニングをしました。私は走りにナビゲーションが追いつかなくなることがよくあるので、地図読みの中からシンプルなルートチョイスを心がけました。また、ストリート O やキャンパススプリントでナビゲーションを途切れさせない練習をしました。それまでストップ&ゴーに近かったので慣れるまで苦労しましたが、集中力が上がり一段階成長できたと思います。

本番では、インカレで失うものは何もないと開き直ることができたので、結果的に気持ちも体も良い状態で臨めました。同期の予想レッグが当た

ったこともあり、レース中も気持ちに余裕をもって走れました。そのおかげで準備してきたことがしっかりレースに出せたと思います。満足いくレースができて優勝できたので本当に嬉しかったです。次の目標は優勝を狙って優勝することです。今年の優勝がまぐれだとは思っていませんが、来年は追われる立場でプレッシャーに打ち勝って優勝できるよう頑張りたいと思います。

最後になりましたが、運営者の皆様、一緒に練習をしてくれたりサポートや応援をしてくれた京大京女の方々、本当にありがとうございました。

準優勝 筑波大学 2 年 増澤 すず

今回の目標は優勝することでした。今年は JWOC、AsJYOC に参加し、どちらもスプリントに重きを置いていましたが、散々な結果でした。練習でもいつもどこかのレッグで飛んでしまう。練習してももうまくいかなくて、優勝する、だなんて目標が高すぎるのではないかと落ち込み自信を失いました。しかしこのままでは入賞すらできないと思い、朝や空きコマにひたすら学内 O をしました。毎回ナビゲーションができないスピードで走ってミスをしてしまうので、意識して走るスピードを抑えて地図をしっかりと読むことに重きを置いて練習しました。本番は、やはりオーバーランをしてしまったり、焦って隣ホに飛びついてしまったり、いいレースができたとはいえませんが、たくさんの人におめでとうと言ってもらえて嬉しく思うと同時に、やっと結果を残すことができてほっとしました。これが今の自分の実力として、これからももっと努力していきます。優勝の壁は厚かったです。

学内 O のコースを組んでくださったオフィシャルさん、ルート検討を一緒にしてくれた部員みなさん、運営者の皆様、ありがとうございました。来年は優勝します。

第 3 位 茨城大学 3 年 勝山 佳恵

自分の中ではベストなレースが出来ました。いけるかもって思ったけど結果は 3 位。走り負けしました。入賞はとても嬉しいですが、優勝を目指していたので悔しさが残ります。走りでも負けない選手になりたい、そう思いました。

レースに向けては、予想地図でイメージをつくりそれに向けたスピード重視のトレーニングをしました。スタート地点ですでに会場の応援が響いていて緊張しましたが、そんな緊張感の中走れるのもインカレだけだと思って楽しみました。普

段めったにできない市街地スプリントはとても楽しかったです。大会関係者の皆様、茨城大学の皆さん、応援して下さいの方々、本当にありがとうございました。来年は最後のスプリントです、強くなります。

第4位 筑波大学1年 宮本 和奏

今回、初めてのインカレで目標は優勝を目指すくらいの勢いでいました。当日は、緊張はしなかったものの自分がどの程度大学生として結果を出せるかが不安と言うか、気がかりでした。走っているときは普段通りベストラートを見つけることを意識して、特に焦ったりはしませんでした。レース終盤で会場に近づいた時、声援が聞こえてきて感激すると同時に、特にミスはしなかったものの早くゴールしなくてはと焦りの気持ちが少し出てしまいました。こんなにも応援してもらって走れることは今までのなかったで、仲間に応援してもらえてとても嬉しかったです。結果は4位で、1位とのタイム差もかなりありました。あとはなんといっても1秒差無いタイムで1年生の伊部選手が5位に入ったことが、正直かなりびっくりしました。なんとか勝つことができて安心した気持ちと、次回勝負したときには負けるのではとの思いもありました。自分の課題ははっきりしているので、来年もインカレに出場し、さらに上の順位になれるよう、そして同学年に負けないように頑張りたいです。

応援して下さいの皆様、ありがとうございました。

第5位 名古屋大学1年 伊部 琴美

私は今回初めてのインカレで、最初はインカレがどんなものか全然わからないままセレクションを通り選手権クラスを走れるようになりました。初めてインカレの動画を見たときは応援がすごくてその時から緊張したのを覚えています。レース前は、いろんな人が声をかけてくれて応援してくれて、気楽に楽しんできてくれたのがすごくうれしかったです。レースは市街地でやれるということでめったにない機会なのでそういう意味でも楽しみでした。つまらないミスをしてしまったところもあったけど全体的にはいつものように走れて、タッチフリーの楽しさも味わえてよかったです。心のどこかで入賞したいなとは思っていたけどまさか入賞できるとは思わず、続々と後から走る人の順位が決まっていくのをドキドキしながら見ていて、入賞が決まった瞬間は本当

にうれしかったです。今回入賞できたのは、先輩たちが練習会やトレを開いてくれたりやる気のある人が周りにたくさんいたおかげでとても感謝です。来年は、1年生で入賞を果たせたので、失速せずもっと順位を上げられるように頑張ります。ありがとうございました。

第6位 東北大学2年 伊東 加織

はじめまして。東北大2年の伊東加織です。わたしが北東のスプリントセレを通過できたのは、強い先輩が怪我をして出場できなかったから、また幸運に恵まれていたからでした。「このままだとインカレでひどい結果になる。ビリはいやだ。」と思い、セレが終わってから走ったり、地図を読んだり、キャンパススプリントしたりしました。レース前はかなり緊張していましたが、あまりミスすることなくいつもに比べるとよい内容だったと思います。市街地を走れてとても楽しかったです。入賞するなんて想像もしていませんでした。びっくりしましたが、本当に、本当に嬉しいです。しかし、まだやれることがたくさんあるので、頑張っていきます。

最後に、運営者の皆さま、応援して下さった皆様、ありがとうございました。

2.2 ロング・ディスタンス競技部門

➤ 男子選手権

優勝 東京大学 4 年 松尾 怜治



まず初めに、インカレロング 2017 を運営してくださった運営者の皆さま、最高の舞台を用意していただき本当にありがとうございました。関ヶ原の旧図を予習する際、どんなコース、トレインなのかと期待をしていましたが、その期待を超えとても楽しいコース・トレインでした。また、多大なサポートと応援をしてくださった OLK 関係者の皆さまにも改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

インカレロングの選手権という最高の舞台で、そして 4 年生として最後のチャンスで、優勝という最高の結果を残すことができ、とても嬉しく思います。東大としては結城さん以来 5 年ぶりのロング制覇、稲森選手の連覇を止めることもでき、大変光栄に思います。インカレ当日はあまり実感がわいていませんでしたが、インカレ動画や OK-info の記事を見返すことで実感を得る日々が続いています。メディアを運営してくださっている方々にも感謝申し上げます。日々のモチベーションに繋がっているので、是非継続していただければ幸いです。

スプリント同様、このインカレロングは優勝を目指してトレーニングを続けてきました。昨年度は 8 位と、自分の実力を出し切ったものの上位とは大差で敗れ入賞ラインには僅かに及ばず、悔し

い思いをしました。それ以来、「勝つ」レースをするべく、試行錯誤を重ねてきました。OLK 内外のライバルたちも着実に実力を伸ばしており、日々のトレーニングも熱が入りました。そして最後は、本番にいかにも実力を出し切れるかに注目し、コンディションやメンタルを最高の状態に持って行くことに集中して、良い緊張感を持ってレースに臨むことに成功しました。

秋インカレは、スプリントで準優勝、ロングで優勝と、オリエンテーリングに出会った頃の自分では想像もつかないほどの成績を残すことができました。これは私だけの力で成し遂げたのではなく、OLK 全体の力、応援してくれた皆さんの力で勝ったと感じています。声援が力になりました、ありがとうございました。

最後に、今後もこのような素晴らしいインカレロングの舞台を継続して開催できるよう、祈念いたします。また来年以降は後輩の皆さんのアツい走りが見られることをとても楽しみにしています。

準優勝 東北大学 4 年 佐藤 俊太郎

3 年半前にオリエンテーリングを始めたばかりの頃は、インカレの選手権クラスははるか雲の上の舞台だと思っていました。選手権入賞なんて夢のまた夢です。4 年生のインカレ選手権クラスで準優勝するというのを当時の僕に話してもきくと信じてもらえないでしょう。そのくらい、自分でも驚くほどの成長を実感しています。そして、自分が今まで見てきた活躍する 4 年生の姿を、今度は自ら見せることができました。偉大な先輩方のあとに続くことができ嬉しく思います。

今回のレースは、多少のミスも含め自分の力をほぼ出し切ることができたと思います。ただ一つの心残りは 10 ポで脚がつり始めたせいでレースの残り半分をゆっくり走ってしまった点です。今まで自身の体力やピーキングに自信を持っていただけにより一層悔しさを感じます。技術的な部分も合わせて、春インカレに向けてまた努力を重ねていきたいと思っています。

最後に、素晴らしい舞台を用意してくださった運営者の皆さん、指導してくださった OB の方々、はちきれんばかりの声援を届けてくれた部員みんなに感謝を述べたいと思います。ありがとうございました。

第3位 横浜国立大学3年 稲森 剛

勝つことだけを目指して走ったロングでした。3位という結果がとても悔しいです。敗因は、自分の現状を分析し足りなかったこと、向き合えていなかったことだと思っています。勝つためには序盤からペースを上げていかなければいけないと思い込んでいて、飛ばし過ぎました。いつもロングで良い結果を出すときは、序盤遅めでミスを少なく走り、終盤に徐々に順位を上げていくレースをしていたのに、今回は逆のことをしていました。松尾さんの話を聞いて、自分は勝てるだけの準備をしたつもりになっていただけで、全然足りなかったなと思っています。

負けたレースでしたが、得られたものは多かったです。上に書いたこともそうですし、レースに向けてのトレーニングにおいても今までにない経験を得ることができました。今回のトレインは急峻で登りが多く、登坂力の弱い僕にとって苦手なタイプであることが分かっていました。そのため坂を多く走ったり、ジムに行って筋トレをしたりするなどの対策をしたところ、登りにかなり強くなることが出来ました。鍛えれば登りに強くなれるということを初めて実感させられました。

このコメントを書いている今、秋インカレから1ヶ月半が経ち、春インカレまでは2ヶ月半になっています。この1ヶ月半はいい調子でトレーニングもオリエンテーリングもできています。この調子で春インカレに向けて頑張ります。今までミドルではギリギリで入賞争いしかしたことがないので、次のミドルでは優勝争いできるような準備をして挑みたいと思います。

リレーでの優勝もここ最近の3年間、横浜国立大学オリエンテーリング部が目指してきたことです。最近、僕と伊藤樹以外の同期や後輩部員に大きな成長がみられるので、リレーも楽しみです。

第4位 東京大学2年 種市 雅也

入賞を目標にレースに挑み、4位入賞できたのでとても満足しています。昨年度4年生たちの熱い走りを見て感動したのをよく覚えています。自分も来年こそは選手権で走って入賞したいなと思っていました。あわよくば今年はロングも狙いたいとは思いますが両方狙うのは難しく諦めてしまいました。スプリントもロングも両方とも優勝を目指して走った松尾さんは本当にすごいと思います。自分の中でロング競技が一番苦手意識があり、インカレ前もミドルだと速いのにならぬと遅いことが多かったです。インカレ3週間前の合

宿であまりにもひどいレースをしてしまいどうすればいいのかわかりました。オフィシャルさんに相談して修正できるところだけ直してなんとかインカレに間に合わせようと思いました。15000への対応とサムリーディングを徹底するために走るときはなるべく地図とコンパスを持ちました。その成果があったのか1週間前の対策練で松尾さんに勝ちました。自信はついたもののどこまでやれるか未知数だったのでとにかく自分の今出せる最高の走りを目指しました。結局最高の走りはできませんでしたが、最後まで諦めずに走り切れたので良かったです。来年は表彰台の一番高いところを目指して、一から鍛えなおして頑張ります。

最後に、素晴らしいコース、舞台を提供していただきありがとうございました！記憶に残る最高の2日間でした。

第5位 東京大学3年 宮本 樹

久しぶりにインカレ選手権で入賞することができました。今シーズンのロングレースでは夏の東海インカレ以降まあまあいい成績を出すことができていたので、無難に走ることができれば入賞できるかなという気持ちで臨みました。ロング・ディスタンスは少し速めのジョギングをすることが無難な走りにつながり、今シーズンの楽しいレースにつながってきました。今回のレースも初めて入るトレインということもあり、非常に楽しむことができました。やはりオリエンテーリングは楽しいです。オリエンテーリングの上達には、オリエンテーリングをすることが重要であると考え、毎週1レース以上走ることを目標に取り組んできました。この取り組みは引き続き継続していくつもりです。

今回の地図調査では、レーザー測量を用いているということといい地図で走れたことがとてもうれしいです。このような素晴らしい大会を開いていただいた実行委員会の皆様に御礼を申し上げてコメントとします。

第6位 東京大学4年 桑 潤哉

4年生になるタイミングで、1つ上の代の先輩たちから「お前ならロングの入賞狙える」「インカレの入賞は意外と自分の手の届くところにあるから」と鼓舞していただいたことから、この現役最後のインカレロングで入賞するために走り続けてきました。

インカレ前は悪天候に悩まされたり、直前のスプリントの対策練で頭を割る怪我をしてしまうア

クシデントも重なり、ロング本番は三週間ぶりのフォレストのレースになってしまいました。それでもこれまで積み重ねて来たものを信じて走りることができました。自分でもよく頑張ったものだと思います笑。

1 年生の時の初めてのインカレロングでは、OLK の先輩が何人も表彰台にあがっていました。その姿を見て憧れていたこの舞台で自分が表彰台に立つことができ、素直に嬉しかったです。競い合ってきたライバル、応援してくれた仲間たち、献身的にサポートしてくださった OB・OG さん、たくさんの人たちのおかげでここまで来れました。この最高の舞台を準備してくださった実行委員会の皆様を含め、たくさんの人に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

レースは良くも悪くも自分の実力を出せたと思いますが、途中積算 6 位でも 2 分後の稲森さんに追いつかれたり、終盤に力尽きて後輩 2 人に走り負けたりと、まだまだレベルアップが必要だなと思わされました。今回のロングを糧に、もっと速くなって最後の春を迎えたいと思います。卒業までまだまだ頑張ります！

➤ 女子選手権

優勝 茨城大学 3 年 勝山 佳恵



最高の舞台でベストなレースができたことを嬉しく思います。

今回は苦手なロングレグを潰すために組んで頂いたコースで何回もルート検討しました。そのうち似たようなレグが複数あってルートチョイスに役立ったので、事前の対策の大切さを実感しました。メンタル面では、インカレを特別なものと考えず目標への通過点だと思って臨みました。レースの目標も、「プランを立てきってから動き出す」と普段の流れでいきました。前回の結果や色の違うゼッケンなどプレッシャーを感じることはありましたが、それでも普段通り出来たことが結果につながったのだと思います。

今回のインカレを通してさらにモチベーションが上がりました。もっともっと強い選手になります。最後に、インカレに向けて指導して下さった先輩と一緒に二冠目指して頑張った仲間感謝しています。来年も優勝します。

準優勝 筑波大学 2 年 増澤 すず

今回は入賞を目標にレースにのぞみました。1年前のインカレロングは表彰台にさえ登れませんでした。初めてのインカレ新人クラスだしそんな気にすることないでしょう、という人もたくさんいると思いますが、負けたことが悔しくて悔しく

て仕方がなくて、表彰台の上で輝いている選手達を見て、来年は絶対選手権クラスに出て入賞しようと思えました。

迎えた本番、オフィシャルさんのおかげで全く緊張せずにスタートすることができ、前半は多少ミスをしてしまいましたが後半は集中してとても楽しく走ることができました。登りでバテたり、呼吸が苦しくなったり足が動かなくなったりすることが一度もなく走りきれたのは夏のトレーニングのおかげだと思います。本当にあっという間に終わってしまいました。まさか準優勝できるとは思っていなかったのも素直にうれしいです。しかし自分の満足のいくレース内容ではなくまだまだ伸びしろがあると感じたので、来年に向けてこれからも頑張っていきます。

最後に、このような素晴らしい舞台を用意してくださりありがとうございました。私はまだまだこれからです。

第 3 位 東北大学 3 年 臼井 沙耶香

このようなコメントをかかせていただき誠にありがとうございます。今回のインカレロングは私にとって忘れられない重要な大会となりました。このような素晴らしい大会を開いてくださった、実行委員長の糸井川さんをはじめ、運営に携わった OB、OG の皆様、本当にありがとうございます。市街地スプリント、本当に楽しかったです。楽しすぎて、ロングのことを考えず、全力で走ってしまいました。またロングでは、オリエン中で山に登頂するという貴重な経験ができました。そして、GPS での観戦もとても面白かったです。普及部長として観戦ガイドでより一層インカレを盛り上げていきたいという気持ちが強くなりました。次の観戦ガイドも頑張ります！

最後に自分のことをかかせていただきます。今回入賞できたのは、東北大学の皆様のおかげです。山に登頂したときは、自分の入賞はおろか枠をとることもできないと考えていました。ですが、レースが終わり疲れていながらも頑張っただけで応援してくれる皆さん、実力があながち少なくて走れない同期や後輩のことを思うと、こんなひどいレースで終われないと力が湧きました。そして、ビジュアルでの応援でさらに背中が押されました。まだまだ未熟者ではありますが、春インカレも頑張りたいと思います。

第 4 位 筑波大学 1 年 宮本 和奏

ロングでは前日のスプリント同様に、目標はでっかく優勝するとしていましたが、実際、自分がどの程度の順位に入れるのか不安がありました。スタート時刻が比較的早めだったのでトップゴールを目指していたのはもちろん、後ろからスタートしてくる選手に抜かれたら負けだとも思っていました。レース中は、小さいミスはしたものの大きなミスはなくそこまで遅いレースをした感覚はありませんでした。しかし結果はスプリントと同様に4位で、今の実力でさらに上位になれるかと考えたら、それはないだろうと思います。ロングなので走るレッグが多いのはわかっていましたが、ビジュアルについたときにはすでにヘロヘロの状態、ラス前からゴールまでも全然走れませんでした。自分の課題は明確な上に、周りにはインカレ出場レベルの選手がたくさんいるのでその環境の中でより速く走れるように高めていきたいです。また、小さいミスをなくせる様にもしていきたいです。

応援してくださった皆様、ありがとうございました。

第5位 名古屋大学4年 長崎 早也香

最高のテレインで最高の地図で全国の速い子たちと競える数少ない機会。このインカレを私はとてもとてもとても楽しみにしていました。何を書いていいかわからないので、レース当日のことを順に書いていこうと思います。

まず選手権待機所でこんなにわくわくしていたことは初めてです。オフィシャルの方に用意していただく食料とは別にバナナ2本、カロリーメイト1箱、ウィダー2つ、ミニクリームパン5個入りを持ちこんで万全の態勢を整えました。

スタート地区に向かい、スタート場所でカメラを見つけてカメラ目線を送ったのですが会場のスクリーンには映ったのでしょうか。とても気になります。

レースの中盤あたりから数分前の選手を見かけようになり、枠をとれるのではないかという気持ちになってきました。

最終的に暫定3位で帰ってこれて結果的に5位入賞が確定したときとても嬉しかったです。

実は今まで出場した選手権で20位より上をとったことがなく、今回もぎりぎり枠をかすめ取ることを目標としていました。入賞も嬉しいですが

まずは今まで食いつぶしてきた学連枠を初めて獲得し東海学連に恩返しをできたことに安堵しています。

最後になりますが、応援やサポートをしてくださったOBOG・コーチの方々、名前の皆さんありがとうございました。

第6位 大阪大学2年 出田 涼子

今回のインカレロングは我が関西での開催で、ここでいい成績を出さなかったらいつ出すのと思っていたので、6位に入賞できてとても嬉しいです。

レースは緊張せずに挑めましたが、2ヶ所は明確にミスをしてしまい、10番目出走の暫定3位帰還だったので、入賞は無理だろうと思いました。ところが、予想に反して、終盤になっても6位で踏みとどまっていて、欲が出てきました。ここまでできたら入賞したい、と。

最後、伊佐野さんが帰ってくるかこないかで入賞するかが決まるとなった時は本当に手に汗握って祈りました。結果、私の入賞が決まったときには、近くの仲間と文字通り手を取り合って喜びました。あそこまでドキドキしたのも、あそこまで喜んだのも人生初だったと思います。

今回は6位になれて大歓喜しましたが、それは結局自分が入賞できると思えるほど準備をできなかったからです。前週に風邪を引いて走れなかったのも、地図読みが思ったより進まなかったのも、自分で自分に失望していました。

次回からは、今回受けたテレインの恩恵を受けられず、より厳しい戦いになることが予想されます。それでもなお、6位なんかじゃ満足できないと言えるくらい万全の準備をして、さらなる高みを目指したいです。

また、今回初めて応援が力になることを実感できました。ここで力を振り絞るしかないのに、これ以上早く体を動かせないというラス前→ラスポ→ゴールの局面で、みんなの応援を聞いたら、よりスピードを出せたあの感覚は忘れられません。応援してくれた皆様、本当にありがとうございました。

最後になりましたが、お忙しい中、大いに盛り上がる大会をつくりあげてくれた運営者の方々に深く御礼申し上げます。

2

スプリント競技結果・解説

スプリント競技部門 コース設定者 五百倉 大輔

1 はじめに

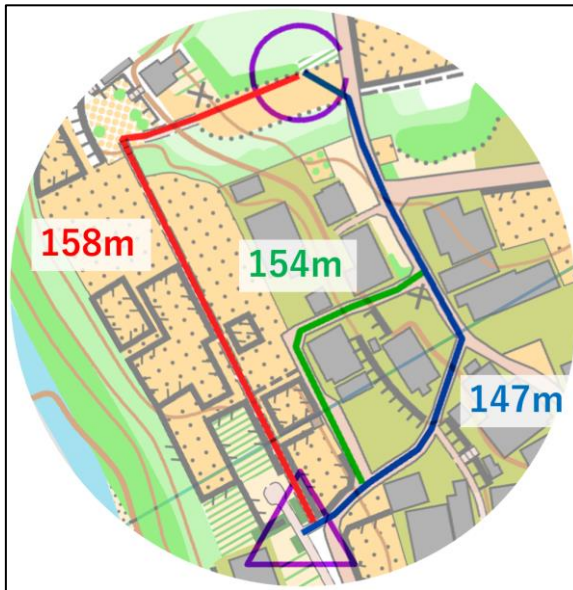
今回は第3回のインカレスプリントであり、日本国内では前例のない規模のシティスプリントの大会であった。コース設定にあたっては、以下の点に注意した。

- 複数ルート考えられるレグを多く盛り込み、常に判断を求められるコースとする。複数ルートからベストルートを選ぶための要素としては、ルート距離、登距離、ルートのシンプルさ、曲がる回数、どれだけ遠くからコントロールが見えるか、足場の良さ、階段の有無などを考える。また、今大会ではタッチフリーSIを使用しているので、コントロールで戻りせずに走り抜けられるようなルート選択をすることも大切な要素と考える。
- すぐにはルートを決め難いような勝負レグを盛り込む。
- 各レグ、ルート選択によって少しのタイム差が出るようにする。
- (数少ない) 細かな地図読みが必要なエリアはできる限り使用する。
- 観戦者が選手の動きを間近で見ることができる区間を作る。
- 必要に応じて、コースを面白くするための立入禁止区画（実際には通れる）を設定する。
- コントロールの設置箇所は分かり易い箇所を選択し、他の競技者の存在によりコントロールを発見できるといった偶然性を最大限排除する。
- 細い道で選手が対向して走るのは危険なので、できる限り避ける。
- 不必要に失格者を増やさないため、連続するレグのレグ線が一直線上につながるのを避ける。

結果として、複雑に道が入り組んだ街の中で走る、ハイスピードのレースとなった。以下の点を満たした選手が好タイムを出したと思われる。

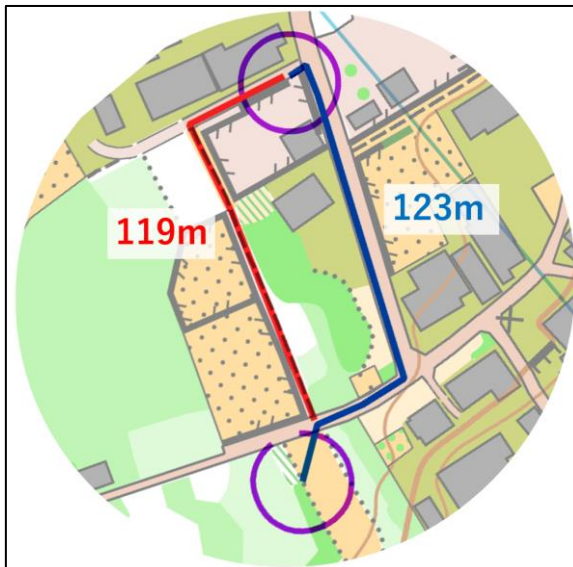
- 速いスピードで走ることができる。
- 走りながら短時間で適切なルートチョイスを行うことができる。
- スピードを上げすぎると地図情報が十分に読み取れずミスをしてしまうので、スピードとマップコンタクトのバランスをうまく取れる。
- 競技規則を熟知し、順守することの重要性を理解している。

2 男子選手権コース解説



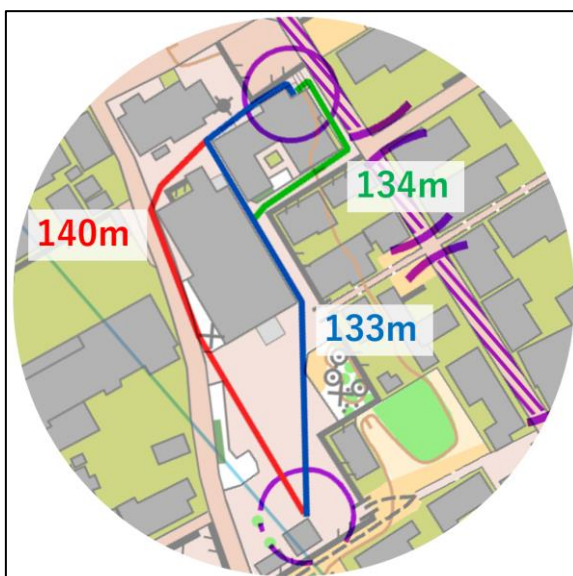
S→1

スタートからいきなりルートチョイスを課した。赤ルート(158m)は耕作地の中を走るルートであり、直線的でナビゲーション負荷は低いが、距離は長い。2 番にむけて真っすぐ脱出できる・先読みができるというメリットもある。青ルート(147m)は地図に慣れないまま市街地に入っていくことになるが、距離は短い。出戻りの脱出になってしまう。緑ルート(154m)は青ルートより距離が伸び曲がる回数も増えるので、遅いと考えた。入賞者では角田選手が赤ルート、松尾・稲森・杉浦選手が緑ルート、種市・高野・大橋選手が青ルートを選択したが、タイム差はほぼない。



1→2

赤ルート(119m)は、距離が短く、3 番に向けて真っすぐ脱出できるが、足場が悪いため走速度が落ちる。青ルート(123m)は足場がよく、また、次の 2→3 も視認することができる。松尾・角田選手が赤ルート、他の選手が青ルートを選択しており、松尾・角田選手がトップラップを獲得している。



2→3

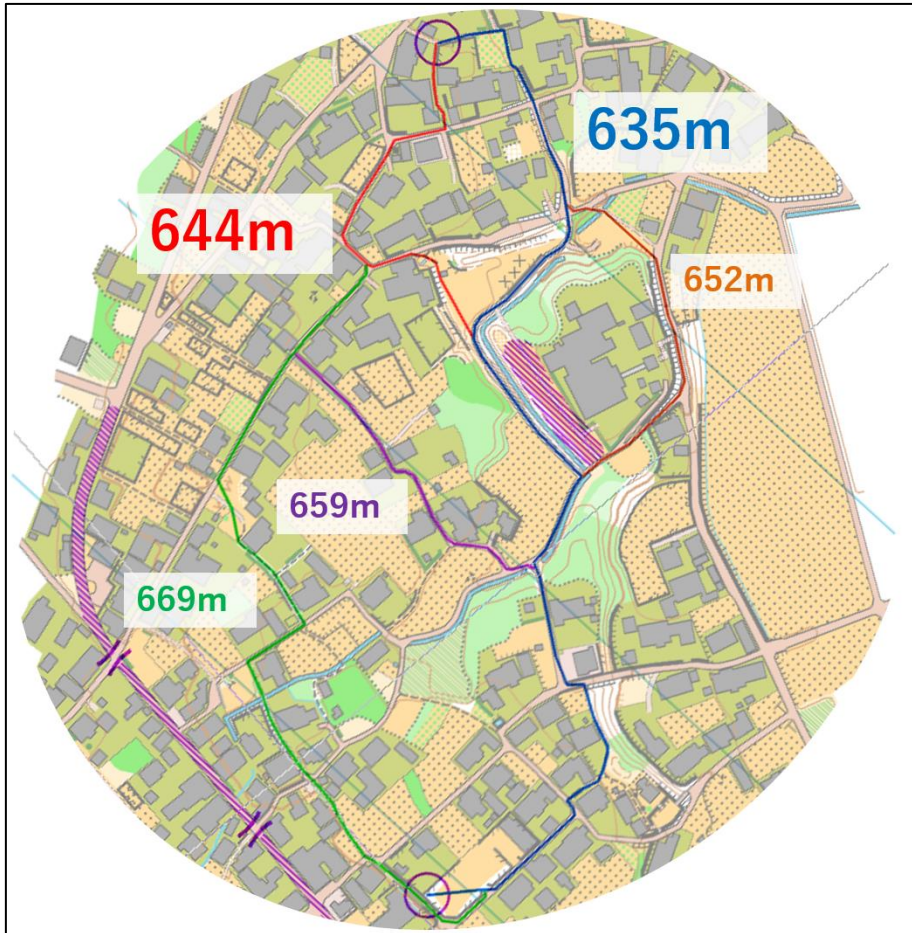
ショートレグであり差はついていない。

3→4

青ルート(133m)が距離最短でナビゲーションもシンプルである。赤ルート(140m)もシンプルだが、距離が伸びる。緑ルート(134m)は最後に階段を上る必要がある。種市・角田・稲森・杉浦選手が青ルート、松尾・高野・大橋選手が緑ルートを選択したが、タイム差はほぼない。

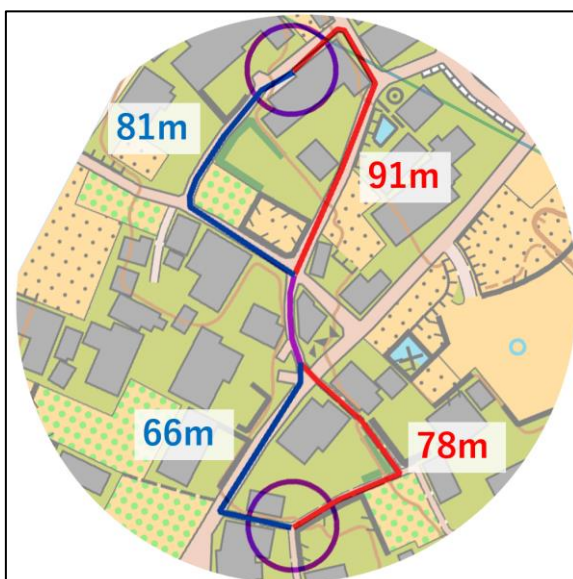
4→5

ルートチョイスはない。



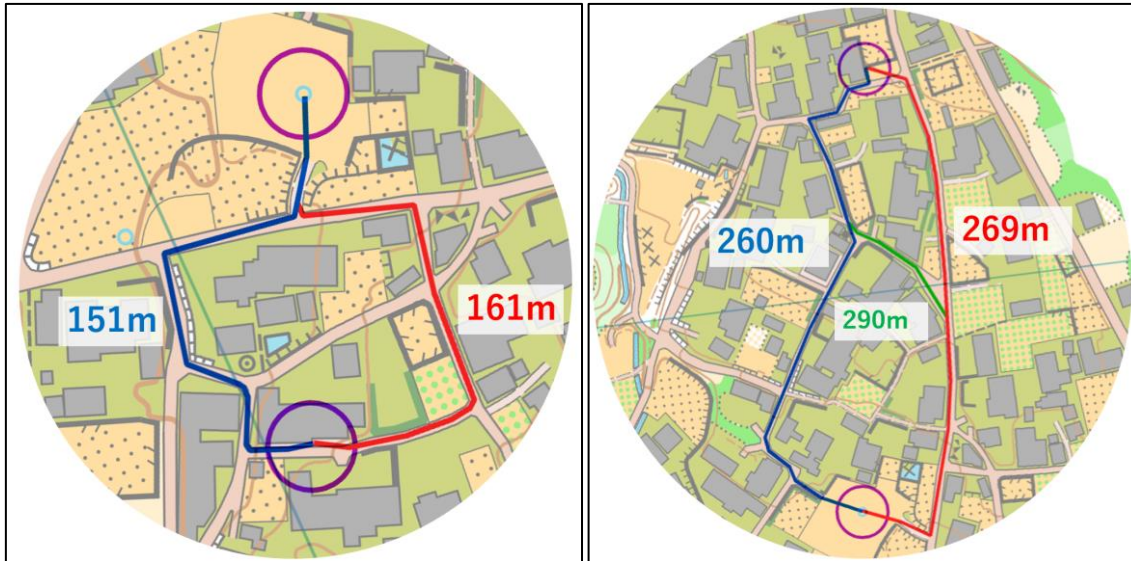
5→6

ME で一番の勝負レッグであり、多くのルートが考えられる。青ルート(635m)が最短であるが、他のルートとの距離差は長くても 30m 程度なので、ルート決定に時間をかけ過ぎるとかえって遅くなってしまふ。種市・角田・高野・杉浦選手が青ルート、松尾選手が紫ルート(659m)、稲森選手が緑ルート(669m)を選択したが、種市・松尾選手が 1 位・2 位ラップを獲得している。種市選手はここで 4 位から 1 位に順位を上げた。



6→7

2 通り×2 回のルートチョイスがある。前半・後半ともに青ルート(66m、81m)が短い。入賞者は全員青ルート+青ルートを選択していた。

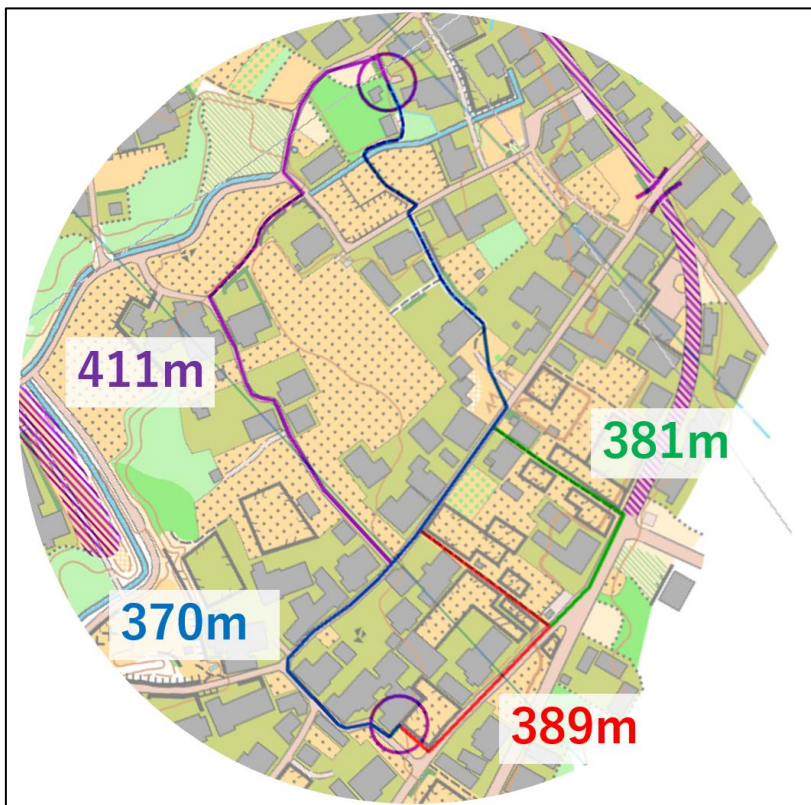


7→8 (左図)

青ルート(151m)が最短である。入賞者は全員青ルートを選択している。

8→9 (右図)

青ルート(260m)、赤ルート(269m)に比べ、緑ルート(290m)は距離が伸びる。松尾・稲森・杉浦選手が青ルート、種市・角田・高野・大橋選手が赤ルートを選択しており、松尾選手がトップラップを獲得している。

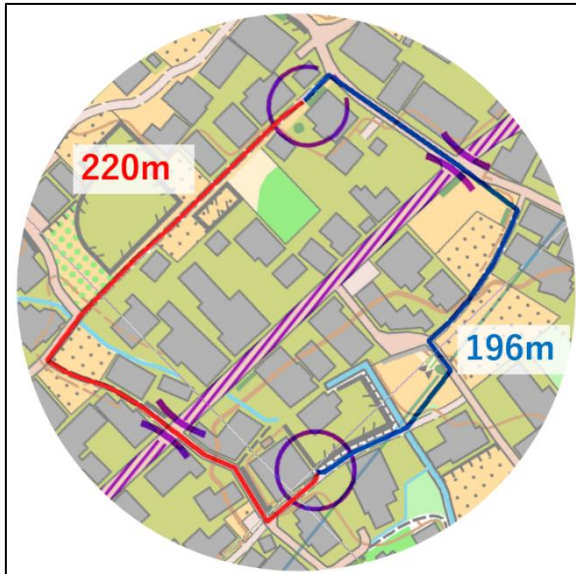


9→10

青ルート(370m)が、不整地が多く走速度は落ちてしまうが、距離的には最短である。入賞者では角田選手が青ルートを、他の選手は紫ルート(411m)を選択した。タイム差はほぼ無かった。

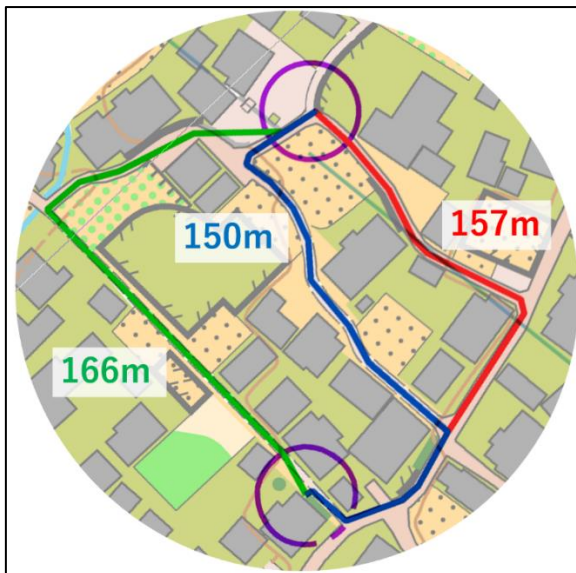
10→11

ショートレグであり差はついていない。



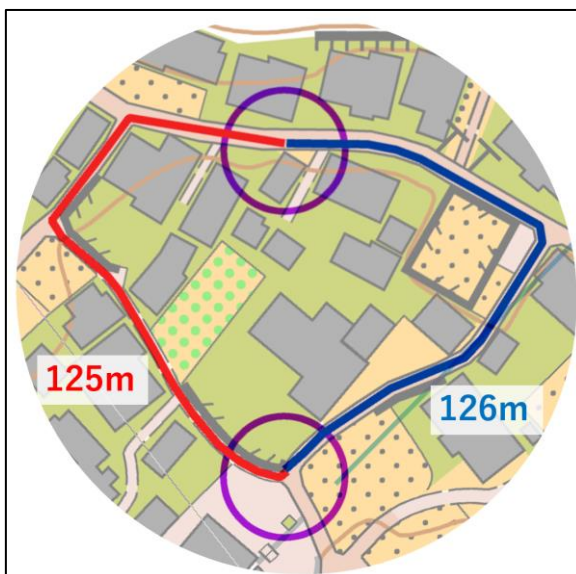
11→12

青ルート(196m)が最短である。入賞者は全員青ルートを選択した。



12→13

青ルート(150m)が最短。赤ルート(157m)は少し距離が伸びるが、曲がる回数が少ない。緑ルート(166m)は距離が伸びる。松尾、角田、高野選手が青ルート、大橋、稲森選手が赤ルート、種市、杉浦選手が緑ルートを選択したが、タイム差はほぼない。



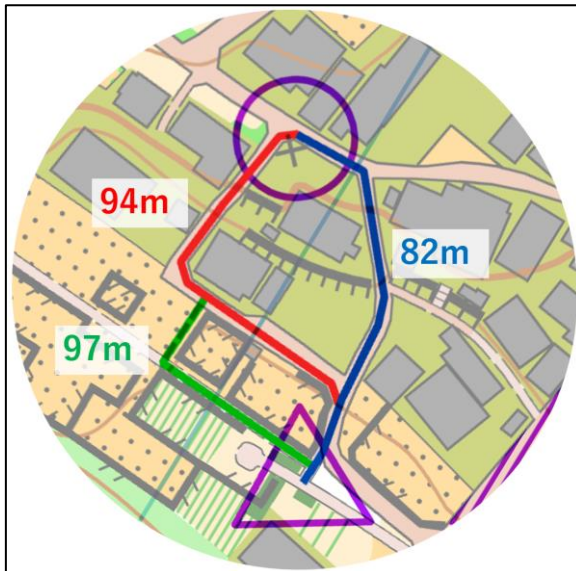
13→14

青ルート(126m)・赤ルート(125m)ともにほぼ等距離である。青ルートを選ぶと脱出の際に真っすぐ脱出することができる。このレッグでタイム差はついていない。

14以降

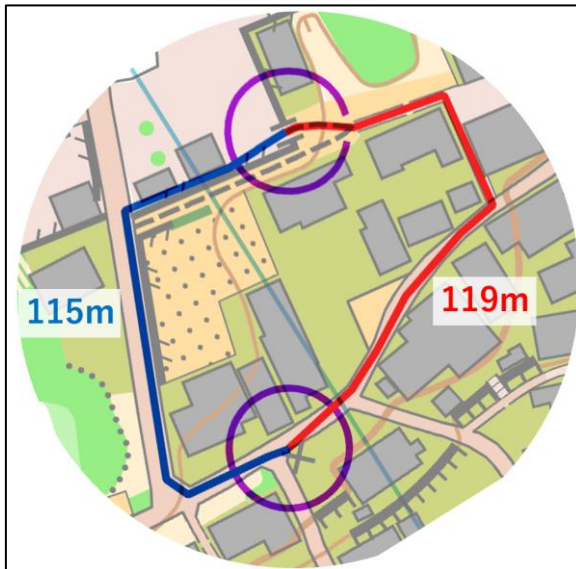
ここからはルートチョイスはほぼない。会場の小学校内に入ると一気に地図が細かくなる。観客の声も聞こえる中で、どここなすかが問われた。上位者であれば会場内の地図は読み切ったうえで会場に入ってきたことであろう。

3 女子選手権コース解説



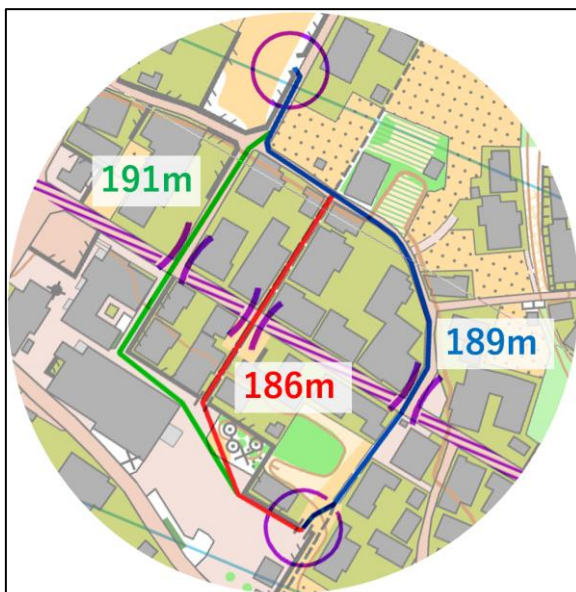
S→1

女子コースも、スタートからいきなりルートチョイスを課した。青ルート(82m)が最短である。入賞者は増澤・勝山・宮本・伊部選手が青ルート、佐野・伊東選手が赤ルート(94m)を選択し、この中では増澤選手が最速であった。



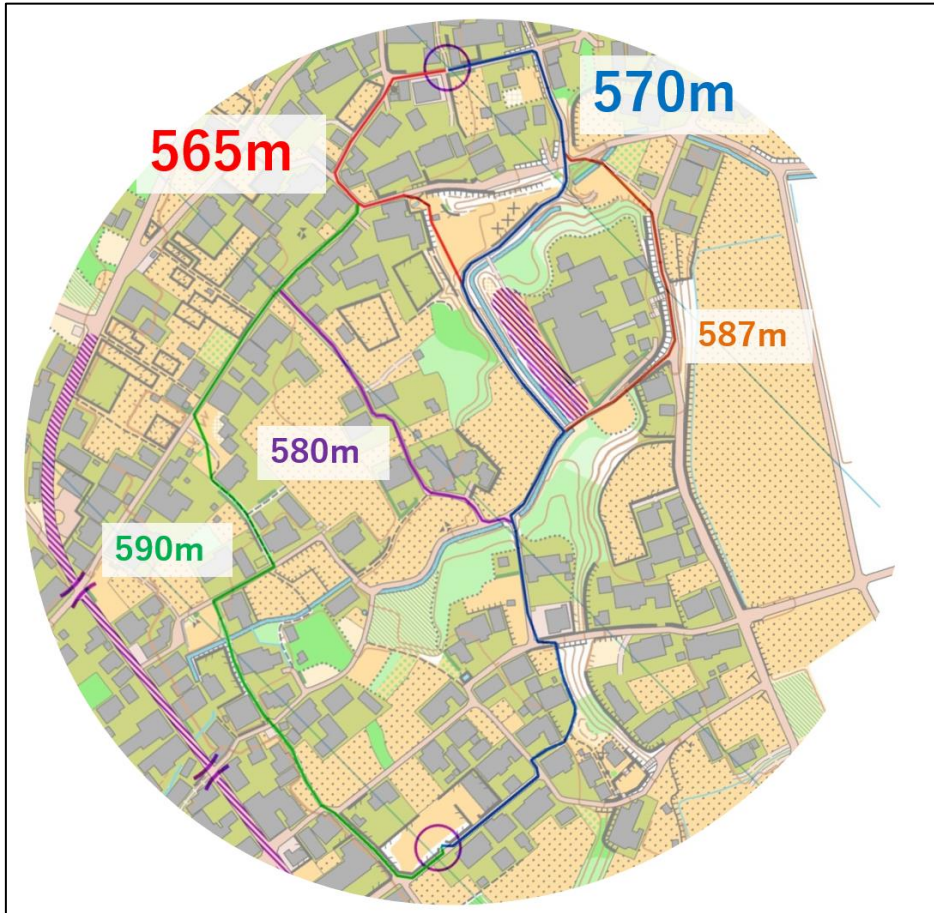
1→2

青ルート(115m)・赤ルート(119m)ともにほぼ等距離であり、タイムはほぼ変わらないと思われる。



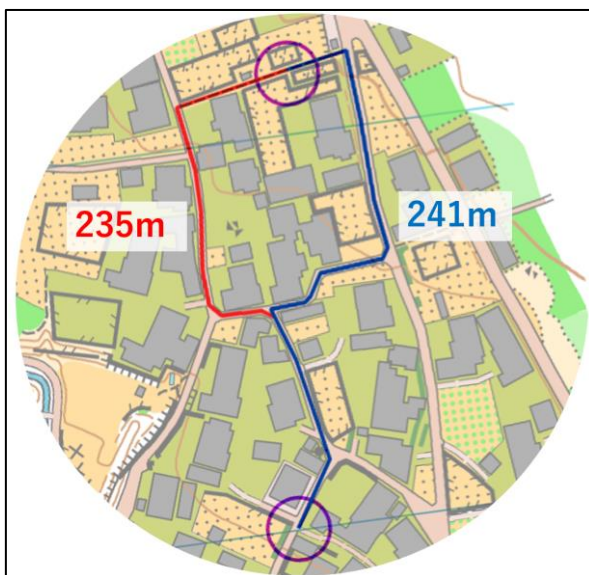
2→3

どのルートもタイムはほぼ変わらないと思われる。入賞者は全員青ルート(189m)を選択した。



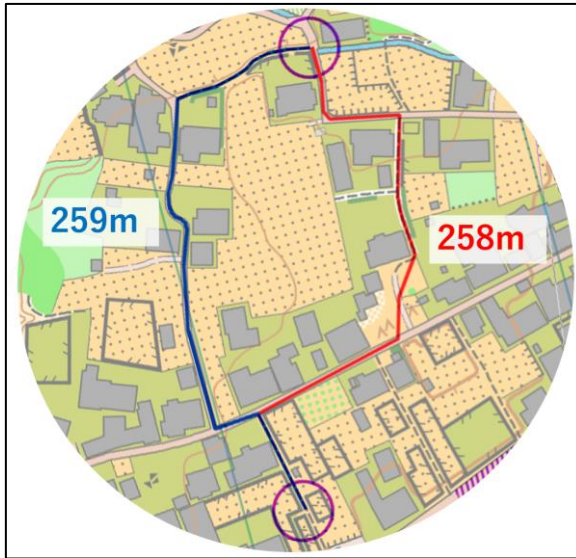
3→4

WE で一番の勝負レグである。赤ルート(565m)が最短だが、後半のオープンの不整地で走速度が落ちるので、ルート距離はわずかに長いがずっと舗装地を走れる青ルート(570m)が最速だと考えた。入賞者は全員青ルートを選択している。ここでトップラップをとった佐野が 5 位から 1 位に浮上している。



4→5

脱出が出戻りになってしまうが赤ルート(235m)の方が距離が短くベストルートと考えていた。入賞者では佐野・増澤・伊東選手が赤ルート、勝山・宮本・伊部選手が青ルート(241m)を選択し、増澤・佐野選手がそれぞれ 1 位・2 位ラップを獲得した。

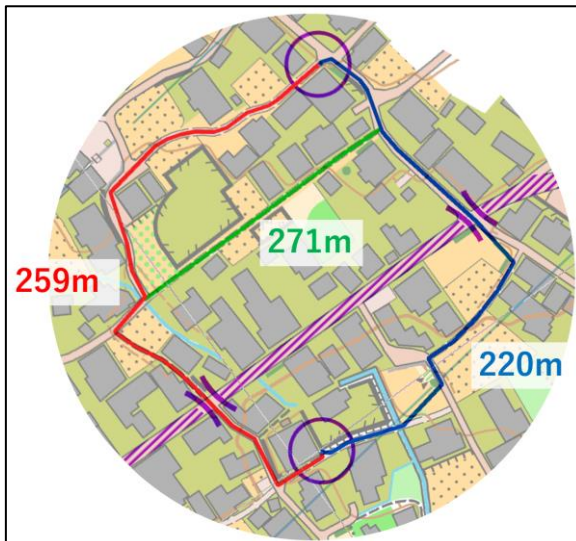


5→6

青ルート(259m)と赤ルート(258m)はほぼ等距離であるが、青ルートの方が舗装地の距離が長く、曲がる回数も少ない。佐野・宮本・伊部・伊東選手が青ルート、増澤・勝山選手が赤ルートを選択し、佐野選手がトップラップを獲得している。

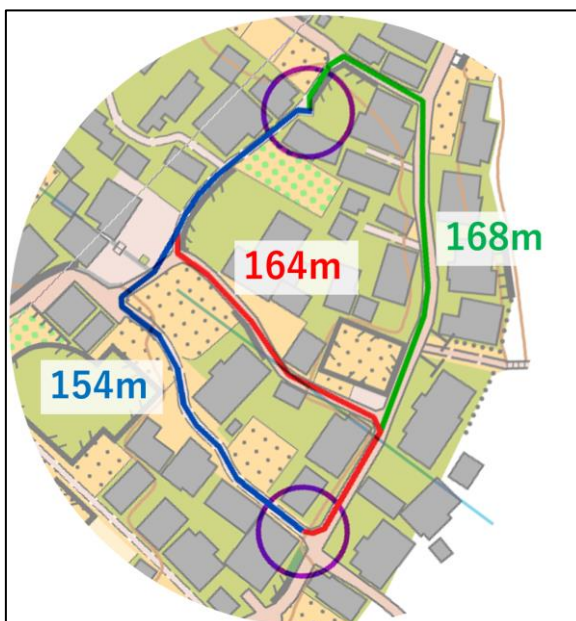
6→7

ルートチョイスはないが、入賞者でも佐野・増澤・伊部選手が1本手前の分岐に誤って入ってしまい、10秒程度ロスしている。



7→8

青ルート(220m)が最短でベストルートである。佐野・宮本・伊部選手が青ルート、勝山選手が赤ルート(259m)、増澤・伊東選手が緑ルート(271m)を選択したが、この中では宮本・伊部選手が最速である。



8→9

青ルート(154m)が最短でベストルートである。増澤・宮本・伊部・伊東選手が青ルート、佐野・勝山選手が赤ルート(164m)を選択し、伊部選手がトップラップを獲得している。

9以降

ここからはルートチョイスはほぼない。会場の小学校内に入ると一気に地図が細くなる。観客の声も聞こえる中で、どここなすかが問われた。上位者であれば会場内の地図は読み切ったうえで会場に入ってきたことであろう。

4 失格者の状況

スプリント競技部門 競技責任者 安中 勇大

➤ 想定

予め想定していた失格としては、ミスパンチの他、立入禁止区域への侵入と誘導はずれがあげられる。なるべく失格者がでないよう現地の立入禁止区域との境界に青黄テープを張ることや、誤って侵入しそうな入り口が見えにくいよう目隠しとして車を置くなどの対処をした上で、役員が監視をおこなった。

失格判断の基準について、立入禁止区域は一步でも禁止区域に踏み入れた場合失格とした。誘導については、一度誘導を外れても途中で気づいて誘導を外れた地点まで戻り辿りなおした場合は失格としなかった。

➤ 結果

ME クラスにおいて失格者は 19/66 名、WE クラスにおいては 6/36 名と想定より多かった。ME クラスの失格者の内訳としては、ミスパンチ・ポスト飛ばしが 4 名、誘導はずれが 7 名、立入禁止区域への侵入が 8 名であった。WE クラスではミスパンチ・ポスト飛ばしが 1 名、誘導はずれが 3 名、立入禁止区域への侵入が 2 名であった。

➤ 考察・提言等

想定より多くの失格者が出てしまった。主な原因としては立入禁止区域における青黄テープと誘導区間の赤白テープを地面に這わせていた事が原因と考えられる。市街地において全てのテープ誘導を高い位置に貼ることは現実的ではないため、地面にテープを貼っていることについてはテクニカルミーティング資料中に掲載したが、もっと強調しておくべきであった。また、境界が明示されている立入禁止区域には一步でも侵入した場合失格になることなどを記載しておくべきであった。また、誘導についても、誘導区間の終わりにはコントロールもしくは「誘導終わり」の看板を設置していることを前もって告知すべきであった。

今回は立入禁止区域へ侵入について、公平性を期すため（どこまでの侵入はよくどこからアウトなのかの議論が生じると考えたため）一步でも侵入した場合は失格という処置にしたが、次回以降どのような措置を取るかは議論の余地があると考えられる。

以下、提言等を列举する。

- 青黄テープや赤白テープ誘導などの見本を予めウォームアップエリアに設置しておく。
- テクニカルミーティング資料で失格の基準を示しておく。
- テープ誘導の終わりにはコントロールか「誘導終わり」の看板が設置されていることを明示しておく。
- 選手に対して、立入禁止区域や誘導外れによる失格者を出していることは選手を引っ掛けようとしているわけではなく、選手の安全性や競技の公平性を求めた結果であるということをよく理解してもらう。その上で選手はルールを遵守して競技をおこなわなくてはならないと強く認識してもらう。

5 調査依頼と提訴の回答

スプリント競技部門 競技責任者 安中 勇大

今回、5 件の調査依頼があり、その回答に対し 3 件の提訴があった。調査依頼のうち 3 件については会場付近の誘導テープが適正であったかについてであり、1 件は立入禁止区域の青黄テープが適正であったかについて、もう 1 件はスタートの公平性についてであった。

提訴の文面および回答については、参考資料「各提訴内容と回答」にて別途公開する。

5.1 立入禁止区域との境界を示す青黄テープについて

➤ 提訴内容

青黄テープが地面に貼られていたため、視認性が悪くそれに気づかず立ち入り禁止区域に侵入した。また、侵入は車の接近に気を取られていたためである。これらより失格の取り消しを求める。

➤ 回答

地図・現地共に十分わかりやすい状態であった。また、自身の安全を確保することは競技者の責であると十分告知されていた。以上より失格の取り消しは行わない。

➤ 原因と対策

➤ 歩道と車道との境界であったため、歩行者や車の通行もあり、テープを高い位置に設置することは不可能であった。そのため地面に青黄テープを貼った画像をテクニカルミーティング資料に掲載したが、青黄テープを一步でも超えると失格であるとは明記していなかったため、選手が青黄テープの存在を軽視していた可能性がある。そのため、テクニカルミーティング資料等で失格になる基準を明記しておくべきであった。



5.1：現地における青黄テープ



5.1：地図上での表記

5.2 会場周辺の赤白テープ誘導について

➤ 提訴内容

誘導が途中で終わっているように見え、不適切であった。また高速で走っている選手からは誘導終わりの看板は見えなかった。これらに加え誘導を外れた場合、誘導を辿った選手よりも不利なルートを通過しているため、失格の取り消しを求める。

➤ 回答

テープ誘導は万全ではなかった部分もあるが適正な現地表示であった。また、誘導区間を辿ることは競技者の責務である。以上より失格の取り消しは行わない。

➤ 原因と対策

当該区間ではレグ線の交錯を避けるため、テープ誘導が設置されていた。テープ誘導は前のコントロ

ールを起点に一貫して左手側についていたが、雨天によるレイアウト変更により選手の右手に観客がいる状態となったため、右手側に気を取られ、その先にある北側の校門へテープ誘導を外れて侵入した選手が多かったと考えられる。北側の校門への侵入は運営者も想定していたが、緊急車両などが入る可能性もあり校門を塞ぐことはできなかったため、目隠しとして車を置いて選手から校門が見えないよう対策していた。反省点として赤白テープ誘導の終わりには「誘導終わり」の看板を設置していたが、告知をしていなかった点があげられる。予めテクニカルミーティング資料にて告知すべきであった。また、裁定委員から北側の校門について、入り口に地面に沿わせて何かしらのテープを貼るなどして誘導を外れていることを選手に気づかせると失格者が減ったのではないかと指摘を受けた。運営者も地面にテープを貼る案をあげていたが、青黄テープは地図表記の困難さと、一旦選手が越えてから戻ってきた場合の判断が難しいため、すずらんテープについては、何を意味するか曖昧なテープを競技エリアに設置することは選手に混乱を生じさせると判断したため採用しなかった。今後同様の事案がある場合、どのような対応を取るべきか検討すべき課題である。



5.2：地図上での表記



5.2：現地における赤白テープ

5.3 スタート方式の公平性について

➤ 提訴内容

スタート地区の中継画像を見たところ 1 秒早くスタートしようとしている選手が見受けられ、それに対してスタート役員の制止は行われなかったため、0.1 秒単位でのスタートの公平性は担保されていないと考えられる。以上より秒単位の順位決定が妥当であり、結果の再集計をすべきである。

➤ 回答

今大会のスタート方式は 0.1 秒単位のスタートの正確性を担保出来ていたとはいえないため、一秒単位計時として結果を再集計する。

➤ 原因と対策

今大会ではパンチングスタートを採用していなかったため、合図より早く動き出した選手は役員が静止していた。しかし、静止し切れなかった選手もいたため、今後 SI を用いる場合にはパンチングスタート方式を採用して正確な計時を行うべきである。

1 はじめに

本テレインは全般に急峻な地形が広がっており、アップを極力抑えることに一番気をつかった。その中で、ロングレグはもちろんのことできる限り多くのルートチョイスを問い、ナビゲーション力を常に求めるコース設定を行った。更に、ナビゲーション力に加え、ロングレースに耐えうるタフな身体を併せ持った選手が選手権者となるようなコースを目指した。

2 男子選手権コース解説



S→1

いきなりオープンから A ヤブ林に入っていくレグ。オープンにある細かいDヤブを対処しつつ、方向を保てるかがポイント。入賞者の中でも最大30秒近く差がついており、走力ではなくナビゲーション力で大きく差がついたレグであろう。

1→2→3

尾根線をつなぐ序盤のリズム作りレグ。極力地図の先読みを避けるため、コントロール位置を辛めとした。ここまでのトップは稲森選手。入賞者で見ると、種市選手、宮本選手が1分以上出遅れている。



3→4

序盤のややロングレグ。大きく①オープン通過か②尾根たどりのルートが考えられる。①ルートは距離もアップと最小となり手続きも簡素となる。一方、②ルートは尾根上のアップダウンの他、尾根分岐を確認する必要があり、プランナーの想定ベストルートは①であった。結果、レグ2位の松尾選手（5分

4 秒)、3 位の佐藤選手 (5 分 20 秒) はともに①ルートを選択しており、想定通りとなった。一方、②ルートを選択した種市選手、宮本選手は 6 分前後と①ルートに比べて 40 秒～1 分程度遅かった。

4→5

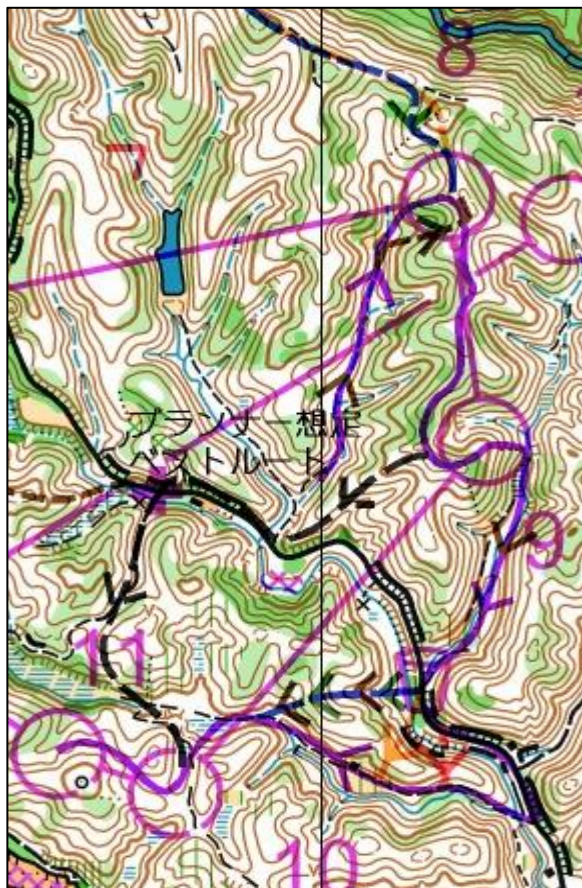
なかなか珍しい廃遊園地のアスファルトや廃道を通行するレッグ。動じず、淡々とオリエンタリングをこなす必要がある。トップタイムは佐藤選手の 2 分 25 秒。山中を突っ切った松尾選手は 2 分 53 秒と、廃道を引っ張るのがベストであった。

5→6

つなぎレッグ。

6→7

ロングレッグ前の登りレッグであるが、ルートチョイスを求めた。実際に、入賞者の中でもルートが分かれる結果となった。トップタイムは松尾選手の 5 分 23 秒。他の入賞者のタイムと比較しても 20 秒以上短く、圧倒的な登坂力を見せ付けた。



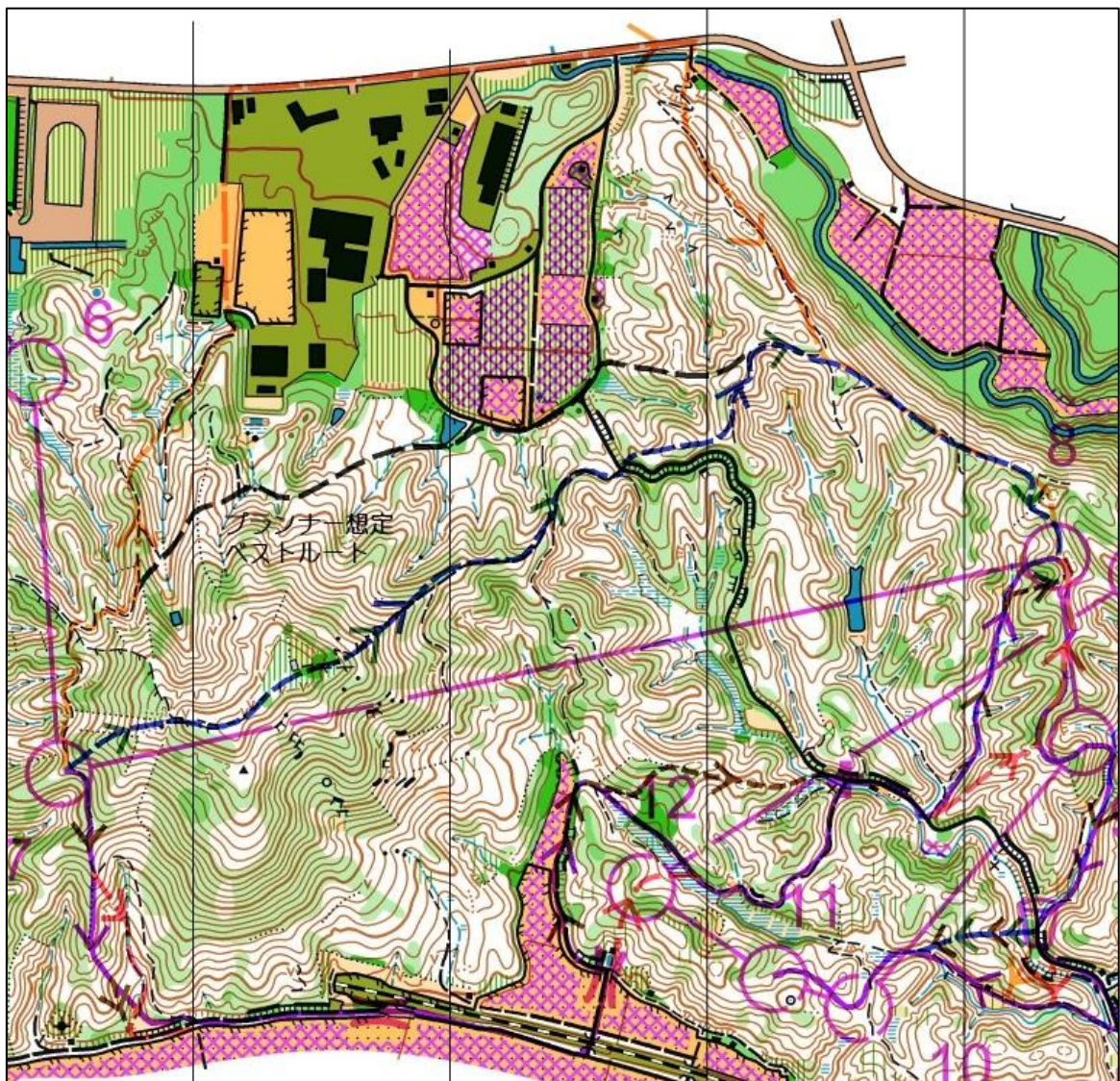
→	優勝	松尾怜治(東京4)	1:09:49
→	2位	佐藤俊太郎(東北4)	1:11:29
→	3位	稲森剛(横国3)	1:12:38
→	4位	種市雅也(東京2)	1:13:27
→	5位	宮本樹(東京3)	1:15:23
→	6位	桑潤哉(東京4)	1:16:19

8→9

つなぎレッグ。尾根たどりをそつなくこなす。

9→10

レッグ線上を山塊が跨いでおり、どう処理するかがポイント。入賞者の中で見ると、道巻きで山塊切りを回避した松尾選手が 5 分 2 秒とトップであった。プランナー想定ベストルートは脱出時に緩やかな下りを選択する西巻きルートであったが、残念ながら、選択した入賞者はいなかった。なお、全体トップタイムは小平選手の 4 分 31 秒で圧倒的なタイムであった。



7→8

最長の勝負レグ。様々なルートチョイスが考えられ、それぞれの選手の特性に合ったルート選択をするのがベストだろう。プランナーの想定ベストルートは山塊

北巻きであったが、選択した入賞者はいなかった。トップタイムは直登を選択した稲森選手の12分10秒。距離も短く比較的シンプルなルートであったためと考えられる。糸選手も稲森選手同様のルートを選択しているが、13分12秒であり、登坂力で1分以上差をつけている。一方、南の道巻きルートを選択した入賞者も多かった。実距離が増すためベストルートではないと考えられたが、それでも松尾選手は13分4秒と当レグ全体4位のタイムをたたき出した。種市選手はプランナーも想定外の大きく北周りのルートを選択しており、14:06秒と上位3位の入賞者に更に差をつけられる格好となった。他の入賞者は14分以内に収めており、大きなミスなくロングレグをこなせたのが入賞につながったと考えられる。濱宇津選手は16分55秒かかってしまい、ここで5→16位と入賞争いから脱落した。

優勝	松尾怜治(東京4)	1:09:49
2位	佐藤俊太郎(東北4)	1:11:29
3位	稲森剛(横国3)	1:12:38
4位	種市雅也(東京2)	1:13:27
5位	宮本樹(東京3)	1:15:23
6位	糸潤哉(東京4)	1:16:19

10→11

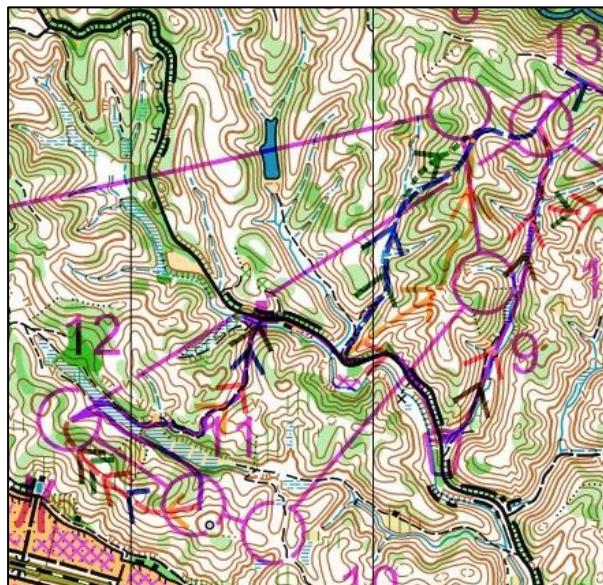
つなぎレグ。

11→12

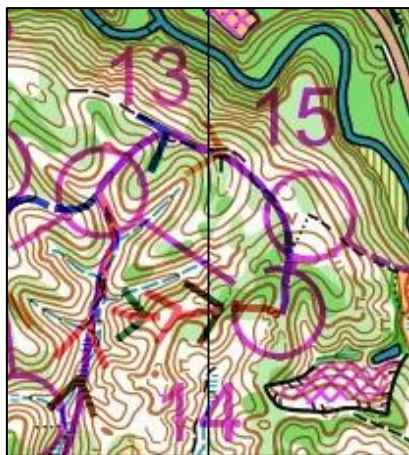
上からか下からアタックかの選択。上からの種市選手が1分44秒、下からの松尾選手が2分1秒で大きなタイム差はついていない。素直に尾根線をたどる上からを選択した選手が多かったようだ。

12→13

ルートチョイスがある最終ロングレグ。入賞者の中でもルートが分かれた。入賞者のタイムを比較すると大きく道で巻いて最後に沢を詰めた松尾選手が最も短く、6分44秒であった。一方、手前の沢を詰めて最後に尾根切りを選択した種市選手、桑選手は7分台であった。なお、全体トップタイムは南河選手の6分26秒で圧倒的なタイムであったが、序盤の出遅れが響き、入賞圏内には至らなかった



→	優勝	松尾怜治(東京4)	1:09:49
- - ->	2位	佐藤俊太郎(東北4)	1:11:29
- - ->	3位	稲森剛(横国3)	1:12:38
- - ->	4位	種市雅也(東京2)	1:13:27
- - ->	5位	宮本樹(東京3)	1:15:23
- - ->	6位	桑潤哉(東京4)	1:16:19



13→14

終盤の短いレグであるが、ルートチョイスが問われる。実際に入賞者のルートがきれいに2分したが、大きなタイム差はなかった。ヤブの対処に気をつけながら、自分の決めたルートをいかに確実にたどれたかがポイントとなった。ここで伴選手が1分30秒程度ミスしてしまい5→7位と入賞争いから脱落した。代わりに宮本選手が暫定6位の入賞圏内となった。

14→15→16

つなぎのレグ。地図を見て誘導を確実にたどる。

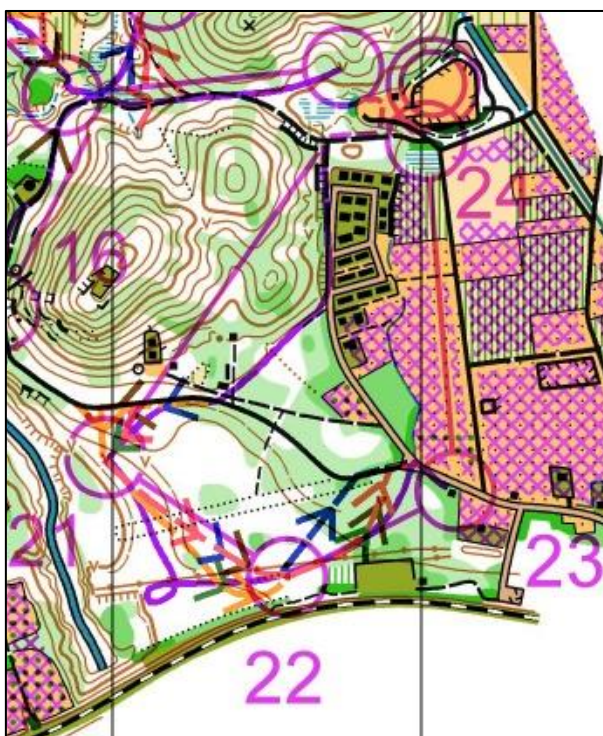
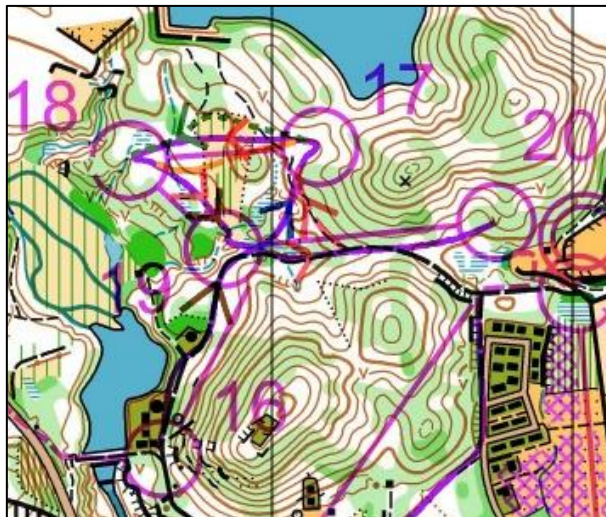
16→17→18→19

これまでとひと味違ったラフオープンエリアでのコンパスワークが問われるレッグ。特にラフオープンを横切る 17→18 は正確な直進が求められ、入賞者の中でも最大 20 秒の差がついた。

19→20

つなぎのレッグ。

→	優勝	松尾怜治(東京4)	1:09:49
→	2位	佐藤俊太郎(東北4)	1:11:29
→	3位	稲森剛(横国3)	1:12:38
→	4位	種市雅也(東京2)	1:13:27
→	5位	宮本樹(東京3)	1:15:23
→	6位	桑潤哉(東京4)	1:16:19



20→21

道からの正確な直進が求められる。建物や道の曲がりからの距離感を掴めるか。

22→22

フラットなエリアで連続して直進のスキルが問われる。直前のレッグまで暫定 1 位の松尾選手は 1 分近くミスを計上するも、ここまでの圧倒的な走力によって、後続に 3 分程度差をつけており、1 位の座は揺るがなかった。

22→23

気合いでヤブを突っ切る。方向を見失わず、いち早く舗装路に乗ることが重要。

23→24→◎

声援にめがけて、最後の気力を出し切る。

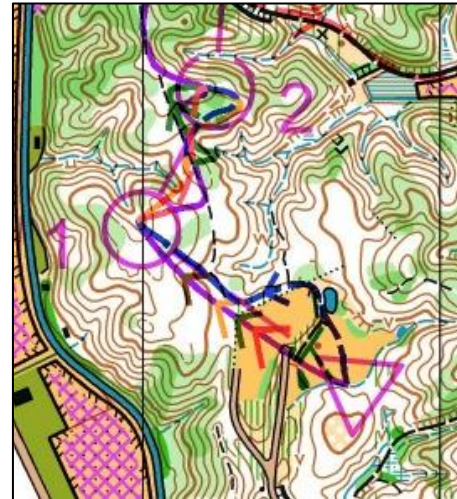
3 女子選手権コース解説

S→1

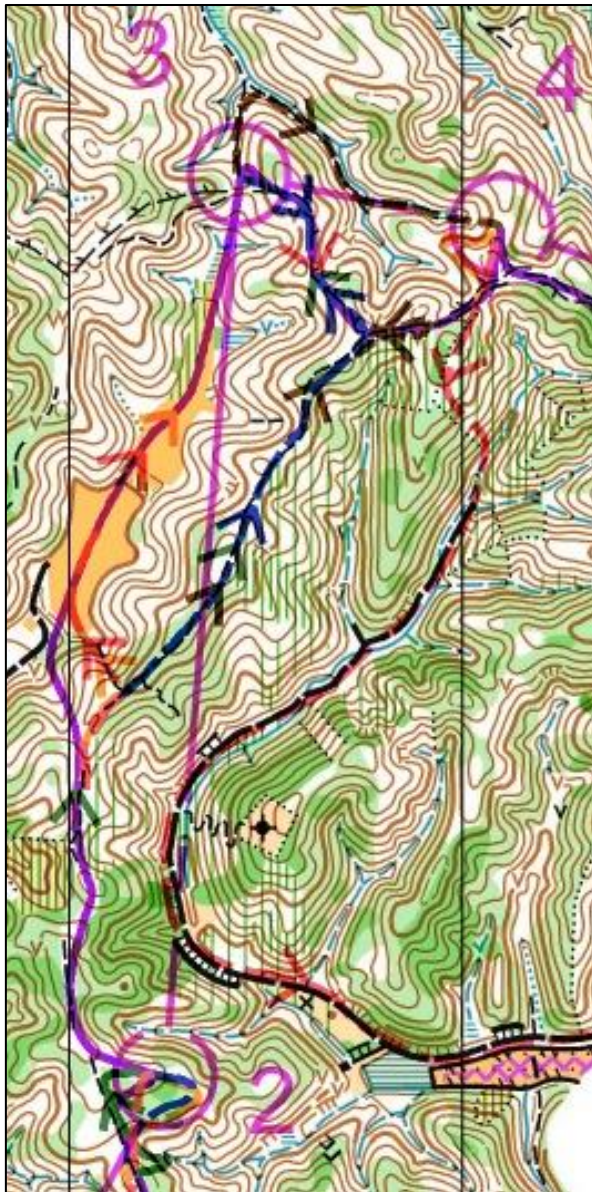
男子同様、オープン・林間わず方向維持が求められる。入賞者のほとんどはオープンの角を目印にほぼレッグ線上をたどったようだ。臼井選手は北に膨らんでいるが、大きなタイムロスとはなっていない。

1→2

短いレッグだが、直進はできないため、地形やヤブを捉えてうまく避けていく必要がある。出田選手は手前のヤブで逸れてしまい、2分程度ミス時計上してしまっている。勝山選手、長崎選手はここまで4分10秒台とリズム良く序盤戦に入れたようだ。



優勝	勝山佳恵(茨城3)	0:56:22
2位	増澤すず(筑波2)	0:58:37
3位	臼井沙耶香(東北3)	1:01:24
4位	宮本和奏(筑波1)	1:02:07
5位	長崎早也香(名古屋4)	1:05:38
6位	出田涼子(大阪2)	1:07:23



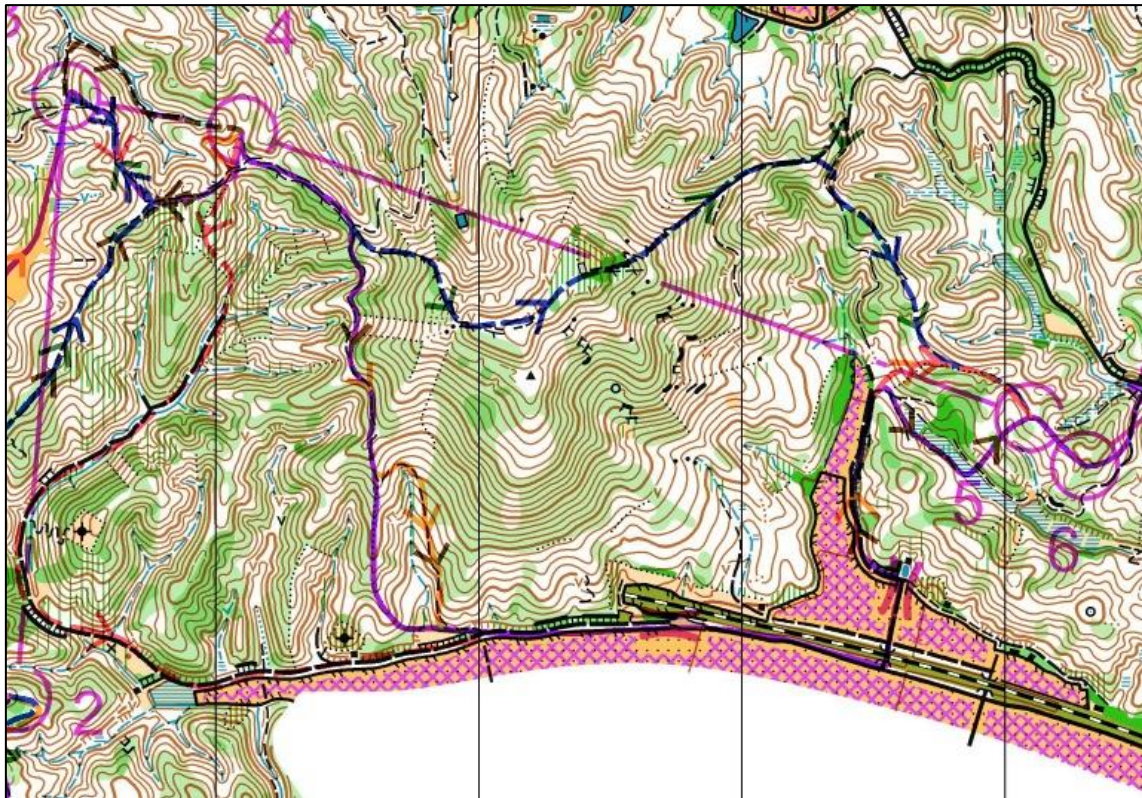
2→3

女子の4→5に次ぐルートチョイスが問われるロングレッグ。課題は男子の3→4と同様である。入賞者のルートを見ると、きれいに2分する結果となった。オープンルートを選択した宮本選手が2位に20秒も差をつける6分30秒というタイムで快走をみせた。一方、尾根ルートを選択した臼井選手も宮本選手に次ぐ6分50秒という好タイムであり、各選手の走力がタイム差となったようだ。本レースで全選手中2位の巡航を叩き出した伊佐野選手はここで7分以上の大ミスを行っており、結果として、入賞を逃す大きな要因となってしまった。

3→4

つなぎのレッグに見えて、ルートチョイスが存在する。ほぼレッグ線上に、脱出直後にピークを巻いた後に沢を詰めるルートが距離も短く想定ベストであったが、残念ながら選択した入賞者はいなかった。ほとんどの入賞者は尾根たどりをを選択した。臼井選手は手前の尾根にアタックしてしまい、2分程度ミス時計上してしまっている。一方、ここまで暫定1位の勝山選手は他を寄せ付けない巡航でミスなくこなして

おり、ロングレグ手前の段階で 2 位以下に既に 50 秒をつけている。



4→5

女子の勝負のロングレグ。男子同様、多くのルートが考えられた。プランナーの想定ベストルートは男子同様、山塊北巻きであったが高いナビゲーション力が要求されるためか、選択する入賞者はいなかった。トップは 14 分 2 秒で南巻きを選択した勝山選手であった。ほぼ同様のルートを入賞

者の長崎選手がたどっているが、16 分 3 秒であり、脚力で 2 分の差をつける驚異的な走りである。増澤選手はプランナーも想定外の大周りの道ルートを選択しているが、15 分 19 秒と全体で見ると全選手中 6 位の好タイムであり、舗装路を異次元の速さで駆け抜けたようだ。一方で尾根たどりを選択した臼井選手のタイムは 14 分 24 秒と全選手中 3 位の好タイムであった。自身の得意不得意を理解した上で、自身にとってベストなルートをいかに選択できたがポイントとなった。ロングレグ直前まで暫定 4 位だった塚越選手は 6 分程度ミスしてしまい、入賞争いから脱落した。

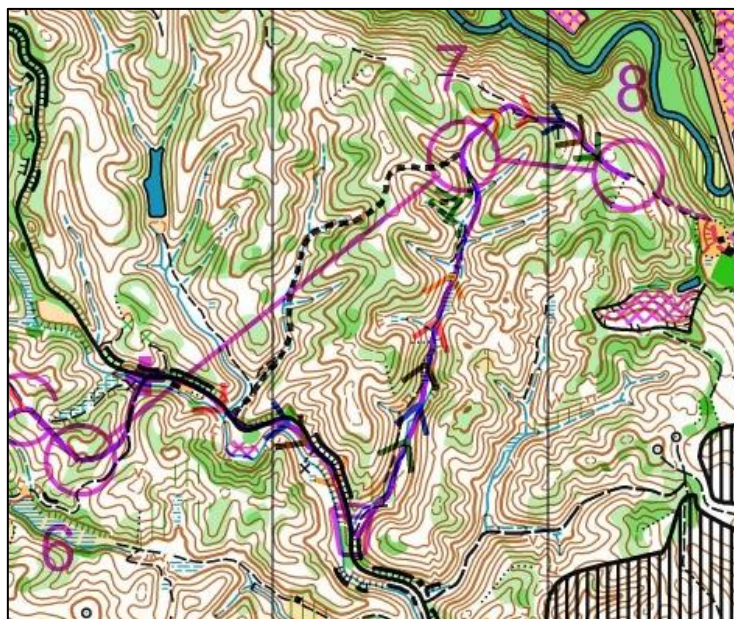
優勝	勝山佳恵(茨城3)	0:56:22
2位	増澤すず(筑波2)	0:58:37
3位	臼井沙耶香(東北3)	1:01:24
4位	宮本和奏(筑波1)	1:02:07
5位	長崎早也香(名古屋4)	1:05:38
6位	出田涼子(大阪2)	1:07:23

5→6

つなぎのコンピレグ。

6→7

男子の 12→13 と同様の課題を課したレグであったが、黒点線の尾根越えルートを選択する入賞者はいなかった。男子と女子の登坂力の差を考慮すると、大きく道で巻いて最後に沢を詰めるルートがベスト想定であったが、入賞者全員が選択するという結果であった。また、入賞者上位 3 人が揃って、本レグタイムの上位 3 人であり、走力の差がそのまま最終順位に影響したようだ。出田選手は手前の沢で入ってしまい、3 分程度ミスタイムを計上し、一度入賞戦線から脱落する。



優勝	勝山佳恵(茨城3)	0:56:22
2位	増澤すず(筑波2)	0:58:37
3位	臼井沙耶香(東北3)	1:01:24
4位	宮本和奏(筑波1)	1:02:07
5位	長崎早也香(名古屋4)	1:05:38
6位	出田涼子(大阪2)	1:07:23

7→8

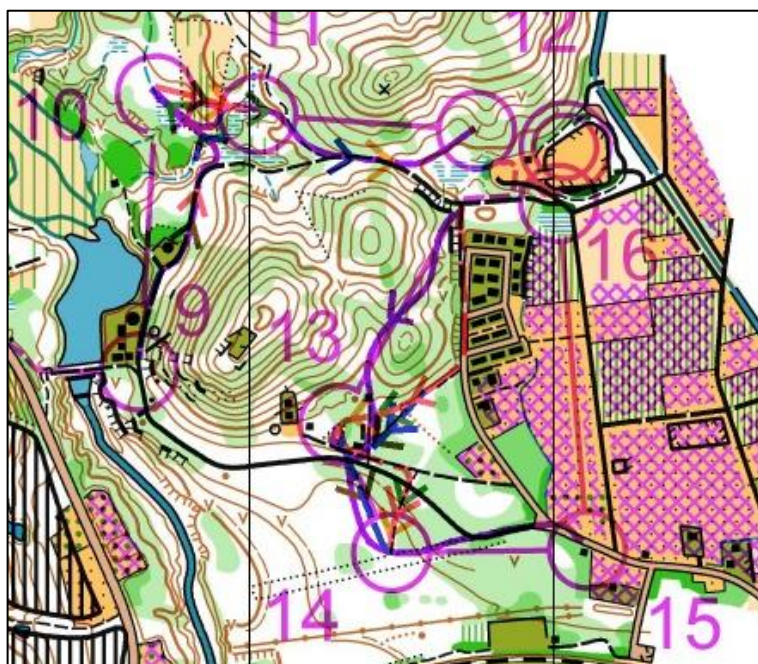
入賞者全員が北の尾根たどりを選択。以後、いよいよ終盤戦となる。

8→9

誘導のため省略

9→10→11→12

男子同様、ラフオープンエリアが合わさったエリアでのコンパワークが問われる。ここで伊佐野選手が驚異的な走りですり抜け、7 分ミスをひっくり返し、入賞ラインの暫定 6 位となる。



12→13→14

フラットなエリアで集中力を保ったまま、直進のスキルが求められる。なんと勝山選手は鞍部切りルートを選択している

が、ここまでの大量の貯金により 1 位の座は揺るがなかった。大きなミスなくこなした出田選手がここで暫定 6 位に返り咲いている。13→14 は膨らむが安全な道周りルートを選択した入賞者も多かった。

14→15→16→◎

男子同様、増澤選手と佐野選手のタイムが圧倒的であった。

4 失格者の状況

ロング・ディスタンス競技部門 競技責任者 松下 睦生

失格について特に問題・疑義等が生じていないので結果のみ記載する。

- ME 失格 2 名
- WE 失格 2 名

5 調査依頼と提訴の回答

ロング・ディスタンス競技部門 競技責任者 松下 睦生

調査依頼無し。

1 大会企画の経緯

スプリント、ロング・ディスタンス競技部門実行委員長 糸井川 壮大

1.1 岐阜県協会からの誘致方針の決定

本大会のロング・ディスタンス競技が開催されたテレイン「関ヶ原」はオリエンテーリングが日本に導入されて間もない頃からパーマナントコースが設置されている歴史のあるテレインであるが、昨今はテレイン内の県立自然の家の閉鎖等の理由から長らくオリエンテーリングが実施されてこなかった。そこで当地は十分にコントロールされた大型のオリエンテーリングイベントの開催地に適しているため、岐阜県協会の事業として行政とのコンタクトを始める計画がなされていた。この背景と同協会所属で日本学連副会長を務める山川克則氏の「地方から積極的に全国レベルの大会を誘致するのがあるべき姿である」との考えから、インカレ・全日本大会の地方誘致が進む第一歩として、岐阜県協会から日本学連へ秋インカレの誘致する方針を決定した。

1.2 テレインの選定

ロングテレインは上述の通り、歴史のあるテレインの存在からテレイン選定には大きな問題が生じなかったが、スプリントテレインについては、岐阜県はいわゆる“公園難民県”であることが障害となった。岐阜県は大きな公園が他県に比べて非常に少ないため、候補地が限られていた。その中で開催可能と思われた4箇所の下見を行ったが、県境付近のどれも競愛知県テレインも含めて競技性もしくは子の利用者が多いという渉外上の理由で開催できるものではなく、テレイン選定は難航した。

そんな中、岐阜県協会の林武彦氏から「以前ロゲイニングイベントを開催した大垣市上石津町が町興しに熱心である」という情報を受け、上石津多良地区の現地確認を実施した。現地の路地の複雑さ、車両の通行量、駐車場のキャパシティ等を確認し、スプリントの適地であると判断した。そこで上石津の地域会合にて本企画を提案し、会合にて「日本初のイベントで問題は出てくると考えられるが、前向きに検討する」という方針が決定した。これにより、スプリントテレインも開催地が決定した。

以上のプロセスは実行委員会組閣前に岐阜県協会内で実施された。

以降は実行委員会と岐阜県協会が協議して詳細を決定した。

1.3 開催日程、開催地の詳細決定

開催日程は、11月3～5日の三連休を第一候補としていたが、既に島根県での公認大会が予定されていたため、翌週の11、12日を第一候補日とした。しかし、スプリントの会場予定地の多良小学校が授業参観のため使用できないことが判明し、日程の変更を検討した。

検討の結果、関ヶ原町での前後の行事、地図調査・渉外主担当の山川氏の業務の都合を考慮すると日程の変更は難しいと判断し、スプリントの競技エリアを南部の時地区へ、会場を時小学校へ変更することとした。また、行政図や周辺の施設状況を確認し、時地区は多良地区以上にスプリント競技に適していることを確認した。しかし、後日地元で開催場所の変更と時小学校の状況を確認したところ、大垣市一斉の授業参観日であるため、多良地区と同様に時地区も授業参観があることが判明した。

これを受けて、実行委員会内で議論し、最終的に授業参観終了後の午後の時間帯のみ時小学校を会場とし、午前とはえぼしふれあい会館を会場とした二会場方式を提案するに至った。本提案は帰宅児童の安全を確保することができるように注意を払うことを条件に地元から許可された。また、モデルイベント会場として、かみいしづ緑の村を使用することも併せて決定した。

ロング会場は、会場を選手権クラスのフィニッシュにできる場所での開催を第一条件に検討した。前述

の通り、テレイン南西の県立自然の家はすでに閉鎖されていたため、最寄りの関ヶ原駅からのアクセスも考慮し、史跡「開戦地」に隣接した西田運動広場を第一候補地とした。旧図を用いて、周辺の地形を確認したところ、競技中に広域農道と藤古川ダムを横断する必要であったため、現地を視察し交通量や通行可能性を確認した。その結果、安全管理役員を配置することで競技に問題がないと判断し、会場を西田運動広場とした。

以上を確認し、最終的に関ヶ原町と大垣市に実施計画書を提出して正式に開催が決定された。

2 大会の行動計画と実施

ロング・ディスタンス競技部門運営責任者 前田 悠作

2.1 運営体制

➤ 各組織の立ち位置

本大会では、以前より秋インカレの運営体制として提唱されているフランチャイズ制に則り、以下の通り運営体制および職務分担が構築された。

◇ 運営体制

1. 主催：日本学生オリエンテーリング連盟、岐阜県オリエンテーリング協会
2. 主管：実行委員会（東海・関西・金沢在住者を中心とした構成）

◇ 業務分担

- 実動部隊：実行委員会
イベント・アドバイザー（日本学連技術委員より派遣）
- 地図作成：
YMOE …学連の外注先
 - ✓ スプリント本戦地図
 - ✓ ロングモデルイベント地図
 - ✓ ロング地図修正対応NshiPRO …今回は YMOE の下請け
 - ✓ ロング本戦地図
- 各種渉外：
YMOE …地域、施設、トレイン渉外等
岐阜県協会 …後援、協賛、補助金申請等
実行委員会 …挨拶回り等

➤ 実行委員会の組織体制

実行委員会の組織体制は次ページの図の通りである。

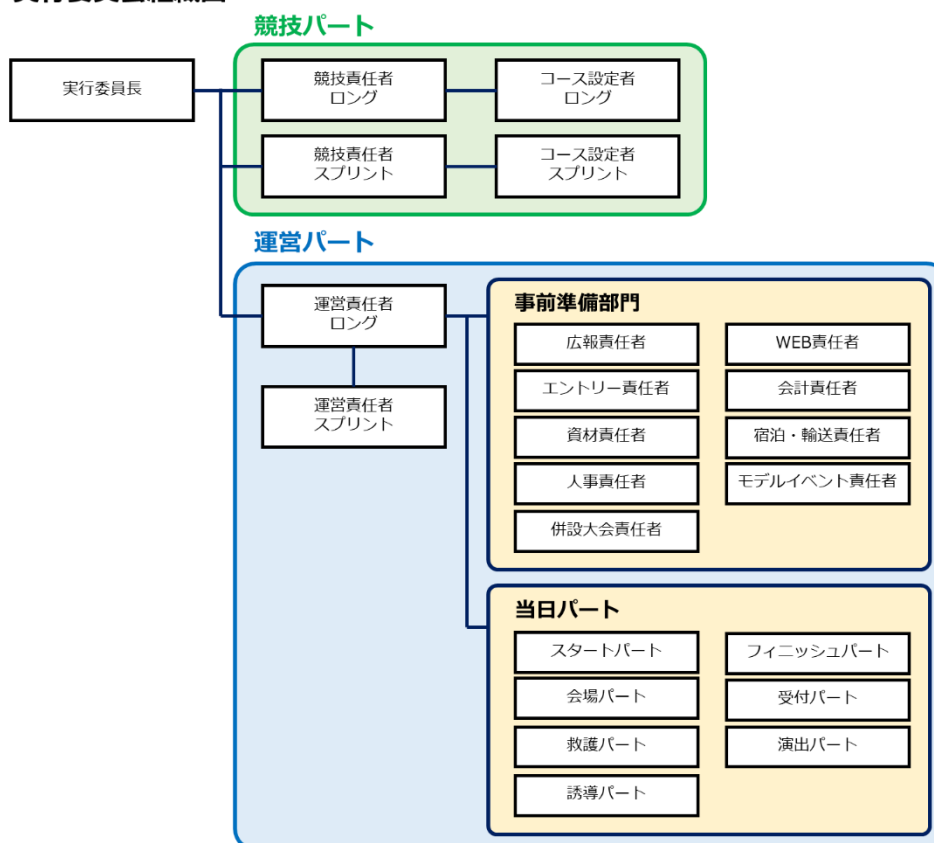
実行委員長と運営責任者の役割分担については、対外的な交渉・広報業務を実行委員長が、イベント運営に関わる内部役員の管理業務を運営責任者が担うものとして定義した。

運営責任者は、スプリント・ロングの2名としたが、事前準備の段階では各競技部門に跨って全体を管理した方が良い業務(会計、資材、輸送など)が多いと想定されたため、一方を代表者(今回はロング運営責任者)として、もう一方が従属するような体制をとった。具体的な業務分担としては、代表が事前準備部門の管理を行い、当日スケジュールの構築や現地確認、当日パートの運用についてはそれぞれが管轄するものとした。

競技パートは、競技責任者・コース設定者・イベント・アドバイザーで形成した。イベント・アドバイザーには選手権大会の根幹となる競技面を優先的に見てもらうものとした。

また、特筆すべきこととして、本大会では渉外責任者を設けなかった。開催地と関係が深い方が動きやすい、社会経験豊富な年配者が交渉した方が地元関係者にとっても好印象である、という過去のインカレの反省を踏まえた方針のもと、YMOE(山川氏は大垣市出身)と岐阜県協会に多くの渉外を担当してもらう形としたためである。利用施設各所の挨拶回りなどの当日運営に関わる業務については、実行委員長が主に担当するものとした。

実行委員会組織図



➤ 実際の運用と反省、提言

✧ 渉外業務の分担

渉外の業務分担や会計の責任について、立ち位置が曖昧なまま進行し、途中で認識を再確認するタイミングが生じた。これにより一部計画より遅れが生じた部分もある。円滑に運営を進めるためにも、運営立ち上げ時に権限と責任の所在をはっきりさせ、後に増員される役員に対しても認知させることが必要である。

✧ 実行委員会の組織構成

実行委員会の一部役職では、スケジュール遅延(詳細は○項)などが原因で、1名当たりの負荷が増大する状況が生じた。業務負荷に応じて順次補佐役を付けるなどの措置はとる予定であったが、事前準備から関われる運営者に限りがある中で十分に対応できないこともあった。過去のインカレ運営記録の参照、開催地の特性を予測により、運営初期段階から負荷の高い部門を想定し、それに応じた役員配置を行うことが望ましい。本大会では、特に競技パート、人事、広報、資材、会計の負荷が高かったように感じる。

✧ 実行委員長・運営責任者の立ち位置

実行委員長と運営責任者間の業務分担については、概ね問題なかった。情報共有と相互補助さえ十分にできていれば、今後のインカレの体制としても今回の役割分担は十分参考にと考えると考える。

運営責任者間の業務分担については、想定していた全体管理業務においては、両者間の立ち位置が曖昧になることもなく責任をもって対処でき、想定通り機能できたように考える。一方で、スケジュールの遅延も影響し、計画とは裏腹に大会直前まで代表者が管理することが多く、指揮系統が曖昧になったり、直

前の各部門の管理が疎かになったりなど、十分に機能できない点多かった。他役員にそれぞれの責任範囲を認知してもらうことができなかったこと、責任者間の役割分担が大会直前に近づくにつれスムーズに行えなかったこと、各競技部門の開催地が離れていたことが要因であるとする。以上の反省と過去の経験を踏まえ、以下の案を提示しておく。

① 開催地が近い場合 (ex. 2015 富士見)

⇒ 共通の運営責任者 1 名に補佐役を設ける。

② 開催地が遠い場合 (ex. 2016 矢板、2017 関ヶ原)

⇒ 各競技部門で運営責任者 1 名ずつ設ける。ただし、密な連携が必要。

いずれにせよ、開催地の特性や、各地方での運営リソースが大きく影響するため、その時々での運営者間で十二分に議論する必要がある。

2.2 大会運営の行動計画と実績

本大会で策定された運営の行動計画、その実施実績、反省と提言について簡単ではあるが報告する。

大会運営の行動計画と実績について、概略を以下に示す。計画に対しての遅延発生事項、それによる再計画事項、実績として課題の多い事項については、赤字で記してある。

なお、詳細なスケジュールについては、大会の引継ぎ資料として残しておく予定である。今後運営に携わる方はそちらを参照していただきたい。

日程(年/月)		計画	実績 / 備考
2016	9	始動	開催地決定
	12	運営ミーティング①	運営方針擦り合わせ 幹部役員ほぼ決定、事前準備部門責任者選任開始
2017	1	地域説明会	スプリントに使用の上石津時地区の地域課長その他に 大会概要と計画を説明
	3	運営ミーティング②	トレイン使用箇所確定、渉外方針協議 モデルイベント・併設大会実施確定
	4	警察渉外	渉外方法検討開始 ⇒ 翌月に警察署長と面談実施
		補助金申請	申請のための書類作成等検討開始 ⇒ 翌月に内定受諾、7 月に要項 2・予算案をもって本申請
	5	要項 1 (6 ヶ月前)	後日、要項 1.1 公開。交通手段決定のためアンケート実施
	6	予算案作成	
		試走① (6/10,11)	行政図、旧図にて試走
		運営ミーティング③	スプリントの競技方式の一案であった予選決勝方式を棄却 計時方式確定、地図納期・渉外状況確認 当日パートのチーフ選任開始
	7	要項 2 (4 ヶ月前)	エントリーと要項 3 掲載広告募集を開始
	8	併設大会要項 (8/7)	エントリーも同時に開始
		運営ミーティング④	地図作成・渉外状況確認 ⇒ 一部遅延発覚 当日役員募集本格化
		スプリント・	8 月初時点で未着手確認、9/10 までに納品の要請

		モディベ地図納品	⇒ 8 月末時点で未着手確認
		ロング地図納品	8/13 に納品、微修正は試走②後に YMOE が対応
		後援・協賛申請	一部後援申請は 10 頃に遅延
	9	試走② (9/23,24)	ロングはコース回し概ね確定 スプリント地図はこの時点でもほぼ未着手を確認 ⇒ 10/9 に臨時試走実施、これまでに納品を再度要請
		エントリーメ (9/29)	
	10	臨時試走 (10/9)	地図作成の進捗状況を考慮し、 ロング微修正対応を NishiPRO に依頼
		試走③ (10/21,22)	スプリント・ロングともコース確定 実質 3 週間前準備として要項チェックを宿で実施 スプリントウォームアップエリア地図作成を近藤氏に依頼
		要項 3 (2 週間前)	試走③時点で未確定事項多数 ⇒ 間に合うもギリギリ 不備修正につき要項 3.1、3.2 を発行
		スプリント・ ロング地図完成版納品 (2 週間前)	地図印刷、シーリングのため最終状態の納期を設定 ⇒ 10/27 にロング地図納品 ⇒ 10/31 にスプリント地図納品
		2 週間前準備 (10/28,29)	要項読み合わせ、各パート資材準備 ロング選手権地図シーリング
		併設大会プログラム (2 週間前)	要項 3 作成の影響で 1 週間遅延
	11	モディベ地図完成版納品 (1 週間前)	WEB 公開、地図印刷のため最終状態の納期を設定 ⇒ 間に合わず大会前日(11/10)に印刷物納品 トレーニングイベントに名称・内容変更
		1 週間前準備 (11/4,5)	各パート資材準備、各パート段取り打ち合わせ、 ロング残り・スプリント地図シーリング、ロング設置
		大会当日 (11/11,12)	前日 11/10 : 資材運搬、会場一部設営、モディベ設置 後日 11/13 : ロング残り撤収、資材返却 運営者多数のため、運営宿は 2 拠点に分かれる
	12	会計メ	各所支払いや補助金関係書類作成のため翌月 1 月まで延長
2018	2	報告書 (2/12)	

上記表中内容について反省と提言を、各項目に分けて以下に記す。

➤ 人事関係

☆ 幹部役員人選

YMOE を主体として、2016 年夏頃より幹部役員(実行委員長・競技責任者・運営責任者・イベント・アドバイザー)が選任され始める。翌年 1 月には幹部役職はほぼ確定するが、スプリントイベントアドバイザーのみ 3 月に選任された。

規約によると、第 34 条 34.1 項に日本学連理事会によるイベント・アドバイザーの指名は大会の 1 年前と定められており、本大会においては逸脱している。この条項の意味するところは、同条 34.4 項の任務を適

切に遂行するためであると想定する。そのためにも今後は、適切なタイミングと手順でイベント・アドバイザーを指名すべきである。

◇ その他部門人選

事前準備部門責任者は、運営責任者が、当日パートチーフ、当日役員は人事責任者が主体となって募集・選任を進めた。募集・選任時期は上記表の通りであり、全当日役員が最終確定したのは大会当日約 1 ヶ月前になる。

今回の役員募集は、2016 インカレミドル・リレーとの兼ね合いなどからやや難航し、主要どころの確定までに時間を擁した印象がある。役員募集の進めやすさは開催地やその他大会の時期に依ると想定される。状況を考慮しつつ、当日の予定を抑えてもらう意味でも今回実施のタイミングより少し早めに進められると良いと考える。

➤ 地図作成

詳細なスケジュールは 3 項に示すので、そちらを参照していただきたい。

本大会ではスプリント地図調査、関係するテレイン渉外、最終版の納品において大きな遅延が見られた。遅延発覚後は新しい納期を設定し、地図作成業者へ対応を要請した。しかし、その後も何度か遅延が生じており、最終的には大会当日までの猶予と照らし合わせて、実行委員会から行動計画を一日単位で提示・交渉するなどの対応を行った。

これら遅延により、主に試走でのコース決定、要項 3 掲載の競技情報決定において多大な影響が生じており、臨時試走の実施や、平日夜の事務作業など大会直前における関係役員の工数は増大した。

今後同様の事態が発生しないためにも、実行委員会の立場から以下に提言を記す。

◇ 適切な地図作成業者の選任

適切な実施計画策定と十分な業務遂行能力、報告能力のある地図作成業者を選任すべきである。この部分の影響は大きく、運営立ち上げ時期より主催団体は十分に議論すべきであろう。一方で、地図作成業者のリソースも限られているため、協力体制なども検討できると良い。

◇ 地図作成業者と運営主管団体との間での密なコミュニケーション

本大会では、進捗状況の確認が疎かであったことも計画遅延の原因である。

地図作成においてイレギュラー(天候不順、途中での渉外トラブル)はつきものであると認識している。これによる遅延が生じる場合も当然想定される。その場合、それ以後の業務遂行をスムーズに行うためにも、地図作成業者と運営主管団体が密なコミュニケーションをとれる状態であることが重要である。また、連絡は適切なタイミング(イレギュラー想定時、発生後すぐ、納期直前のトレースなど)で端的な内容で行われることが望ましい。

➤ 渉外

詳細なスケジュールは 5.1, 5.2 項に示すので、そちらを参照していただきたい。

立ち上げ時期の渉外は、業務分担も行われ、ある程度スムーズに進行したものの、大会直前になって地図作成関係業務に対応する渉外内容、主にテレイン渉外、利用施設の渉外について未着手や対応遅れが発覚し、遅延が発生した。これら遅延により、主にコースの決定、当日スケジュールの策定、役員配置において多大な影響が生じ、対応に追われることとなった。初期の業務分担割合や選任が不適切であったこと、遅延発覚後の負荷考慮による再分担が十分に対応できなかったことが原因と考える。

地図作成での提言と被るが、渉外担当者、運営主管団体、そして地域関係者を含めた連携が重要であり、いずれの団体も関係構築と適切な連絡を行うことが必要である。

➤ 試走日程

本大会では、試走日程を次のような理由で決定した。

- ・全3回程度（1.現地確認、2.コース回し確定、3.最終決定）
- ・初回は大会半年前くらいのタイミング
- ・ヤブの影響が大きいと想定される夏場は避ける
- ・役員が参加したい重要大会との被りは避ける

⇒ 試走①(6/10、11)、試走②(9/23、24)、試走③(10/21、22)に決定

1、2回目については特に問題なかったが、最終試走については要項3公開のリミット(大会当日2週間前)の1週間前であり、試走で決まった事項の反映や詳細の検討などで時間を擁し、要項3作成に影響を及ぼした。余裕をもって要項3公開へと漕ぎ着けられるように、最終試走は少なくとも公開の2週間前(大会当日4週間前)に実施できるのが望ましい。

➤ 実行委員会の業務

◇ スケジュールの共有

上記行動計画は、運営主管団体である実行委員会で主に作成提示し、他団体と予定を調整することで作成した。本大会では、全体で予定を共有することが十分にできなかったことも、遅延発覚とその対応の遅れに繋がったと考える。主に運営責任者の管轄であると思われるが、立ち上げ当初、もしくは主要役員がある程度確定した時点で、共有サイト(odyssey)に表を上げたりメールをしたりなど、全体に対して上記行動計画を示すべきであった。今後の参考にしていきたい。

◇ 進捗の管理

行動計画に対しての業務の進捗状況管理は、各部門の責任者が対応することになる。そのため必然的に業務管理がある程度必要となってくる。管理能力に長けた人材、過去の大会でそのようなポジションに就いた経験のある人材を選任することも、スムーズな運営に寄与すると考える。特に実行委員会は、流動的な組織なため、適任の判断や人材育成が難しく、慎重に考える必要がある。

◇ 効率的な運営

本大会での実行委員会の業務では、大会直前期になるにつれいくつかの部門で業務量が増大し、部門内での情報共有の遅れが発生したり、資材準備に思いがけず時間と人員が割かれたり、いくつか問題が生じた。

これらは、計画の見積り甘さ、単純に業務量が多いことが原因と考える。

前者については、大会直前期はどうしてもドタバタしてしまうことを念頭に置きながら、引継ぎ資料を参考に、責任者と相談することによって、無理のない計画を練ることで対応すべきである。

後者については、一度業務内容・必要資材・必要人員を見直す必要があると考える。無駄な準備や過剰な資材など、必要でない業務も散見され、それらにかかる工数は勿体ないものである。大会終了後は見直しによって業務内容のスリム化を都度図ることが望ましい。

➤ **今後の実行委員会**

例年のことではあるが、インカレ運営がドタバタで大変なものという構図が定着しつつある。能力が高い人材が過負荷な状態になったり、仕事・学業との両立で工数を割けなかったり、現状の体制では難しさが残るのは事実である。恩返しとしてインカレ運営を数回経験した後に、この業界から去っていく人材も多いのかもしれない。

スムーズな連携や運営の効率化によって悪いイメージを払拭することは、今後のインカレを継続するための人材確保という点で非常に重要なことである。そのためにも、主催団体・地図作成業者・運営主管団体の三位一体で、体制と計画をしっかりと議論することが必要であろう。また運営主管団体のプロ化なども、熱意のあるものが現れつつある今、視野に入れても良いだろう。

➤ **その他**

◇ **日本学連に向けて**

本大会では、日本学連の技術委員会が公表する各地区学連の選手権枠配分数やシード選手について、選定や公開に時間を擁した印象がある。また、上述の通りスプリントアドバイザーの指名についても規約と異なる部分があり、運営立ち上げ時期の日本学連の対応についていくつかの疑問を残す。

運営主体である地図作成業者や実行委員会が必要に応じて改善を実施していくことはもちろんのことであるが、主催団体である日本学連についても、一度動き方を見直し、必要であれば制度改革をするなど、インカレの基盤を整える努力を継続していただきたい。

◇ **インカレスプリントガイドラインの見直し**

本大会でも参照にした資料として、「インカレスプリント実施に関するガイドライン(2015年3月9日施行)」があり、施行から約3年が経過する。本大会を含めたその間のインカレスプリントを考慮すると、ルールとして機能している事項もあれば、実態にそぐわない事項も存在する。5年を目途に見直しとのことであるが、インカレスプリントに関する情報も十分に集まってきたことと思うので、徐々に見直しを図ることが望ましいと考える

3 スプリント競技面の準備経緯

スプリント競技部門 競技責任者 安中 勇大

3.1 競技地図の作成

◇ 計画

- ◇ 競技地図作成は YMOE 社に委託。
- ◇ 9/23、24 に行う第二回試走の 2 週間前までに競技エリアの地図完成。
- ◇ 10/21、22 に行う最終試走の 2 週間前までに全体の地図完成。
- ◇ 完成後ウォームアップ地図（待機所周辺）の地図作成。
- ◇ 最終試走にて地図修正点の洗い出し。
- ◇ 10/28、29 に行う 2 週間前準備にて地図確認・印刷開始指示だし。
- ◇ 11/4、5 に行う 1 週間前準備にてシーリング。

◇ 実施

- ◇ 9/23、24 の時点ではほぼ地図調査は行われていなかったため、急遽 10/9 に追加試走を行うこととした。
- ◇ 10/9 時点でコース原案のベストルート上のみ 7 割程度地図調査が行われていた。
- ◇ 10/21、22 の時点では選手権で通過する可能性がある部分のみ地図調査が終了・修正点を運営側が洗い出しを行う。
- ◇ この時点でウォームアップ地図（試走の結果、待機所周辺からスタート誘導上の市街地に変更）は間に合わないと判断し、イベント・アドバイザーに作成依頼。
- ◇ 10/31 にレイアウトを含む地図が完成したため、現地にて競走とイベント・アドバイザーが確認し、修正点を洗い出して一般併設の地図印刷開始指示だし。
- ◇ 11/4 に一般併設の地図納品、シーリング、選手権の地図確認、印刷開始指示だし。
- ◇ 11/5 に選手権の地図納品、シーリング。

◇ 考察・提言等

9 月の第二回試走直前まで進捗状況についての報告が地図作成業者から無かったが、納期は守られるだろうと高を括っており、催促をおこなわなかったため地図納期が非常に遅れ、運営全体がバタつく原因を作ってしまった。また、納期などについては全て口頭とメールでのやり取りであり、正式な契約書や納期が守られなかった際の対応など何も考えていなかったため、作成業者が調査を進めることをひたすら待つしかないという状態であった。

作成業者に何が起こるかはわからないにも関わらず、はじめから代替案や、どこまで納期が遅れたらどういう対策を採るかについて考えていなかったことは大きな反省点である。

実行委員会が外部の業者に何かを委託する際には必ず契約書を作成するべきである。また、納期が守られないなど契約不履行があった場合にどのような対応をするかも明文化して示しておく必要がある。現状ではきちんとした契約が結ばれないままおこなわれており、この事から生じる納期遅れなどが運営者の負担増にも結びついている。

3.2 コースの設定

◇ 計画

日本国内では前例のない規模のシティスプリントの大会であるため、コースの設定は容易ではなかった。海外のシティスプリントのマップを数多く調べ、コース設定の際に参考にした。しかし、海外のシティス

プリントに比べ、細かな地図読みが必要なエリアが少なく、基本的には、複雑に入り組んだ道の中でどの道を選択するかを問うレグが中心となると考えた。（調べた中ではポルトガルのシティスプリントが近いと感じた。）事前の下見・基盤地図を用いての試走と、海外の例をもとに、以下の点に注意してコースを組むこととした。

- ◇ 複数ルート考えられるレグを多く盛り込み、常に判断を求められるコースとする。複数ルートからベストルートを選ぶための要素としては、ルート距離、登距離、ルートのシンプルさ、曲がる回数、どれだけ遠くからコントロールが見えるか、足場の良さ、階段の有無などを考える。また、今大会ではタッチフリーSI カードを使用しているので、コントロールで出戻りせずに走り抜けられるようなルート選択をすることも大切な要素と考える。
- ◇ すぐにはルートを決め難いような勝負レグを盛り込む。
- ◇ 各レグ、ルート選択によって少しのタイム差が出るようにする。
- ◇ （数少ない）細かな地図読みが必要なエリアはできる限り使用する。
- ◇ 観戦者が選手の動きを間近で見ることができる区間を作る。
- ◇ 必要に応じて、コースを面白くするための立入禁止区画（実際には通れる）を設定する。
- ◇ コントロールの設置個所は分かり易い箇所を選択し、他の競技者の存在によりコントロールを発見できるといった偶然性を最大限排除する。
- ◇ 細い道で選手が対向して走るのは危険なので、できる限り避ける。
- ◇ 不必要に失格者を増やさないため、連続するレグのレグ線が一直線上につながるのを避ける。

◇ 実施

計画に従い、コース設定を行った。まず、スタート位置、ゴール位置を決めた。スタート位置を決める際には、未出走の選手からスタート後の選手ができる限り見えないようにすることを重視した。ゴール位置は会場の時小学校とした。その後、まず勝負レグを設定し、さらに他のコントロールの配置を決めていった。コースを組む際、以下のような問題が生じた。

- ◇ 一回目の試走までに地図が全くできておらず、基盤地図を用いてコースを組む必要があったが、現地とは異なっている箇所が多くあり、無駄になってしまった部分が多かった。
- ◇ その後も最終試走後まで地図は完成せず、試走のたびに地図が少しずつアップデートされていき、新たな道が発見されたり、新たに使えるエリアが発見されたりし、そのたびにコースの組み換えが必要となった。
- ◇ 男子5番コントロールの東南東130m程度の位置にあるエリアが、細かな地図読みが必要な面白いエリアであると思うが、このエリアが発見されて地図に反映されたのが最終試走より後だったため、コースに使用できなかった。
- ◇ 路線バスの通らない時間帯に競技を行うために、過去のインカレスプリントとは異なり、MEとWEが同時時間帯に30秒間隔で出走することとなっていた。このため、過去のインカレスプリントとは異なり、MEとWEで共通レグを使用することができなかったため、コース設定の負担が大きくなっていた。
- ◇ シティスプリントで、基本的には街中の道を走ることになるが、公道上にコントロールを設置するのは避ける必要があり、コントロールの多くは道沿いにある特徴物に置くこととなった。しかし道沿いにある特徴物は数が少なく、設置できる場所の候補が限られていた。また、例えば民家の屋内が見えるような位置にはコントロールを置かないなど、地域住民のプライバシーにも配慮

する必要があった。これらがコース設定において重い制約となった。

- ◇ コントロールを設置するためには地図を修正しなければならない(正確ではない地図を正確にしたり、描かれていない特徴物を描いたり)箇所が多く、地図制作者にそれらの注文を伝え、その後、正しく修正されているか確認する作業が、非常に大変であった。
- ◇ 会場の時小学校の手前で、選手が、車通りが多い道を渡る必要があり、どのように渡らせるか考える必要があった。結果、その道上を道なりに走る区間を設けて、その途中で各自の判断で道を渡らせることとした。(ME の 15→16、WE の 10→11)
- ◇ 併設大会、一般クラスでは 15 秒おきに男女 1 名ずつが出走するという非常に過密なスタート形式であったため、選手が細い道を通過するのは危険であった。そのため、細い道をすべて立入禁止とし、コントロール位置も、選手権のコースから一部変更した。

◇ 考察・提言等

コースは選手権者を決定するにふさわしいものになったと考えている。その上で 2 点、気になる点を挙げる。

- ◇ 結果からみると、「ルートチョイスはあるがどちらを選んでもタイムはほぼ変わらない」というレグが多かった。このようになった原因は、①基本的に街中の道をたどるだけなのでルートを探すのが容易であるということ、②そのためタイム差が出るようにするとルートが短い方一択になってしまうということ、③そもそもコントロールを設置できる特徴物が少ないので微調整する余地がなかったということ、がある。
- ◇ コースを面白くするための立入禁止区画(実際には通れる)は本大会では使用しなかった。もしこれを使用していると、より難解なレグが組めた可能性はある。

コース設定にあたり、地図ができていないのにコースを組まなければならなく、そのためにコース設定者の負担は激増した(お金をもらって地図制作をしている人が仕事をしないせいで、ボランティアの運営者の負担が激増するという構図になっていた)。

また、男女が同時時間帯に出走するため、男女でできる限りコースを変える必要があり、コース設定者の負担が増した。

- ◇ コース設定するより前に、地図はできているべきである。
- ◇ 可能なら男女のスタートの時間帯は、ずれているべきである。
- ◇ コース設定者にはそれなりの負担はかかるので、現状通りボランティアで運営するなら、オリエンテーリングに対してモチベーションを保てる人がその役割を担うべきである。

3.3 安全対策

◇ 計画

今大会は市街地で行われたため、「競技者の安全」と「地元住民の安全」の両方を考慮に入れる必要があった。

◇ 競技者の安全について

自動車との接触を重点的に対策した。自動車がスピードを出してくる道路はトレイン中央の主要道のみであったため、その道路の横断箇所全てに役員を立たせ、選手権においては危険な際のみ選手に停止の指示を出し、一般併設クラスでは自動車が通行する際に選手を停止させた。トレインに侵入する自動車に対し看板を用いて徐行の呼びかけも行った。また、通行する時間がわ

かっているバスに関しては、その通行時間と被らないように競技を行う時間を設定した。

その他、狭路やあぜ道など選手同士の接触の危険性が高い箇所については、多くの選手が出走する一般併設クラスでは立入禁止とした。

◇ 地元住民の安全について

今回のテレイン内には高齢な地域住民の方が散歩や農作業をしていることが多く見受けられたため、選手との接触等の事故が考えられた。対策として、試走などの際に出会った人には都度説明を行い、その他に実行委員長を中心としてテレイン内全ての家に競技の説明をしに回った。

◇ 実施

選手、地元住民ともに接触などによる怪我は発生しなかった。しかし、主要道における指定箇所以外での横断や通行禁止の道路の通行が何件か報告された。また、車の接触を避けるため横断禁止箇所を横断した選手もいた。

バスの運行時刻に基づいて競技を行う時間を決定したため、一般併設クラスでは選手の出走が 15 秒おきという非常にタイトな設定となってしまう、テレイン内に同時に大量の選手が滞留することになり、かえって接触のリスクが高まっていた恐れがある。また、併設クラスの競技開始時間がかかなり早い時間になり、スタート時刻の公開が大会当日からあまり時間がなかったため、スタート時刻の変更の依頼が何件もあった。

◇ 考察・提言等

結果として今回は事故にはつながらなかったが、役員の監視の届かない箇所での主要道横断などは事故の原因となるため、選手に対して横断箇所の限定は安全面を考慮したうえで行っているという理解を深めてもらわなくてはならなかった。テクニカルミーティングにおいて予め立入禁止区域や、青黄テープの存在については述べていたが、それらをどのような理由で設け、なぜそれらを選手に遵守してもらわなくてはならなかったかについての説明が足りなかったように感じている。

バスの運行時刻については仕方ない部分もあるが、選手より車を優先させる一般併設の部においては、バスについてシビアに考えなくてもよかったかも知れない。また、募集要項を公開した段階で各部門の参加者のスタート開始時刻についても明示しておくべきだった。

テクニカルミーティング等において、予めどのような対策をどのような理由で行っているかを説明した上で、選手、一般の方の安全のため必ず守ってもらわなくてはならないということを周知させる。

また、今大会では採用しなかったが曲がり角などでの見通しが悪い市街地スプリントでは選手同士の出会いがしらの接触を防ぐため、熊鈴の着用を義務付けて選手の接近を音で知らせることも選手の怪我防止に役立つと考えられる。

4 ロング競技面の準備経緯

ロング・ディスタンス競技部門 競技責任者 松下 睦生

4.1 競技地図の作成

◇ 計画

- ◇ 競技地図の作成 担当：NishiPRO 期限：8 月中
- ◇ 地図修正 担当：YMOE 期限：試走後随時、最終 10/27(大会 2 週間前)
- ◇ 地図印刷 担当：YMOE 期限：一般 10/27、選手権 11/3

◇ 実施

競技地図は予定通り 8 月 13 日納品していただいた。その後の修正調査について、一部 YMOE では手が回らないということになり、第 2 回試走後の地図修正を NishiPRO に担当していただいた。最終試走(10/21、22)の時点では渉外が完了しておらずコースを確定できなかったのもあり、最終試走時点で一般のシーリングを 2 週間前準備(10/28、29)で、選手権のシーリングを前週準備(11/4、5)ですることになったので、地図最終完成の納期を 10/27、印刷の納期をそれぞれの準備の前日と設定した。しかしながら、地図修正が間に合わなかったため、一般にかかわる部分を 2 週間前までに、選手権のみに関する部分を 1 週間前までにと変更になった。さらに、ウォームアップエリアの地図完成は 1 週間前でも間に合わず結局インカレスプリント前日に納品された。

◇ 考察・提言等

業者との契約には、正式な書面での契約とし、違反した場合は相応の処置が必要と考えられる。納期の設定も行おうとしていたがそもそも渉外が完了せずコース確定の見通しが立たずできなかった。また、渉外の必要性についても大会半年前から担当者に伝えていたので書面で契約する以外対策はないと思われる。

4.2 コースの設定

◇ 計画

テレイン全範囲に渡って急峻なエリアが広がっているという前提条件を踏まえ、以下の点に注意してコースを組むこととした。

- ◇ 特に課題のない単調な登りは極力排除する。
- ◇ ルートチョイスを問われるレッグを多く設定し、特に、コース中に勝負となるロングレッグを複数盛り込む。
- ◇ コントロールの設置個所は分かり易い箇所を選択し、他の競技者の存在によりコントロールを発見できるといった偶然性を最大限排除する。
- ◇ 課題が偏ることなく、尾根たどり・直進といった様々なナビゲーション課題を問うコースとする。
- ◇ 緩急がついたコースとするため、可能な限り急峻な斜面 X フラットなエリア、A ヤブ X オープンといった様々な場所を通過するように努める。

◇ 実施

計画に従い、コース設定を行った。以下にポイントを述べる。

- ◇ 先に地図を読むことができないよう、極力単調なレッグは排除し、場合によっては少し辛めなコントロール位置とした。
- ◇ 特にロングレッグは、複数ルートが考えられるようにし、選手の特性によってベストルートが分かれるようにした。また、ナビゲーション力が求められるルートが速く、登坂力や走力が中心と

なるレッグを遅くなるよう始点と終点を調整した。

- ◇ 中距離以上のレッグは全てルートチョイスが問われるレッグとなるように心がけた。

また、コース設定を実施するにあたり、優勝設定タイムとコースの質の両立に苦労した。テレインの性質上、距離を伸ばそうと闇雲に組むと、容易にアップが膨れ上がりナビゲーションも容易となるレッグとなってしまうため、男子選手権はウィニングタイムをぎりぎり切られる懸念があったが、コースの質を担保するために距離を大幅に伸ばせなかった。逆に女子選手権は試走タイムの結果から優勝設定タイムをオーバーしてしまう懸念があり、削れるところは極力削ることを心がけ、ほぼスタート地区からゴールまで一直線でつないだようなコースとなった。

◇ 考察・提言等

- ◇ コースの内容については、ルートチョイスを課題にしたレッグで男子・女子選手権ともに、それなりに分かれた結果となり、自身の得意不得意を理解した上でベストなルートを選択できるかという課題を提供でき、ある程度のコース質は保てたと考える。
- ◇ 一方、優勝設定タイムに関して、男子選手権は約 5 分、女子選手権は約 9 分以上優勝設定タイムを切られてしまった。特に男子は数秒であるが、日本学生オリエンテーリング選手権実施規則（70-80 分）を逸脱してしまった。女子に関しては、もっと距離を伸ばし、より難解なレッグを増やすべきだった。優勝設定タイムを大幅に見誤ってしまったことが主要因と考える。
- ◇ コースを確定するにあたり、選手権スタート地区およびダム前誘導の墓地に関しての渉外が遅れていたため、3 週間前の最終試走を終えても、渉外の結果次第でコースを変更しなければいけない可能性があった。今回は、渉外問題は生じなかったため、変更処置は行わずに済んだ。
- ◇ 優勝設定タイムを大幅に見誤ってしまったことについて
特に女子選手権の優勝設定タイムを決定するにあたり、できる限りの女子競技者による試走を行い、確度を高めるべき。また、極力本番と近い条件（フラッグ設置、給水あり）にて試走をすべきである。
- ◇ 渉外の結果次第でコースを変更しなければいけない可能性があった。
使える部分が途中で変更となると再度組み直しを余儀なくされ、今までの努力が無に帰することとなる。少なくとも使用可能範囲を把握した上で、第 2 回の試走を行うべきであり、逆算して計画的にテレイン渉外を行うべきである。

4.3 安全対策

◇ 計画

第一回試走で安全面をチェック。

◇ 実施

- ◇ 選手権競技中誘導での道路横断 ⇒ 交通量を確認し、安全に横断できる十分な区間を設けた。
- ◇ テレイン内 ⇒ 危険な急斜面を通らないようなコース設定にした。

◇ 考察・提言等

今大会では、特筆すべき安全面に関する問題等は見受けられませんでした。

5 運営面の準備経緯

本大会において、例年に対して特に変化・課題の多かった部門について詳細を記す。

5.1 スプリント渉外報告

スプリント・ロングディスタンス競技部門 実行委員長 糸井川 壮大

◇ 実施

日本初の大規模市街地スプリント大会開催に向けて公園等でのスプリント大会以上に綿密で特殊な渉外活動を実施した。そこで、渉外先とその内容について以下に列挙する。

◇ 地元警察

実行委員会組閣前に岐阜県協会によって開催の目途が立っていたため、まず地元警察である岐阜県養老警察署と交渉した。主な目的は競技のための道路使用許可を得ることである。警察には、詳細な実施計画と安全管理体制の概要の説明に加えて、地域振興の一環として実施することを前面に押し出した。警察からは前向きな回答を得ることができたが、オリエンテーリングの性質上、選手がどの道を通行するかが明確に決まっていないため、本部預かりとなった。また、コースが確定し、それに合わせた具体的な安全対策体制を提示するまでは正式な許可は出せないとの回答を得た。そこで、コースの概要が決まった 10 月に再度許可申請を実施した。この時点で既に本部からの許可は下りていたため、具体的なコース上の安全対策案（主に看板と監視員配置）を提示し、正式に養老警察署からの道路使用許可を得た。

◇ 地元説明会の実施

開催の経緯にも書いた通り本大会は地元の方の全面的な協力の元に運営された。実行委員会組閣前から岐阜県協会と協力関係が築かれていたため全体としてスムーズに進行できた。競技に関する具体的な説明会は警察から正式な道路使用許可が得られた 10 月に開催した。説明会には地元の各自治会代表者に出席していただき、競技の概要、安全管理体制、警察からの許可が出ていること、地域住民への周知方法を説明した。イベントに対しては非常に好意的に受け取っていただいたが、参加者数が 1000 人規模のイベントであるため安全管理については徹底するように強く要望された。

この時点で大会当日に競技エリア内の寺院で行事が予定されていることが判明したため、新たに寺院周辺に監視員を配置し、安全対策を強化することを決定した。また、寺院を訪問し、イベントの告知を直接実施した。

◇ 競技エリア内の住民への挨拶回り

まず地元自治会の回覧板によるイベントの周知を実施した。それに加えて本大会では、競技エリア内の地域住民への全戸訪問も実施した。日本初の市街地スプリント大会であるため、今後の市街地スプリントイベントの普及にも関わるため、地域住民と実行委員会で認識に齟齬がないように万全を期すこととした。訪問は競技内容と安全管理について理解のある一部パートチーフと責任者クラスで実施した。説明には、安全管理の概要を示した地図とあいさつ文を持参し、一軒一軒直接説明に上がった。また、コントロールや立ち入り禁止等の表示テープを設置する場所周辺の住民には改めて設置の許可をいただいた。これは私見であるが、全戸訪問中は、概して好意的で励ましの言葉もしばしばいただき、地元の理解と協力関係の重要性を改めて認識することになった。

◇ 時小学校（本戦会場）

時小学校の使用に関して、問題となったのは主に二点である。

一つ目は、使用時間についてである。開催の経緯でも記した通り、午前は授業参観で使用可能になるのは児童の下校時刻の 11:45 からであった。そのため会場の設営に割ける時間が極めて短くなってしまった。これに対しては前日の授業終了時刻から職員の退勤時間までの間でテントの設営など可能な範囲で事前準備をさせていただくことで解決した。また、開場までの参加者の待機場所は、学校向かいの材木置き場スペースを地元の方からお借りすることで対応した。

二つ目は天候の問題である。時小学校のグラウンドは水はけが非常に悪く、雨天時はグラウンドを使用できなかった。そのため会場レイアウトを晴天時パターンと雨天時パターンの二通りを用意することとなった。当日は、夜間に雨が降ったため、学校側からグラウンドの使用許可は下りなかった。そこで晴天時レイアウトからテントの移動を実施することとなり、開場に遅れが生じてしまった。

◇ かみいしづ緑の村（モデルイベント会場）

モデルイベント会場の緑の村は参加者用の駐車場も兼ねており、本大会の要ともなっていた。インカレ規模の大会を運営するにあたって広い駐車場の確保は必須事項である。本大会では、緑の村向かいの空き地を開放していただき選手権待機所行のバスも駐車できる十分な広さを確保することができた。

◇ えぼしふれあい会館（午前併設大会会場）、日本昭和音楽村（選手権待機所）

これらの会場には事前の使用許可申請と現地での説明を行った。イベントの概要と施設の使用方法和注意事項を確認した。

◇ 考察・提言等

本大会の渉外は概して順調に進めることができた。時小学校の使用方法に関しては、大会直前まで小学校側との交渉と認識の確認作業が続いたが、大きな問題もなく終了することができた。今後、市街地スプリントを開催するモデルケースになったと思われるので、各地で開催する機運が高まってくることを期待する。しかし、非常に危うい点も散見された。まず、警察への渉外の遅れである。当初 9 月までには実施するはずだったが、地図納期の大幅な遅れによってコースの概要が確定できず停滞してしまった。今回は大きな問題もなく承認を受けることができたが、大会一か月前でトレインの変更を余儀なくされる恐れもあった。また、施設の利用申請について、担当者の口頭ベースではなく正式な使用許可を得ているのかが曖昧で、実行委員会と渉外担当者との間で認識に齟齬が生じていたことが多々あった。

本大会の渉外は主に山川氏に実施していただいたが、負担が偏りすぎていたと考えられる。最初の関係構築までは予定通り進行していたので、地図作成業務が本格化するのに合わせて渉外業務を適度に分散し、地図作成に注力していただくべきであった。また、業務分散要請にもすぐに応じられるように常に渉外の進捗状況を整理して共有する体制づくりが必要であった。

5.2 ロング渉外報告

スプリント・ロングディスタンス競技部門 実行委員長 糸井川 壮大

◇ 実施

ロング競技についても渉外活動は岐阜県協会主導で実施した。基本的には関ヶ原町への渉外と地元自治会長への渉外と回覧板でのイベント周知を実施した。なお、会場に隣接する住宅地については全戸挨拶を実施し、当日応援などで騒がしくなることをご了解いただいた。また、選手権待機所等の確保のために、地域の小学校や公共施設へ利用申請をした。

ロング競技の渉外活動については、これらの過程で発生した複数のトラブルを報告する。

◇ テレイン利用について

テレインの「関ヶ原古戦場」内にはオリエンテーリング目的での山林への侵入を認めていない地主がいることが事前にわかっていた。そこで当該地主の土地を使用しないようにコース設定する方針で渉外活動を進めた。しかし、地図調査の時点で当該地主から調査で使用していた車に不法侵入の旨の書置きがなされたため、当該地主の土地は使用しない旨を伝えることで解決すると渉外担当者が判断した。また、行政当局へも相談し、地主の自宅の場所を確認した。実行委員会からは事前に難しい地主であることがわかっていたため、早めの訪問を渉外担当者に打診していたが、自治会回覧版広報の時期まで実行されなかった。

地主への挨拶は大会一か月前の自治会回覧版広報と同時に実施したが、ここで大きな問題が発生した。自治会への挨拶は済ませていたが、事前に地主への直接挨拶なしに調査活動を始めたことを批判され、大会開催を許可できない旨を言い渡された。また、この時点で当該地主の所有地がテレイン内に散在していることが発覚し、地主の土地を回避しての競技は困難であることも発覚した。この時点で、大会当日に中止を余儀なくされた 2010 年の奈良インカレと同等の窮地に立たされていることを実行委員会として認識した。

後日、状況を整理し、渉外担当者と実行委員長の二名で改めて当該地主宅を訪問した。そこで過去にオリエンテーリング関係と思しき団体が練習会中に所有山林内の食害防止ネットを開けたままにしたため、野生動物による樹木の食害を受け、これが原因でオリエンテーリングに対して非常に悪い印象を持っておられることが判明した。この事実から山林利用に対するマナーの徹底を強く求められることとなった。これに対し、オリエンテーリング関係者の代表として深く謝罪し、マナー向上に努めることを約束した。また、大会開催まで日が迫っておりこの段階で中止にすることが何としても避けたい旨を懸命に伝え、条件付きで開催の許可をいただくに至った。そして、大会終了後に林業が継続的に実施されている山林への入山時に留意すべき点について指導を受け、今後の運用に活かすことを確約した。なお、本テレインは以下のシステムで運用されるので、ご承知いただきたい。

- テレインの利用管理は岐阜県協会に一元化し、岐阜県協会との共催でのみ使用可能となる。また、利用に際しては岐阜県協会の指導の下に利用する。
- 事前に地主への挨拶をし、了解を得てイベントを開催する。

◇ 会場周辺の工事について

大会開催 2 週間前に突然、会場に隣接する開戦地が工事のため閉鎖されることが関ヶ原町のホームページに公開された。これにより参加者の動線と選手権の動線が交錯する恐れが出てきたため、複数の解決策を急遽練り、関ヶ原町地域課に問い合わせた。幸い、当日は休日なので工事

はなく、人の動線は確保できるように配慮するとの回答をいただくことができたが、危うく、会場レイアウトが大きく変更になるところであった。

◇ 大会当日の参加者の動きについて

大会当日に、本部へエコミュージアム関ヶ原から苦情の連絡が入った。内容は「泥だらけの靴で施設に入り無断でトイレを使用して出て行った」というものであった。エコミュージアム関ヶ原は一般クラスのスタート地区の近くにある公共の施設であるが、当該施設は参加者が通行する予定はなかったため事前に渉外はしていなかった。そのため、施設の代表者からトイレ利用者のマナーが悪いとのお叱りの電話を受けた。この一報を受けて実行委員長が直ちに施設を訪問し、イベント概要を説明した上で謝罪した。施設の方からは、今後注意するようにとのお叱りを受けたが、幸いにも今後のイベントでは、事前連絡をすればトイレの利用は許可できるとのお言葉をいただいた。

◇ 考察・提言等

ロングの渉外でも、スプリントと同様に渉外活動が後手に回ってしまったことが大きな問題であった。事前に厳しい地主がいることがわかっていないながら、問題の重大性を正しく把握できておらず、現地に赴くのが遅れてしまったことが今回のトラブルの最大の要因である。また、調査段階での書置きの件は実行委員会内で十分に共有されなかったため、事態を悪化させたと考えられる。地元との関係が最重要な競技であることを鑑み、些細なトラブルにも目を配り、地元との良好な関係の構築を最優先とする必要があった。

また、大会当日の参加者のマナーについても、改善を求めたい。実行委員会から提示のない施設を利用することは基本的にあってはならない。競技の性質上、施設を少なからず汚してしまうことは容易に想像できるはずである。このような行動が思わぬ渉外トラブルを生むことになるので、参加者は自身の一般人としてのマナーを再確認し、競技に臨んでいただきたい。

まず、渉外担当者と実行委員会で渉外の進捗状況を常に共有する体制をもつことが重要である。また、オリエンテーリングは地元の土地をお借りして実施する競技であることを改めて確認し、地元の状況を事前に行政などを通じてリサーチし、対策を講じてから調査を進める必要がある。地域によっては、困難な場所も少なからず存在するので、いつも通りやればよい、という考えは捨て、丁寧な渉外活動を心掛けるべきである。

5.3 演出

演出パートチーフ 稲吉 勇人

本大会では、予算案策定の時点で、ある程度自由度があったことと、今後のインカレの発展を見据えた運営者のたつての想いから、スプリント及びロングの両競技において演出面を強化し、多数の取り組みを実施した。以下に各内容の概要と結果および今後の課題について記す。

内容	費用（概算）	主な資材、関連物品等
GPS トラッキング	18 万円	GPS 端末（日本ロゲイニング協会よりレンタル）、 ダミー端末、GPS ベスト、 紙粘土、チャック付きポリ袋
大型 LED ビジョン	68 万円	LED パネル、周辺機材一式
カメラ中継	4 万円	カメラ、ポケット Wi-Fi、三脚
速報	不明(資材費)	ボード
実況	不明(資材費)	音響機材
観戦ガイド	2 万円	紙媒体で業者に発注

➤ GPS トラッキング

世界大会などでは良く使用されており、本大会で初めて導入を試みた。

競技公平性の観点から全競技者に GPS 端末を携帯させることが望ましいが、GPS 端末は 30 台しか確保できず、残りはダミー端末を用意した。ダミー端末は、形、大きさなどの点で、できるだけ本物と同質性の高いものを目指し、紙粘土で作成した。

GPS 端末が 30 台であったため、あらかじめ選手権の部出場者の中から好タイムが期待できる選手を男子 20 人、女子 10 人をピックアップしてその選手に本物の GPS 端末を割り当てることにした。GPS ベストはスタート待機所で配布し、GPS 端末及びダミー端末はスタート 3 分前枠で役員が GPS ベストに装着することとした。

システムは正常に作動し、特に問題は発生しなかった。ロング競技中に 2 人端末を落とした選手がいたが、2 人とも紙粘土で作ったダミー端末であったため、資材紛失にはならなかった。GPS トラッキングはサイト経由で観ることができるものであったが、上手く使いこなせない観戦者が多かったため、サイトの使い方を適切に周知すべきだった。

この取り組み自体は好評であったと感じている。動作環境さえ比較的簡単に導入できるため、今後の利用も検討してもらえればと思う。

➤ 大型 LED ビジョン

演出機材の中で最も費用がかかるが、当日の観戦者にとっては最も効果的なものでもある。本大会では、予算をある程度確保し、導入するに至った。

映し出す内容としては、コース解説や GPS トラッキング、事前に用意したテレインの様子や実際に走っている動画などである。また、一日目の夕方にロングのテクニカルミーティングでも使用した。

1 日目のスプリントでは、雨による機材トラブル、演出テントの設営の遅延等で競技開始直後はうまく

機能していなかった。コース解説はレース開始前にする予定であったが、その時間が無かったため、レース後に行った。

2日目のロングでは特に問題なく運用できた。また、表彰式の遅延による繋ぎとして、コースプランナーが大型 LED ビジョンを用いて、コース解説等を行った。運用としては、映像を切り替えている時などにビジョンに大会のロゴ等を映し出す等の繋ぎを用意できればよかった。

また、業者によると、この規模のイベントであればスポンサーをつけることができるらしく、その場合は LED ビジョンにスポンサーの CM 等を流すだけで 10 万円単位の資金を提供してもらえるとのことである。今大会ではスポンサー探しは間に合わず、実施はしていないが、今後は予算確保の為に実施することを推奨する。

➤ カメラ中継

大型 LED ビジョンやストリーミング中継と連携させ、臨場感のある競技風景を演出するべく導入した。

カメラは業者からレンタルした。また、ソフトバンクの Wi-Fi 端末を 3 つ、ロングのスタート地区はドコモしか電波が通っていなかったため、ドコモの Wi-Fi 端末も 1 つレンタルした。

カメラ中継はストリーミング中継で実施することにした。中継するウェブサイトは Ustream を使用した。カメラは 2 台使用し、1 台はスタート地区、もう 1 台は中間点に設置した。スプリントはスタートが定点カメラ、中間点が動点カメラ、ロングはその逆にした。動点カメラは役員が動かした。

スプリントは特に問題なく計画通りに進行していたが、スタートの後半は電池切れになり中継が止まってしまった。

ロングは、当日、スタート地区の電波状況が悪く、うまく中継できなかったため、ストリーミング中継を諦め、その代わりに LINE カメラでスタートの様子を撮影し、その映像を会場の PC に飛ばし、ビジョンに映し出す方法をとった。

途中でバッテリーが切れてしまったことが反省点である。本番のレース開始前に予備バッテリーに交換しておくべきだった。バッテリーは事前に継続時間等を調べておけば解決する。電波の問題は、よほど電波の良い場所でない限り、当日の状況によりけりである。

➤ 速報ボード

速報ボードやボード用の紙、レシートプリンタは全て資材担当経由で取り寄せた。

今回は GPS トラッキングもあったため、速報ボードはフィニッシュのみにした。

スプリントは選手のフィニッシュする間隔が早すぎて全く速報が間に合っていなかった。タイムラグなしに速報するのは不可能な状態だった。

ロングはフィニッシュ間隔が空いているためかなり余裕があり、特に問題なく運用できた。

レース中に速報として機能させたいのであれば、必要なスタッフ人数を揃える、レシートプリンタを複数台体制にする等の対策が考えられる。また、スプリントに関しては、競技の特性上、実施することが非常に困難であることが分かった。

➤ 実況

例年実施されているが、本大会では大型 LED ビジョンの映像と共に多種多様な実況に挑戦した。

音響関連は資材担当に任せ、実況用の PC やタブレットは実況担当の私物を使用した。

運営の人手不足もあり、実況は 2 人で行うことにした。両競技部門ともに解説 1 人とコースプランナー 1 人の体制で行った。GPS トラッキングがあるので、コースプランナーは主に GPS を見ながらコース解説や選手の実況、もう 1 人は中間点通過情報やフィニッシュ情報を実況する役割を任せた。インタビューは

コースプランナーに依頼した。

スプリントでは、演出テント設置の遅延等のトラブルで当初予定していたレース開始前のコース解説はできなかった。

ロングでは、特に問題は生じなかった。ただし、選手が一気にフィニッシュしてくる、かつシード選手が出走している時は実況することが多すぎて実況担当の負担が大きかったように思う。

可能であれば3人以上の体制で実況を行うことを推奨する。

➤ 観戦ガイド

例年も作成されているが、本大会ではGPSトラッキングを周知する目的も含んでいる。

大きさをA3裏表にし、表に例年通りの選手紹介とスペクテーターズレーンや中間点の位置を、裏面にコース解説を掲載した。コース解説は、GPSを使うのならコース情報があった方がより観戦が楽しめるだろうとの想定から作成した。

早い段階で印刷会社と対応可能な納期等を調べておくと、コストパフォーマンスも良い業者を選定できる。本大会ではカラーで印刷することに成功した。

5.4 資材

資材責任者 朝野 涼太

➤ 事前準備

本大会では、競技の特性や、各拠点でのいくつかの制約により、資材の手配が困難なものとなった。

◇ 計画、買い出し

各パートチーフが選任された後に、必要資材を抽出してもらい、資材責任者でとりまとめた。主な運営資材は、例年使い回しで利用されている日本学連(YMOE)資材であり、所有リストと集計リストを照らし合わせ足りない資材を買い出した。大会 2 週間前に全ての買い出しを完了することとした。

概ね計画通りに進行したが、大会直前期の変更や追加買い出しが多く、多忙な状態となった。また、追加買い出しより当初の予算も超過することとなった。直前期に変更・追加が生じるのはある程度致し方ないが、資材リスト集計の際に、昨年のまま流用していないか、抜け漏れがないかを丁寧にチェックすべきである。また、予算状況も常に把握できることが望ましい。

◇ 日本学連資材

日本学連の資材であるが、老朽化が激しくいくつかの資材は廃却や不使用としたことも、変更・追加が生じた理由であると考え。これら資材の管理は、他の作業時間を圧迫するなど、運営中の実行委員会では手に負えない部分もあり、日本学連の方で一度整理・見直しを図ることが望ましい。

また、今回借用で対応した、演出機材や更衣室用テントなどは、今後も利用する可能性が極めて高い。これら資材については、日本学連で購入し既存資材と合わせて管理できると、運営の効率化に寄与できると考える。

◇ 計時機材

競技に関する重要資材であり、計時方法が確定する要項 2 公開より前時期から余裕をもって手配を開始した。しかしながら、この時期でも十分とは言えず、同日開催の他大会に一部機材を確保されていた。更に余裕をもつために、早い段階に計時方法を確定させる必要がある。

また、借用の数量については、借用先の団体に概数を伝え予約していたが、大会直前期に状況が変化し数量が大きく変更したため、何度も連絡し交渉をすることとなった。足りなくなってしまうと立ち行かなくなることのないように、必要数量の試算精度を向上させ、ある程度余裕を持たせた数量を確保することが望ましい。

◇ 大型資材

大型テント、机、椅子などの大型資材に関しては、地元自治体からのレンタルで対応した。運搬、返却に至るまで大きな問題は発生していないが、借用先が多く準備段階で時間を費やした。

女子更衣室については専用の部屋が施設の制約上借りられず、小型のテント設営で対応することとなった。小型テントは、一部日本学連資材で対応するも個数が足りず、比較的費用が安価なレンタル業者を選定し借用で対応した。

本大会では、大会直前期まで施設利用との兼ね合いからトイレ利用方法が難航し、結果的にロング当日は仮設トイレを使用した。仮設トイレはトラックによって運搬することとなるが、会場までの道路幅が非常に狭く運搬の可否が課題となり、その交渉で時間を費やした。今回は施設へ

の渉外が遅延したこと、レンタル業者との交渉が難航したことが原因であり、大会計画の早期にトイレ利用方法についても織り込んで検討しなければならない。

➤ 当日の資材運搬

本大会では、スプリントとロングでの開催地が離れており、資材運搬については当日の搬入と拠点間の移動において複雑で労力のかかるものとなった。また、利用した各拠点には、前日と後日に資材を置いておくことが困難な状況であったことから、当日中におおよそその資材を運搬することとなり、準備・片付けがタイトなスケジュールで行われることとなった。

今後のインカレ、特にスプリント・ロングにおいては同様のシチュエーションは存在し得ると考えられる。そのため以下事項を提言として示しておく。

◇ 資材運搬計画のシンプル化

本大会では、車の台数の都合上、複数のパートの資材を特定の車に積み込んで運搬するという段取りをとっていた。そのため、積み下ろしの際に都度整理するという工程が発生し、運営準備時間を圧迫した。また、整理の際に所在が不明になった資材もいくつか存在し混乱を招いた。事前の仕分けをしっかりと行い、各パートが自パートの資材のみ全て運搬するなど、所在を常に把握できるようなシンプルな運搬計画にできることが望ましい。

◇ 輸送能力の確保

本大会では、大型のバン 1 台が中心となって資材運搬を行っていた。しかしながら、全ての車を合計しても輸送能力は十分ではなく、資材積み下ろしも含め時間をかけることとなった。インカレの資材は大型で量も多くなりがちであり、それに見合った輸送能力のある車を準備すべきである。また、これにより上述のシンプル化も実現可能となる。

➤ 当日片付け

当日の片付けについては、各パートの業務終了後片付けられるものから取り掛かり始め、競技が終了次第車で宿に輸送し整理した。しかしながら、スケジュールの遅延と計画不足により、その場での対応になり、整理して輸送することができなかった。特にロングでは数種の資材が混在した状態でまとめて宿に運んだため、翌日の整理と返却に多大な労力をかけることとなった。資材片付けは大会の終盤で慌ただしくも気が抜けがちなタイミングであるので、綿密な計画を立てて遂行すべきである。

上述の資材運搬や片付けで計画不足が露呈したことは、計画・買い出しの段階で工数をとられてしまったことも原因であると考ええる。副責任者や、レンタル業者専用の担当を設けるなどして、業務を分担し、主責任者は全体像の把握や当日の計画に力を入れるべきである。

➤ 資材の返却

返却が必要な資材については、事前に担当者と打ち合わせて優先的に回収することとした。しかしながら、片付けの際に所在が曖昧になり、回収が困難になった資材がいくつか存在し、一部を期限内に返却できない事態が生じた。

外部借用の資材は、重要物であることを運営者に認識させなければいけない。行方不明になることの無いように、該当パートの責任者と事前打ち合わせをし、所定の場所に返却させる仕組みを作るべきである。特に計時機材などは、翌週以降の大会でも使用の可能性があるため、より注意を払うべきである。

6 当日の運営

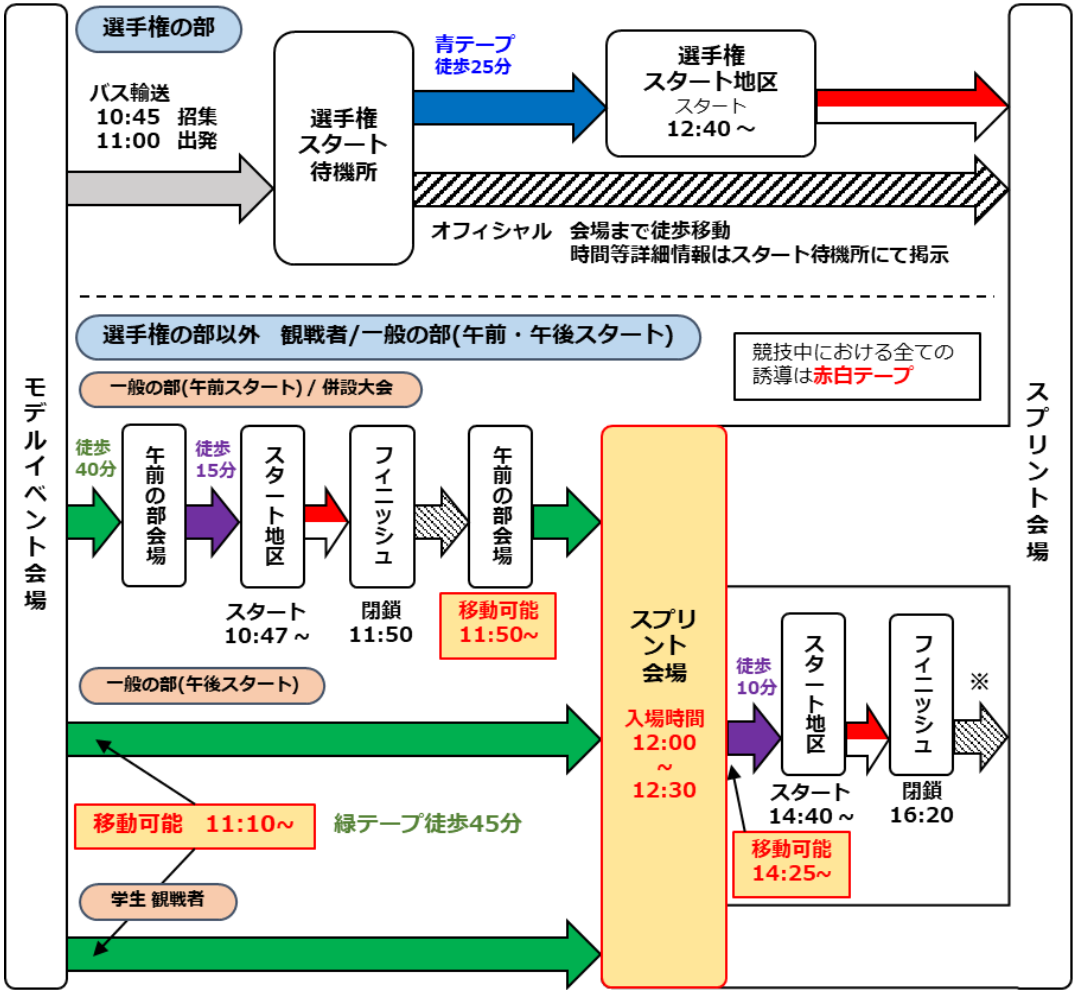
ロング・ディスタンス競技部門 運営責任者 前田 悠作

2 項では全体の行動計画と実績について、5 項では詳細な事前準備について記した。ここでは、大会当日の運営に関する準備と対応について記す。

6.1 タイムスケジュール概要

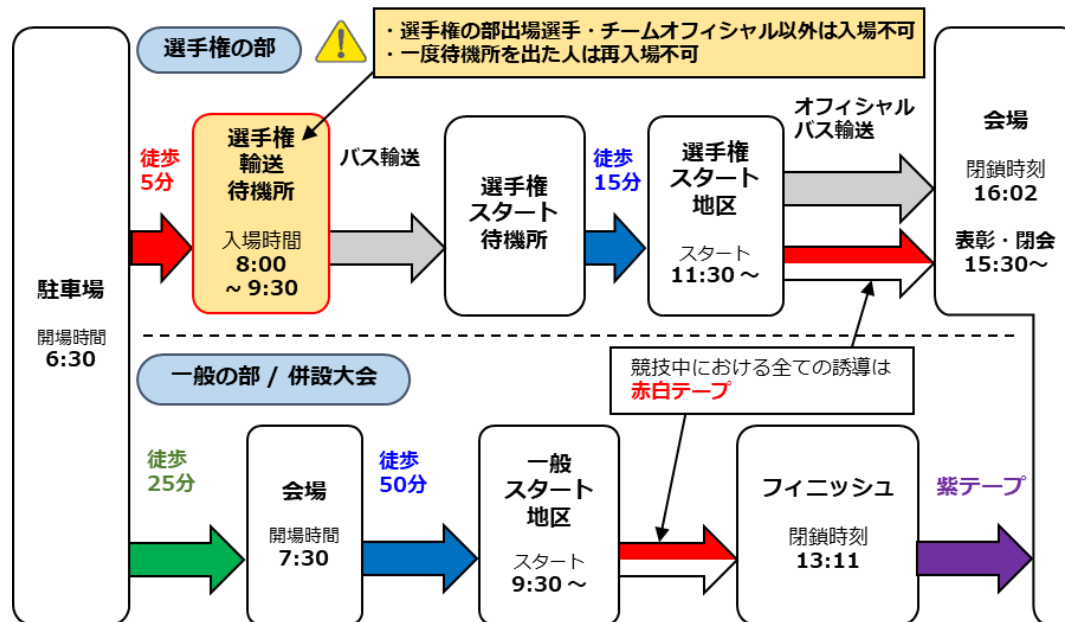
当日の大会全般のタイムスケジュールの概略(要項 3 抜粋)と利用した各拠点の情報を以下に示す。

11/11(土)スプリント当日 大会全般のタイムスケジュール・拠点箇所



拠点	利用施設名
駐車場	かみいしづ緑の村公園
ロングモデルイベント会場	かみいしづ緑の村公園
選手権の部 スタート待機所	日本昭和音楽村
スプリント会場	大垣市立時小学校
一般の部(午前スタート)/併設大会会場	えぼしふれあい会館

11/12(日)ロング当日 大会全般のタイムスケジュール・拠点箇所



拠点	利用施設名
駐車場	関ヶ原町役場 広域駐車場
選手権の部 輸送待機所	関ヶ原ふれあいセンター
選手権の部 スタート待機所	関ヶ原町立今須小中学校
ロング会場	西田運動広場

6.2 スケジュールの策定

大会全般のタイムスケジュールについては、運営責任者が主体となり概略を構築し、参加者数を考慮するなどの調整を施すことで作成した。その後、この大会のスケジュールを元に、人事責任者が主体となり、運営者個々のスケジュールを作成した。

ロングについては、概ね例年通りのスケジュールとなっている。

一方で、スプリントについては、ロングモデルイベントを同日に取り入れ、更に多くの制約を抱えることとなり、15分刻みで業務内容が変化するような過去に例を見ないタイトなスケジュールとなった。

主な制約として、地域団体・住民への配慮、競技中の安全管理、拠点施設の利用時間、各拠点間の移動が挙げられる(次ページ表参照)。これら制約に対して、地域との渉外トラブルを起こさない、選手権の部の競技を成立させることに重きを置き、入念に対応策を練ることとなった。この事前計画と当日対応においては多くの工数が投入されている。

この対策にあたり、各所で参加者・運営者共に行動を制限する必要が発生した。参加者へは要項で十分に伝達しきれなかった部分もあり、大会直前時期に混乱を生む事態もいくつか存在した。この場を借りてお詫び申し上げる。

制限項目	具体事例
地域団体・住民への配慮	定期巡回バス通行時間を避けた競時間設計 早朝の設置
競技中の公平性と安全管理	各競技時間と移動時間を被らせない時間設計 競技時間中の参加者の移動範囲制限
拠点施設の利用時間	スプリント会場利用可能時間設定（午後からのみ）
各拠点間の移動	モディベ会場⇄スプリント会場移動(45分)の管理 一般の部(午前スタート)、併設大会の移動時間制限

6.3 当日の運用

当日に運用については、各パートチーフ主体で各役員の統制を行ってもらい、進行することとなる。

スプリントでは、会場の開場時刻に遅延が生じたこと、ロングでは、後述の表彰式・閉会式と資材片付けについて大きく遅延してしまったことなど、問題は発生してしまった。一方で、これらに関わることで以外については、軌道修正しつつある程度は順調に進行した。

どれほど準備しても当日のスムーズな進行なしに大会の成功はあり得ない。各パートチーフがスケジュールの把握と管理をできるかが成功の肝である。また、大会全般のタイムスケジュールの中のイベント毎の経過状況を報告する、イレギュラーが生じたときにすぐ打ち上げるなど、大会本部と情報共有することも重要である。本大会では各責任者+α連絡が必要な人員から成る SNS(LINE)グループを作成し、情報共有に努めた。

6.4 役員配置

本大会で協力いただいた運営者人数は以下の通りである。

運営者集計	人数 両日計 70 名
岐阜県オリエンテーリング協会	6 名
YMOE	1 名
NishiPRO	1 名
イベント・アドバイザー	2 名
実行委員会	60 名

本大会では、過去最大規模の運営者(特に実行委員会)が動員されることとなった。人数増加の背景としては、スプリント・ロング両日ともに、拠点の数が多いこと、競技公平性・安全性を確保するための人員が多いことが主な要因である。実際のところ、この人数を擁しても、各パートの役員配置については十分に対応できたとは言えず、2つのパートを掛け持ったり、複数の拠点を移動したり、イレギュラーな対応も行っている。これにより役員および統率する各パートチーフの負担は大きかったものと推定される。詳細は末尾の役員名簿を参照していただきたい。

運営者人数については、多数確保できれば良いというわけではない。インカレ運営の複雑さは運営者数の肥大化によるという意見もある。各パート・拠点での統制や業務周知などの対応が増加・複雑化するためである。また、会計的にも、少数であれば交通費などの費用を抑制できることは言うまでもない。業務内容の簡易化や他のパートの兼ね合いを考慮するなど、できるだけ人数を圧縮できることが望ましい。

一方で、上記要因については開催地や競技の特性により、特に当日役員にあたる人数の削減などの対策がし辛いのが実情でもある。本大会では、できる限り各パート・拠点の人数を切り詰めており、ギリギリの状態を進めていたのが実態である。

過去の傾向や、開催地の特性を事前に把握することで、早い段階から運営を遂行できる最低人数を見積もり、運営者の募集を計画的に行うことが今後求められる。

6.5 閉会時刻

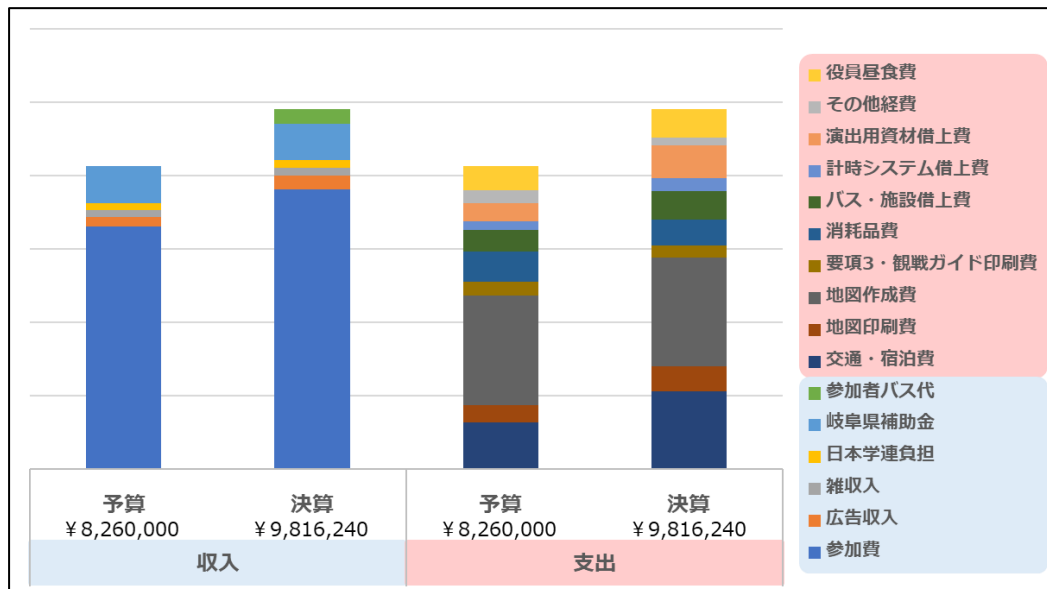
当日のスケジュールに関して、今回ロングの表彰式・閉会式の時刻が著しく遅延する事態が発生した。この場を借りて参加者および運営関係者にお詫び申し上げる。

表彰式・閉会式の段取りが事前に十分にできていなかったこと、撤収・各拠点資材片付けに手数をとられてしまったことが、計画通り遂行できなかった主な原因と考える。成績を上げた競技者を称える重要なセレモニーであることを再認識し、今回の反省を踏まえ、リハーサルも含めた入念な事前準備の実施、表彰式段取りの簡略化、各パート業務終了後の役員の管理など、片付けとの兼ね合いでどうしても忙しくなりがちな閉会間際の時間帯において、スムーズな進行ができるよう事前に十分計画することが必要である。

7 会計について

7.1 簡易的決算報告

本大会において、策定した予算案と決算の結果概略を以下に示す。この結果はスプリント・ロング両競技をまとめている。また、これらについての簡単な解説を行う。



➤ 予算案の策定と参加費決定

✧ 収入・支出予算の検討

本大会の大会会計で特殊な項目が、岐阜県補助金である。本大会では岐阜県協会・YMOE の働きかけにより、開催地である岐阜県の「スポーツイベント振興補助金」を申請し、大会会計として組み込んでいる。これに関わる申請・報告業務は岐阜県協会が担当した。全て領収書が必須になったり、報告書を提出したりと手間はかかる部分もあるが、会計としては影響が大きく利用価値は高い。

予算案における支出は、インカレスプリントを共催した過去大会、特に両競技で拠点が離れている2016 年度大会を参考にした。加えて本大会開催地の特性(特に運営宿泊費・交通費)も考慮し、経費概算を積み上げ支出の予算とした。地図作成費(調査・作図に関する費用)は、担当の地図業者作成業者から概算費用を提示いただき計上している。

✧ 参加費の決定

本大会では昨年度対比で、スプリント：+500 円(実質強制的にSI レンタルで+100 円)、ロング：+700 円としている。補助金はありながらも、参加費増額に踏み切っているのは、地図作成費用が例年よりも高額であること(スプリント・モデルイベント：ニューマップ、ロング：調査範囲大)、運営経費が例年よりも高額になると想定されたことによる。

✧ モデルイベントの開催

本大会ではモデルイベントの開催に踏み切った。理由としては、競技的なニーズ対応のためは勿論であるが、昨年度に会計的な課題となったモデルイベント未開催による収入減対策のためでもある。

➤ 決算概略説明

✧ 全体概要

予算案に対して決算の総額は増大しているが、日本学連の負担額を含めて支出は収入の範囲に収ま

っている。総じて岐阜県補助金、日本学連負担、参加者増大に助けられる形ではあるが、演出の投資などを除けば、多少は余裕をもった会計となった。また、大会直前期の工数増大が各項目に反映され支出が増大していることも考えると、健全な運営活動に努めることで幾分かは余裕が見込まれるため、会計黒字化の実現可能性はあったと考える。

✧ 収入詳細

収入については、一般の部と併設大会参加者の予想を超える人数増加により増大した。これにより、後述の支出項目の増大は生じたものの、大会直前期は多少余裕をもって運営をできた。

✧ 支出詳細

支出については、いくつかの項目で費用が増大した。特に増分が大きいのが、運営者の交通・宿泊費用であり、主な理由としては、当初見込みの運営利用宿変更による単価の増大、大会直前期および当日の運営者人数の増加、渉外活動工数の増大である。

演出用資材については、収入の増加に伴い、今後のインカレの演出システム強化・確立への投資の意味合いも含め、予算よりも多く経費を投入している。

地図作成費用は、最終的にかった経費の実績値を終了後に計上していただき、活動状況を鑑みて調整をした。

参加者輸送のためのバス借上費用は、見込みの台数よりも増加し計上されているが、参加者からバス代を徴収する方向とし、この項目の収支としては大きく変化はない。

7.2 今後の会計について

➤ 予算案の策定と会計の管理

本大会では、予算と決済の総額で大きな乖離が生じた。収入増加については嬉しい限りであるが、一方で支出増加が事前に予測できていなかったことは課題である。予算案の十分な検討と、会計の進捗管理が疎かであったことが原因と考える。

前者については、特に支出の上下振れを生み出す開催地の特性を、予算案策定の時点で十分に把握しておくべきである。運営者の宿泊・交通費、地図作成費、地図印刷費は、支出総額の大部分を占める上に、開催地の影響を大きく受けるため、日数・人数を見積もってシミュレーションするなど精度を向上させるべきである。中でも大口である地図作成費は、内訳をはっきりさせ見積もり精度も向上させるべく精査すべきである。また、例えば天候不順による地図調査の遅れなどイレギュラーな事態も想定されるため、多少余裕分を予算に見込んでおくべきである。

後者については、都度計画に対する予算の使用度合いをモニタリングできる状況にしておくべきである。完全には求めないが、少なくとも試走1回当たりの総経費や、資材購入などの大口の支出については把握し、常に予算残状況をざっくり確認できる状態であることが望ましい。これは会計・運営責任者・主催団体で共有しつつ進めるべきである。

➤ 支出の改善

運営者の宿泊・交通費、地図作成費、地図印刷費など、支出内訳の大部分を占める項目については単純な削減代がほとんど無い。また、行動計画通りに進めることは前提として、運営の効率化による支出削減代も大きくはないと推定される。従って、会計全体としても大きな経費削減は見込み辛いのが実態であると考ええる。

ただし、いくつかの項目では削減可能な部分はあり、地道な経費削減は継続すべきである。本大会では、要項 3 印刷費がその対象として良く声が上がった。要項 3 後半部のインカレ規約や過去の成績など大会自体に関係のない部分を削減することで 5 万円程度、そもそも一般の大会同様印刷をやめてしまえば 30 万程度の印刷費を削減できる。また、これにより運営の負担も軽減できる。

➤ 収入の改善：参加費の設定

✧ 安定化・収入増加に向けて

支出削減の努力は勿論することとしても、大きな削減は見込み辛く開催地による上下振れが激しい中、収入については安定化と増加が求められることとなる。

参加費以外の収入項目は不安定な収入源である。今回は岐阜県の補助金で運営を成立させることができたが、同様の収入源は地方自治体に依り、金額なども異なるため、当然ながら毎度のインカレで当てにすることもできない。従って、結局のところ参加費収入をコントロールするかが収入を改善させる鍵となると言え、特に参加費単価増額で即座に対応できることが望ましいと考える。

✧ 参加費の設定

参加費収入は参加費×人数であり、参加費単価増額と、参加者増加のための活動で対応する必要がある。

前者については、インカレの継続性を狙った大会会計の健全化を目指すにあたっては、参加費単価増額はある程度は許容すべきであろう。補助金がなかった場合の本大会会計を見ていただければ増分のイメージもつくかと思われる。また、本大会で投資した演出内容についても、同様のクオリティを期待するのであれば、その分も参加費に上乗せになる。

後者については、運営者による一般の部および併設大会参加者に向けた魅力ある競技環境づくり、学生による各大学での参加を促す恒常的な取り組みで対応すべきである。ただし、インカレスプリントに関しては参加者人数がまだまだ安定していない。本大会では、市街地スプリントという魅力もあり人数増加に転んだが、来年度以降どこまで維持できるかは未知数である。また、本大会では、スケジュールの都合上、許容できる人数の限界に近かった印象もある。故に、ある程度は参加費増額で収入の安定化に努めることが望ましいと考える。

✧ モデルイベントの開催

今回実施のモデルイベント(もといトレーニングイベント)の開催は、見込み通り収入増加につながった。今後も可能な限り開催を狙うのは手である。

➤ 会計面における将来のあるべき姿

✧ インカレスプリント単独での会計

日本学連での議題に上がっているインカレスプリント単独での会計能力については、今後も情報を蓄積しつつ時間をかけて議論すべきであろう。本大会は連日開催で大会会計もロングと統合されているが、ざっくり切り分けるなどの処理をして、スプリント単独での開催可否などについても机上検討できると良い。

✧ 運営工数に対する対価

オリエンテーリング界隈の大会運営は、無償の奉仕により多くを形成されているのが実態である。

特にインカレについては、競技の品質や安全性の確保、運営者・参加者の大人数の統制など、高度かつ時間を擁する業務内容がどうしても多くなり、運営者は無償で莫大な負担を受けている印象である。

その他アウトドアスポーツの大会では、当日や事前準備の日当支払いが行われているケースは良く見られる。インカレにおいても同様の形態がとれれば、やりがいの創出や、人材流出の抑制などにつながるのではないかと考える。また、今後オリエンテーリングが世間的に受け入れられるためにも、このような体制づくりは必要ではないかとも思われる。

当然参加費増額の方向に話は進む。参加費は需要供給のバランスを考慮し検討すべきではあるが、大半がボランティアスタッフで成り立っている供給側が疲弊しないためにも、あるべき姿として提言しておく。

1 はじめに

日本学生オリエンテーリング選手権実施規則（以下「インカレ規則」）第 34 条に基づき下記の業務を遂行した。競技面では選手権大会としての適切性を確認できたものの、それ以外の部分では行き届かない点が多くあった。準備スケジュールに遅延が発生した時点で、イベント・アドバイザー補佐を任命し競技面とそれ以外で分担して業務を進めるべきであった。

2 業務実施内容**2.1 要項の内容確認**

- 全ての要項及び発行物の公開前に、その内容がインカレ規則に準じている事と正確である事を確認した。

2.2 会場・トレインの適格性確認

- イベント・アドバイザーの打診を受けた 2017 年 3 月時点で、トレインと会場は半ば決定された状態で実行委員会が始動していた。要項 1 公開前に現地確認を行う機会を得られず、地形図・航空写真・GoogleStreetView を用いて確認を行った。要項 1 公開後現地に赴き再度その適格性確認を行った。

2.3 スケジュール全体の確認

- 参加者目線での事前現地確認が不足した為、最適な大会スケジュールであったとは言えなかった。会場の利用可能時間、駐車場等の都合から制約の多いスケジュールであった。地元への貢献を鑑みて多くの施設を利用する形を採ったものの、その分参加者の移動や待機が生じてしまった。
- インカレにおいては 1,000 人規模の大人数の移動が発生する。イベント・アドバイザーは、机上のスケジュール確認だけでは無く現地に赴いて参加者の動きに無理無駄が無い、地元への貢献とのバランスが取れているかを確認すべきである。

2.4 スタート、フィニッシュ、チェンジオーバーエリアのシステムとレイアウト確認

- 大会 1 か月前の現地確認の際にスタートとフィニッシュのレイアウトを確認した。コース設定の都合と不特定多数の一般人が通行する都合から、極めて限られた選択肢の中からの選択であったと解釈している。

2.5 計時システムの信頼性と正確性の判断

- 計時システムはスプリントと言う競技の性質を踏まえて SportIdent 社製の計時システム（以下「SI」）が採用された。0.1 秒単位での計時が可能であるという点と、国内でタッチフリーの機材が調達可能であった点から SI が望ましいと判断した。タッチフリー方式でなかったとしても、競技者が接近方向に依らずに同条件でパンチングを行う事の出来る SI の使用が望ましい。
- 名古屋大学からの提訴にあった通り、スタート方式がブザーの音を聞いた競技者が自身の判断で出走するという方式を採っていた為、0.1 秒単位で計時の正確性を担保できない事態となった。これは第 1 回、第 2 回大会のスタート方式をそのまま継承した事に起因する。対応としてはパンチングスター

ト若しくはスタートゲートを設ける事が挙げられるものの、機材調達の面から前者の採用が現実的である。

2.6 地図が規定に合致しているかの確認、及び地図の正確さ、作図、印刷の妥当性確認

- 地図作成を委託した業者の納品が著しく遅れた為、細かい表現基準の統一までは至らなかったものの、選手権大会に堪えうる水準の地図である事を確認した。
- 印刷については大会直前に納品された競技地図を全て視認する事で、印刷のかすれや滲み、色の不調等が無い事を確認した。

2.7 コースの適格性確認

- コース距離については、試走と昨年度の優勝者の走行速度から適切な水準であると判断した。コースの難易度については、複雑に入り組んだ道を十分に活かし、高速走行下の競技者に常にルートチョイスの判断を求める物であることを確認した。コントロールの設置個所は分かり易い箇所が選択され、他の競技者の存在によりコントロールを発見できるといった偶然性が最大限排除されている事を確認した。
- コントロールの設置状態に関して、当日使用する機材を用いた事前の現地確認が不足していた。当日は強風が吹いていた為、急遽石と紐でコントロールが倒れない様に補強を行った。選手権クラス競技中は全てのコントロールにコントロールガードが配置されていた為、問題は発生しなかった。

2.8 コントロール位置説明が適切かどうかの確認

- 最終試走時にコントロール設置個所を全て現地で確認する事で、適切な位置説明が用いられている事を確認した。また全日本ミドル不成立を受けて、配布用の位置説明が競技用地図と合致しているかという点も入念に確認した。

2.9 式典が適切かの判断

- 式典の適切性を十分に確保できていなかった。提訴による成績変更や担当パートの準備不足等から、日没後の暗い中での表彰式となってしまった。またスポンサーボードの前での撮影等細かい段取りまで事前に確認できておらず、多くの方にご迷惑をお掛けしてしまった。
- これはイベント・アドバイザーのリソースを競技面に割く事を優先した為である。当然、競技成立を優先した事で、演出や式典が疎かになってはいけない。イベント・アドバイザーは、大会準備スケジュールに著しい遅延が発生した時点で、インカレ規則 34.6 に従い補佐を任命する事で、後回しにされがちな競技以外の部分の確認業務を遂行すべきである。

2.10 報道関係者、観客に対する処遇確認

- 観客は会場となった学校内に限定して観戦を行ってもらう事を確認した。当初テレイン内にも観戦エリアを設けるというアイデアが存在したが、競技の公平性確保の為不適切と判断した。
- 報道関係者の存在を事前に把握する事が出来ず、ご不便をお掛けした部分があった。またインタビュー時、スポンサーボードの使用や、競技者の補給・クールダウン時間の確保等、スポンサー様、競

技者に配慮が行き届いていない部分があった。

2.11 運営組織、人事、会計及び競技運営全般を確認する事

- 要項 1 作成段階において、運営組織がこれまでの運営体制を継承した物である事を確認した。しかしながら各パートの責任範囲とその担当者（外部業者を含む）の業務遂行能力まで確認が及ばず、運営スケジュール遅延の一因となった。
- 会計面においては岐阜県オリエンテーリング協会の皆様の多大な御尽力によって岐阜県から補助金を頂戴する事が可能となった。その為例年程逼迫した会計状態は発生しなかった。

3 本大会において見られた課題

本大会においては、運営準備スケジュールの遅延と、スプリント競技運営/参加ノウハウの不足という大きく 2 つの課題が確認された。前者については適切な業者選定と契約締結、後者については海外事例の参照とノウハウの継承が必要であると考ええる。

3.1 運営スケジュール遅延

- 地図作成・渉外業者の業務遅延
 - ◇ 競技・ウォームアップ・選手権スタート待機所地図の作製及び渉外業務を外部業者に委託した。これら 4 つの業務の内、納期・納品物ともに、どれも完遂されなかった。大会直前にそれを補完する為に多大な工数が発生した。また、各納品物に対する対価や、納期遅れの減額基準等も不明瞭で大会終了後に協議の必要が生じた。
 - ◇ 有能な業者を選定・発注する為に、早い段階からの実行委員会立ち上げが求められる。また業者がその様なリスクを抱えている場合には、納期と対価を明記した契約書を取り交わす事と、代替手段の確保が求められる。
- 要項作成コストの肥大
 - ◇ イベント詳細を記した要項 3 は 80 頁以上あるものの、内 14 頁はインカレ規則と歴代入賞者である。また、それ以外の部分にも各参加者・観戦者自身が容易に取得可能な情報が掲載されている。
 - ◇ 要項の作製・校閲作業は事前準備の中でも大きな割合を占めていると共に、頁数に伴い印刷費も増える。運営者が提供する必要がある情報且つ、要項という媒体を通す必要がある情報を今一度精査する必要がある。
- 競技パートの人員不足
 - ◇ 競技責任者が統括する競技パートと、運営責任者が統括する運営パートにて事前準備を進める。60 名超の運営陣を敷いた本大会においても、事前準備の期間、競技パートは競技責任者とコース設定者の 2 名で構成されていた。
 - ◇ 競技パートはコースの設定だけでなく、競技中の全ての事象に責任を持つ為、リソース不足は明白である。本大会では、イベント・アドバイザーが補完する形となり、運営パートに十分な配慮が出来なかった一因と考えられる。
 - ◇ 競技パートはコース設定者だけでなく、立入禁止区域や誘導を準備する役割や、各種データやド

キュメント整備を行う役割等を含めて、「競技に精通した」人員 5～6 名程度で構成されるのが望ましい。

3.2 スプリント競技ノウハウ不足

➤ 現地表示に改善余地あり

- ◇ 104 番コントロールから 105 番コントロールに向かう短冊状の赤白テープ誘導区間を 10 名程度の競技者が辿らずに失格となった。また、37 番コントロールから 38 番コントロールに向かう間に設定された立ち入り禁止区域に 5 名程度が進入し失格となった。その境界を表示する青黄テープは地面に這って設置されていた。
- ◇ 特にスプリントにおいて誘導は、短冊状のテープ誘導では無く全てレーン状のテープ誘導にする事、立ち入り禁止区域の境界を示すテープは最低でも膝より高い位置に貼る事で、不本意な失格者を大幅に減らす事が出来ると考えられる。
- ◇ 今回の様な公道上だと現地表示に制約が発生し得る為、コース設定時にも誘導区間の現地表示に対する配慮が必要である。また、不特定多数の人が往来するスプリント競技のテレインでそれらの現地表示をくまなく行おうとすると、持ち去り等のトラブルを予防する為に十分な人員確保も必要となる。

➤ 競技者のより深いルール理解と遵守

- ◇ 一般の部を中心に立入禁止区域への進入等の違反が多数見受けられた。
- ◇ 今回は大きな問題に発展する事は無かったものの、今後このような事態が発生すると競技実施すら危ぶまれる事態に繋がりがかねない。
- ◇ 各大学では、競技ルールや地図記号の確認等、日常的なルール遵守に向けた活動を実施すべきである

➤ メディア対応意識の欠如

- ◇ メディアにお越し頂けたものの、十分な取材環境を提供出来なかった。招致担当者と運営委員会幹部間での意思疎通が十分で無かった為である。
- ◇ 特に観戦の要素が強いスプリント競技においては、メディア用のインタビュースペース・撮影スペース・事前の競技説明等を用意すべきであった。
- ◇ 海外の選手権大会や他競技の事例を参照しつつオリエンティア以外が見ても理解出来、楽しめる観戦環境を作り上げていく努力が求められる。

➤ 渉外問題発生リスクに削減余地あり

- ◇ 参加者数確保と交通の都合上、選手権の部より前に一般の部の一部を出走させ、競技を行った。
- ◇ 一般の部のスタート間隔を短くする場合、相対的に渉外問題発生リスクが高まる。
- ◇ 今回の様な市街地で行い渉外トラブルの発生の可能性が高い場合は、選手権の部競技成立最優先させてスケジュールを策定すべきである。

➤ 市街地スプリント実施の際の交通整理

- ◇ コース上に比較的交通量の多い道路を横断する箇所が複数箇所あった。交通整理員を配置し、通行する車両に対して徐行や停止を促したものの、特に一般の部では、現場の安全確保が十分行えなかった。

- ◇ 市街地で車両の往来が多く存在する場合は、安全確保の為に警察の協力を仰いで交通整理若しくは交通封鎖を行う事が望ましい
- ◇ 道路横断事態を回避する、長時間交通を妨げるのが難しい場合は、選手権の部の時間帯のみで一般の部は横断を回避するコースを設定する等の対策が必要と考えられる。

3.3 学連における制度やその運用に関して

- イベント・アドバイザーの選任時期の遅延
 - ◇ 本競技会においてイベント・アドバイザーの打診を受けて運営組織に加わったのは大会開催7か月前程で、開催地や運営組織等は既に決定されていた。
 - ◇ インカレ規則 34.2 ではその指名は大会開催の1年前までとされている。これは開催地選定・大会運営委員会組織等大会の根幹に関わる部分においても第三者的な目線でコントロールする必要がある事がその理由として考えられる。
 - ◇ 現在は開催地選定が先行する傾向が強く、イベント・アドバイザーも開催地選定に加われる様なプロセスをとるのが望ましい。
- インカレ規則の更新と JOA 競技規則との統合
 - ◇ 学連は JOA の傘下にあるものの、JOA 競技規則とは別にインカレ規則が併存する。またインカレ規則はドーピングやスプリントにおける計時単位等の点で、世間の潮流や実際の運用と食い違う部分が存在する。
 - ◇ 複数の規約を参照する、実際の運用とは乖離した規約からの逸脱事項申請手続等、インカレの価値に直結しにくい業務は削減すべきである。
 - ◇ 学連としてインカレ規約を JOA 競技規則への統合する、運用状況を踏まえて更新していく等の取り組みが求められる。
- 「インカレ準備＝無償の奉仕」化
 - ◇ 特に運営委員会幹部は職業や学業の傍ら運営を担う事が多く、多くの時間を割いて無償で大会準備にあたっている。
 - ◇ 「インカレ運営＝ドタバタで大変なボランティア」という認識の人が少なからずおり、優秀な運営能力を持つ人間のインカレ運営離れを招きかねない。
 - ◇ 運営業務の効率化を行うのは勿論の事、準備日数に応じた日当の支給等、働いた者が報われる仕組み作りに向けた動きが必要になるのではないかな。

3.4 その他

- 新しい演出方法の模索
 - ◇ 今回は演出において多くの新たな試みを行った。一部十分に機能しないものも存在したが、例年と比較して格段に高い水準の観戦環境であった。
 - ◇ 前述の通り魅力的な観戦環境を提供する事は重要であり、十分な予算を割り当てる事が、これらを実現する前提となる。
 - ◇ ノウハウの蓄積は実践して初めて進む。その為、インカレと言う経済的な余裕が見込まれる場に置いて観戦環境整備に挑戦する事は極めて有意義と考える。また、各回の挑戦を次に活かす為にその経験と知識の継承が必要である。

- 表彰式・閉会式への注力不足
 - ◇ 表彰式は賞状印刷の遅れ等によって大幅に遅延した。また、最後に行われる表彰式・閉会式は運営の中でも重きが置かれにくい。
 - ◇ 選手権者や入賞者を称える重要な式典の場である。大会運営者と学連はそれに相応しい場を提供する責任がある。
 - ◇ 事前の賞状印刷や出席者の動きとそれらの所要時間等、入念なリハーサルを行うべきである。

- ゴミの削減
 - ◇ 会場内は勿論、テレイン内にもゴミを残すべきでは無い。大会参加者のみならず運営者もその為の打ち手を講じるべきである。
 - ◇ 今回はバックアップラベルの不要な SI の採用、一般の部における位置説明の配布を行わない等の方策を採った。
 - ◇ GPS に関しては養生テープでベストのポケットに固定していたが競技終了後にテープが汗などで剥がれかけている物も見受けられたので、脱落の可能性を下げる方策が必要。

1 始めに

日本学生オリエンテーリング選手権実施規則（以下インカレ実施規則）第 34 条に基づき、本大会における事前準備及び当日における業務実施報告を行う。また、併せてイベント・アドバイザー（以下 EA）の視点から今大会で感じた課題とそれを踏まえた今後に向けて提言したいことをまとめる。

2 業務実施報告**2.1 要項の内容確認**

- 発行に際し、実施規則への抵触が無いこと、内容に誤りが無いことを確認した。
- 実施規則を不適用とする事項について技術委員への諮問及び理事会への申請を行った。これらの事項については今後も継続的に不適用の申請が行われる可能性の高いものであることから、実施規則の改定が必要と考える（参考資料①参照）。

2.2 会場・テレインの適格性の確認

- EA に指名された時点で既にテレインが決まっていたことから、当該テレイン内で競技を行うことを前提として適格性の確認を行った。旧図外エリアへの拡大を含めた検討も行ったが、主要道の横断リスク等を考慮し拡大は見送った。
- 会場の広さ・立地条件・設備等の確認を現地で行い、適切であることを確認した。

2.3 スケジュール全体の確認

- 適切なスケジュールであることを確認した。大半の参加者に対して駐車場及び最寄り駅から約 30 分の徒歩移動を必要としたが、大きな混乱もなく進行ができたと考えている。

2.4 スタート、フィニッシュ、チェンジオーバーエリアのシステムとレイアウトの確認

- 競技責任者と共に現地にてレイアウトに問題が無いことを確認した。大会前々日にウォームアップエリアからスタート地区及び競技エリアが視認できることが発覚したが、地図に立ち入り禁止区域を加筆することで対処した。

2.5 計時システムの信頼性と正確性の確認

- ロング競技部門では EMIT 社の電子パンチングシステム(Electronic Punching and Timing System)を使用した。過去の大会での運用実績から適切と判断した。また、スプリント競技部門では 0.1 秒単位での計時を行ったが、競技時間が 60 分を超える本競技では 1 秒単位での計時でも問題が無いと判断した。

2.6 地図が規定に合致していることの確認、及び地図の正確さ、作図・印刷の妥当性の確認

- 競技用の地図については現地での地図の正確性の確認及び印刷された現品の確認を以て適切であることを確認した。本大会ではインカレにおいて初めて ISOM2017 を採用したことから、競走と従来からの変化点について特に入念に確認を行った。中でも耕作地とそれに隣接した道の表記については

複数のサンプルを比較して視認性の検証を行い、最適な表記を選択した。また、全ての競技用地図に対して印刷・封入品質の現物確認を行い、問題が無いことを確認した。

- モデルイベントの地図については地図作成を委託した外部業者の大幅な納品遅れにより、大会 1 週間前の時点で現地での地図の正確性の確認ができなかった。これに対してイベント名称を「トレーニングイベント」へ変更することで対処した。過去にはモデルイベントを足慣らしと捉える側面もあったと聞けが、近年では本戦同等の品質が要求されることを考慮しての判断である（参考資料②参照）。
- ウォームアップ用の地図については大会前々日に納品された地図に表記の誤り（一部のオブジェクトが非表示となっていた）が存在することが発覚したが、競技に使用しない地図であることからそのまま使用して問題は無いと判断した（参考資料③参照）。

2.7 コースの適格性の確認

- 距離については現地での試走会の結果と選手権者に求められるべき競技レベルを考慮し、適切であると判断した。難易度についてはロング・ディスタンス競技に不可欠であるロングレッグが十分に練られたものであること、コントロール位置・他クラスの選手の動線等を考慮し偶然の要素が最小限に抑えられていることを確認した。
- 結果的に男女共に優勝設定時間を大幅に上回る結果となってしまったことは大いに反省すべき点である。コース確定後に行われた直近の試走会を台風による暴風雨の中で行わざるをえず、悪条件が競技に与える影響を読み違ったことが原因と考えている。

2.8 コントロール位置説明の確認

- コース設定の段階で明確なコントロール位置が使用されていることを確認し、1 週間前に現地にてコントロールユニットの設置位置を競走と共に確認し、適切と判断した。また、全日本ミドルでの競技不成立を鑑み、配布用のコントロール位置説明と競技用地図、設置用地図とのコントロール位置説明表の照合を行った。

2.9 式典の適切な進行の確認

- 適切に執り行うことができなかった。当日の段取り（適切な人員配置・資材の準備）に対する十分な事前準備の確認ができていなかった。開始時間が大幅に遅れ、日没後の式典となってしまったことをこの場を借りてお詫び申し上げたい。競技成立に関わる部分に注力したことが主な原因であり、式典を含めた大会全体の成功という観点が不足していたことは反省点である。

2.10 報道関係者・観客への処遇の確認

- 観客は大会会場内での観戦に限定することを確認した。
- 観客に対して通信機器を有効活用した観戦を推奨する方式を採っていたが、選手・チームオフィシャルに対して通信機器の使用を制限することで競技結果へ著しい影響を与えうる情報の流出を防いでいることを確認した。

2.11 運営組織、人事、会計及び競技運営全般の確認

- 昨年同様、スプリント競技部門との同時開催となることから、運営責任者・競技責任者を両競技部門

にそれぞれ置いた、過去の体制に準じた組織体制であることを確認した。ただし、多くの業務において共通の事項が存在したこともあり、本大会ではロング・ディスタンス競技部門の運営責任者である前田が実質的な全体の運営責任者として機能していた。過去の事例に囚われず、柔軟に組織体系を検討する必要があった。

- 会計については前述の補助金の他、一般クラス及び併設大会に十分な参加者が見込まれたことから健全な会計状況であると判断した。

3.本大会において見られた課題

3.1 規則(ルール)の理解度不足

- 選手・チームオフィシャル共にインカレ実施規則及び競技規則への理解度不足が感じられる場面が散見された。規則は競技会に参加する際の前提条件であり、全ての参加者が熟読すべきである。また、規則の逸脱に関わる要望(特例の申請)には説明責任が発生することを理解の上、十分な検討のうえでの慎重な行動を心がけるべきである。
- 本競技においては競技中の誘導区間に関わる調査依頼・提訴は行われなかったが、これは前日に行われたスプリント競技部門での事例を鑑み、急遽誘導テープの見直しと増強を行ったことが背景にある。今一度競技者の責任に対する理解度向上を求めたい。

3.2 適正な参加費の設定

- 別項に記載の通り、本大会では参加費の値上げを行った。過度な経費削減は実行委員会の疲弊と大会運営の破綻の一因となりうることから、今後も現実的な参加費の設定と予算の策定が行われることが望ましい。
- 今回、値上げに関して事前に日本学連主導のアンケートが行われたが、参加費に対する規則がインカレ実施規則に定められていない以上、参加費の決定権は日本学連ではなく、実行委員会にあるはずである。歪なプロセスで参加費が決定されることの無いよう、注意をお願いしたい。
- インカレ運営は実行委員会のボランティアによって成り立っている一方、過度な業務負担が一部の運営者に掛かる事態も多く、有能な人材を流出させやすい体質となっている。インカレを継続させていくためには、成果に対する正当な対価が与えられる枠組みが作られるべきではないか。

3.3 日本学連所有資材の見直し

- インカレ運営は主に日本学連所有の資材を用いて行われるが、全面的に見直しが必要と感じた。特に老朽化した資材の入替・保管器具の導入は急務である。前者はより効率的な器具の導入による業務の効率化、後者はヤマカワハウスからインカレ開催地への運搬負担軽減と準備期間中の業務効率化・資材紛失リスク軽減が見込まれる。
- スプリント競技部門とロング・ディスタンス競技部門を同時開催する現状の枠組みでは、両大会の会場が隣接していない場合、大会期間中に大規模な資材移動が行われるため、上述の課題が顕著になる。開催方式の変更も含め、継続的な議論が必要と考える。

- 今大会では演出に対して多額の予算を割り、過去の国内のオリエンテーリング大会に無い新たな試みが行われた。これは多くの機材をレンタルして行われたものであるが、日本学連として最新機器に対する投資を行うことを検討してはどうか。

3.4 適切な外部委託業者の選定

- スプリント競技部門と同様、外部委託業者による地図作成・地元渉外の遅れ及び各所に対する独断行動に起因するスケジュールの遅れと補完作業による実行委員会の負荷増大が大会運営における大きな課題となった。また、本件による損失の補填条件が事前に明確化されていなかったことで、大会後に協議の必要性が生じた。
- 業務の委託をする際は、委託先の信頼性・業務遂行能力を十分に理解したうえで委託先を決定し、書面による正式な契約締結を以て行われるべきである。また、内的事象に起因する問題への損失補填条件を明確にすることが望ましい。

4 終わりに

本稿を執筆するにあたり、参考資料として過去 3 年分の報告書を読み返したが、今回私が課題と感じた事項の多くが過去に類似の課題として報告されており、解決への対策・実行に至っていないことを改めて認識した。現行の枠組みでは実行委員会の裁量で可能なものから改善しているが、大会準備に掛かる業務負荷の高さも相まって根本的な体質改善には至っていない。専任のプロジェクトチームの設立等、実効性のある活動に結び付ける工夫が必要と考える。

1 はじめに

実施規則 12 条に則り、将来への提言をここに記す。これまでの各項で触れた内容の繰り返しになる部分はあるがご了承いただきたい。本内容とイベント・アドバイザー報告とを合わせて読み、今後のインカレに活用していただければ幸いである。

2 スプリント競技部門

2.1 市街地での開催に関する事項

➤ 市街地の特性に合わせた渉外

- 公園開催とは異なり、地域住民の生活の場である。
- ✓ 本大会ではテレイン内の全戸訪問を実施した。無用なトラブルを避けるために有効な手段であったと考えられるが、必要人員と工数が大きいため、開催地との関係性次第で方法の検討の余地がある。
- 多数の公道と交通量の多い道路の存在
- ✓ 監視員を配置する必要がある、公園開催よりも多くの役員が必要になる。また、公道を競技に使用する関係上警察からの道路使用許可を得ることが必須である。これは都道府県によって異なる可能性があるが、事前説明も含めて早い段階からの動き出しが欠かせない。
- 渉外工数の増大と業務負担
- ✓ 本大会では現地渉外を主に山川氏にお任せする体制であったが、地図作成業務もかけ持っていたため、業務過剰であったと考えられる。事前の予測が不十分であったことも反省点であるが、途中からの業務分散がスムーズに行えなかった点が問題であった。このことから、業務の進行状況を常に共有できる体制を整え、必要に応じて渉外補佐を設置できるようにしておくことが望ましい。

➤ 安全管理とそのためのルールの順守

- 指定箇所以外での主要道路の横断や通行禁止の道路への侵入
 - ✓ 今回は事故にはならなかったが、このような行為は事故や渉外トラブルにつながりかねないので、参加者側の競技リテラシーの向上が欠かせない。競技の場を提供してくださる地元の方の安全を守っていただくためにも必ず守らなければならないルールであることをよく理解し、学連やクラブ内で競技の特性と競技者として知っておくべき知識の周知活動を進めていただきたい。
- また、本大会では採用しなかったが、細い路地の安全管理の方法として出会いがしらの衝突リスクを少しでも軽減するために、熊鈴の着用を義務付けるという方法も効果的であると考えられる。

➤ 現役学生によるコントロール監視

- 現役学生の有志を募り、コントロールの転倒等に対応を依頼した。
- ✓ 「トップ選手の動きを間近で観戦できるため非常に面白かった」といった感想が出ていたので今後も採用する価値があると考えられる。

2.2 競技に関する事項

➤ 地図納期の遅れによる問題

- 地図納期の大幅な遅延が元で以下のような問題が発生した。
 - ◇ 基盤地図情報を元にコースを設定し、地図がアップデートされる度にコースを変更するという大きな負担を強いられることとなった。
 - ◇ コースが確定できないかったため、安全管理体制の策定も遅れ警察への渉外が大幅に遅れた。
 - ◇ 地図は結局、最終試走後に完成となり、トレイン南東の複雑なエリアなどは最終試走後に更新されたため、トレインのポテンシャルを最大限活かすコースとできないまま手持ちの範囲で最高品質のコースを設定するに留まった。
 - ◇ 契約不履行に対する措置が明文化されていなかったため、依頼した実行委員会は業者の調査の進捗をひたすら待つことしかできなかった

以上のことを鑑み、今後外部業者への業務委託の際は正式な契約書の作成を行うべきである。また、業者の業務遂行状況を定期的に確認し、遅れが生じる可能性が出てきた場合は、対案を直ちに練れるようにする必要がある。特に地図作成のプロ業者は限られているため、早めに対策を講じていかなければ今回のように「試走会に地図がない」、「地図が完成しなかった」などという最悪の事態になりかねない。

➤ 失格者の多発

地面に張ったストリーマが見にくいという意見は多数寄せられたが、市街地で誘導テープをすべて高い位置に配することは公道を使用する関係上非現実的である。しかし以下のような対応は可能であったため、次回以降参考にしていきたい。

- ◇ 誘導や立入禁止区域の表示見本をウォームアップエリアで提示する
- ◇ 誘導の終了地点にはコントロールか看板が設置されていることを周知する

それと同時に選手の意識改革も必要である。ルールの順守は公平な競技を行う上で欠かせない。殊に、市街地スプリントでは安全管理や渉外トラブル防止のために設定されている立入禁止区域も少なくないので、競技者のルール順守は競技の成立、長い目で見て競技の普及と継続に直結すると考えてほしい。

➤ 0.1 秒間隔の計時について

- スタート方式再考の必要性
- ✓ 昨年の秋インカレ報告書にスタート方式の検討事項が挙げられていたが、考慮できずに今年も大会を終えることとなってしまった。今回の事例を受けて今後の大会では 0.1 秒間隔の計時の必要性も含めて議論する余地があると実行委員会は考えている。スタート方式をパンチングスタートにするなどの改善はもちろんであるが、そもそも市街地のような不確定要素（車両の通行等）を含む場所で 0.1 秒間隔の計時をすることが本当に適切であるのか検討する必要がある。これに関しては開催地にもよるので個々の実行委員会が判断すればよいと考えているので、スプリントだから 0.1 秒間隔で計時しなければならないと盲目的に判断することがないようにお願いしたい。

3 ロング・ディスタンス競技部門

3.1 渉外に関する事項

渉外報告でも記載した通り、ロング競技では、複数の渉外トラブルが発生した。それぞれの案件に対して所感を記す。

➤ **地主との衝突**

- 事前の情報がありながら、地主への挨拶が遅れたことが原因である。
- ✓ 実行委員会側からは大会開催の半年前時点で渉外担当者へ早期の訪問を依頼していたが、実行に移されなかった。地元の土地をお借りして実施する競技でありながら、地主への挨拶を後回しにしたことは大きな反省点である。地域によっては、困難な場所も少なからず存在するので、「いつも通りやればよい」という考えは捨て、丁寧な渉外活動を心掛けるべきである。

➤ **トイレ使用に関するトラブル**

- 一般スタート地区の近くの施設のトイレを参加者が無断で利用した。
- ✓ 2年前のハケ岳インカレでもペンションの駐車場の無断使用で注意を受けていたが、今年も類似の案件が発生し、2年前と学生の意識は変化していないことが浮き彫りとなってしまった。今回も大ごとにはならず済んだが、軽はずみな行動一つで大きな渉外トラブルに発展する恐れもあるため、実行委員会指定の施設以外は極力使用しないことと、一般社会人として施設や人への礼節を徹底していただきたい。

3.2 モデルイベントに関する事項

モデルイベントは競技面でも会計面でも重要度が高まっている。

近年モデルイベントを重視する傾向にあり、モデルイベントの高い品質で提供しなければならないことを実行委員会だけでなく、業者も理解すべきである。また、モデルイベントの収益は現在の秋インカレには不可欠な要素である。そのため、モデルイベントの質が低下し、参加者が減少することは大会会計にとって大きな痛手である。来年以降は高品質な地図による適正なモデルイベントが提供されることを期待したい。

4 両競技共通

4.1 演出に関する事項

本項では、今大会で使用した主要な演出手法についての所感を記す。

➤ **大型 LED ビジョン**

- 演出効果
- ✓ 全演出中最もコストがかかったが最も効果的な演出ができる資材である。コースの解説や GPS 実況をする際に観客の視点を集め、効果的な演出と観戦環境を提供できる。
- 高コストによる継続使用へのハードル
- ✓ 導入コストが極めて高く、現行のシステムでは補助金なしでは運用できないため、以下のような方法で予算問題を解決することを提案する。

◇ スポンサーの獲得

インカレ規模の大会でこのようなビジョンを使うなら、十分にスポンサーを獲得でき、ビジョンに企業のCMを流すことで10万円規模の援助が期待できる。

過去のインカレの映像などを用いて企業に対してプレゼンする必要があるが、今後も継続的にビジョンを使用したいと考えるならばスポンサー企業の獲得は最も効果的であると思われる。これは一過的なインカレ実行委員会で実行には移せないため、日本学連が主導して実行に移してくれることを期待したい。

➤ GPSトラッキング

- GPSトラッキング自体は十分に機能したが、観戦者へのフォローが不足気味であった。
- ✓ 観戦用のウェブサイトの利用方法については当日案内する時間は今後も少ないと考えられるので、事前の告知が必須である。また、予算の都合上致し方なかったが、トラッキングの線が細く、大型ビジョンでは少し見にくかった。今後はビジョンとの相性やトラッキングの表示の仕方について事前に確認した上で、予算と照らして最適なものを選択できるとよい。

➤ 観戦ガイド

- GPSトラッキングの観戦との相性も良く、例年以上に観戦ガイドが有効に機能した。
- ✓ コース解説を掲載するうえで避けて通れないのがカラー印刷である。極力グレースケールでも判別できるような作成を心掛けたが、それでもカラーの方が段違いに見やすい。今回印刷を依頼した通販印刷のプリントバック社は安価で高品質の印刷が可能なのでおすすめである。

➤ 実況の体制

- 実況の人員不足
- ✓ 本大会では実況2名、速報ボード設置2名の4名体制で臨んだが、多くの演出方法を採用していたので、どちらも3名体制で行うのが望ましかった。実況の質は観戦者の満足度に直結するので十分な人員を配するべきである。速報ボードについては特にスプリントで2名体制では十分に機能しなかったため、3名以上が望ましい。

4.2 式典に関する事項

➤ 式典の時刻の遅延

- 式典が日没直前にずれ込み、選手の栄誉を称える場所を適切に提供できなかった。
- ✓ 11月中旬の開催で予定時刻通りの開催でもギリギリの状況であったため、多少の遅延に対応できるような時間設定が望ましい。

➤ 式典の段取り

- 式典は選手の栄誉を称える重要な場であるという認識を持ち、事前のリハーサルなど綿密な準備を行う必要があった。
- ✓ 今回は会場担当チーフによって取り仕切られていたが、チーフの仕事も多く、式典準備に十分な時間が割けない状況であった。今後は式典の重要性を鑑みると式典専門の担当チーフを設けることが望ましい。

4.3 会計と参加費に関する事項

➤ 支出に関して

- 要項 3 の内容と印刷について
- ✓ 現行の要項 3 はインカレ実施規則に規定されていない内容が多くのページを占めており、これを削除することで印刷費や運営コストを削減できる。

➤ 収入に関して

- モデルイベント開催による収入増
- ✓ 前年度の反省を受けてモデルイベント（トレーニングイベント）を開催したが、これによる収入増は会計健全化に重要であることが改めて確認された。今後も可能な限り開催することが望ましい。
- 参加費の増額の許容
- ✓ 詳細は会計の項に記されているが、支出の大幅な削減が難しい上に運営のほとんどがボランティアで成り立っている現状を鑑みると、安定的な収入源である参加費の増額によって会計を健全化し、インカレを継続させていくことが求められる。

➤ 会計面から見た将来像

- ボランティア運営体質からの脱却
- ✓ インカレは高度な業務が多く無償で莫大な負担を要する。他のアウトドアスポーツと同様にスタッフへの日当の支払いなどの体制を整えることが優秀な人材の流出の抑制などにつながると考えられる。現状、運営者は無償で過剰な負担を強いられ疲弊しており、本大会では学生の皆さんのインカレへの熱意で辛うじて繋ぎ止められている状況であった。この対策によって参加費の増額は避けられないが、今後のあるべき姿として時間をかけてでも議論していきたい。
- インカレスプリント単独開催の議論のために
- ✓ 単独開催の可能性についてはまだ情報不足であるが、情報の蓄積のためにも会計の切り分けを可能な限り実施していくことが望ましい。予め切り分けることを念頭に会計処理を進めておくとうい。

5 おわりに

今回の秋インカレも無事選手権者を決めることができました。しかし、上記で示しました通り、インカレの体質自体に関わる問題、個々の競技に関する問題など様々な課題が残りました。前年から解決できなかった問題もあるので、次回こそは改善できることを祈りたいと思います。最後になりますが、本大会に関わったすべての方々に改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

選手権の部スタートリスト

★印はシード選手です。

〈スプリント〉ME 参加人数 66

No.	スタート 時刻	氏名	学校・学年
1	12:40:00	坂本 譲	東北大学 4
2	12:41:00	堀尾 健太郎	名古屋大学 4
3	12:42:00	北見 匠	東北大学 2
4	12:43:00	横田 智也	名古屋大学 4
5	12:44:00	佐藤 遼平	東京大学 3
6	12:45:00	有賀 裕亮	早稲田大学 4
7	12:46:00	高野 兼也	新潟大学 4
8	12:47:00	和田 康次郎	慶應義塾大学 4
9	12:48:00	前野 達也	名古屋大学 3
10	12:49:00	角田 貴大	横浜市立大学 4
11	12:50:00	渡邊 壮	金沢大学 4
12	12:51:00	西下 遼介	慶應義塾大学 2
13	12:52:00	鳥居 洸太	東北大学 2
14	12:53:00	緒方 空人	大阪大学 4
15	12:54:00	糸 潤哉	東京大学 4
16	12:55:00	渡辺 鷹志	慶應義塾大学 2
17	12:56:00	楠 健志	筑波大学 3
18	12:57:00	齋藤 佑樹	早稲田大学 3
19	12:58:00	岩井 龍之介	京都大学 2
20	12:59:00	横堀 聖人	東京大学 3
21	13:00:00	小原 和彦	東京工業大学 3
22	13:01:00	殿垣 佳治	東京大学 3
23	13:02:00	高本 育弥	東北大学 3
24	13:03:00	大橋 陽樹	東京大学 2
25	13:04:00	野田 昌太郎	名古屋大学 4
26	13:05:00	渡邊 寛希	金沢大学 1
27	13:06:00	川島 聖也	神戸大学 2
28	13:07:00	瀬川 出	東京大学 4
29	13:08:00	佐藤 俊太郎	東北大学 4
30	13:09:00	坂梨 敬哉	慶應義塾大学 4
31	13:10:00	谷口 恵祐	東北大学 2
32	13:11:00	宮本 樹	東京大学 3
33	13:12:00	岩瀬 史明	名古屋大学 4
34	13:13:00	川田 将太	慶應義塾大学 4
35	13:14:00	湯浅 博晶	北海道大学 2
36	13:15:00	竹内 公一	名古屋大学 3
37	13:16:00	青芳 龍	東北大学 2
38	13:17:00	中西 祐樹	京都大学 4
39	13:18:00	谷野 文史	筑波大学 1
40	13:19:00	今泉 将	名古屋大学 4
41	13:20:00	★上島 浩平	慶應義塾大学 3
42	13:21:00	下江 健史	広島大学 2
43	13:22:00	桃井 陽佑	慶應義塾大学 2
44	13:23:00	平山 遼太	東京大学 4
45	13:24:00	田中 創	大阪大学 3
46	13:25:00	★松尾 怜治	東京大学 4
47	13:26:00	伴 広輝	京都大学 3
48	13:27:00	南河 駿	名古屋大学 4
49	13:28:00	岡本 洸彰	東京大学 3
50	13:29:00	井上 雄斗	東北大学 3

51	13:30:00	★種市 雅也	東京大学 2
52	13:31:00	近藤 恭一郎	京都大学 4
53	13:32:00	大石 洋輔	早稲田大学 1
54	13:33:00	中野 喬博	東京大学 4
55	13:34:00	杉浦 弘太郎	名古屋大学 4
56	13:35:00	★稲森 剛	横浜国立大学 3
57	13:36:00	新田見 優輝	東京大学 3
58	13:37:00	益村 晃司	広島大学 4
59	13:38:00	竹内 元哉	東京大学 4
60	13:39:00	清水 龍太	金沢大学 4
61	13:40:00	★伊藤 樹	横浜国立大学 3
62	13:41:00	森河 俊成	京都大学 2
63	13:42:00	加藤 岬	東京大学 4
64	13:43:00	稲岡 雄介	大阪大学 3
65	13:44:00	椎名 晃丈	東京大学 1
66	13:45:00	★大田 将司	一橋大学 3

〈スプリント〉WE 参加人数 36

No.	スタート 時刻	氏名	学校・学年
101	12:40:30	鈴木 彩可	金沢大学 4
102	12:41:30	片桐 麻那	名古屋大学 4
103	12:42:30	久野 公愛	日本女子大学 2
104	12:43:30	増澤 すず	筑波大学 2
105	12:44:30	立花 和祈	実践女子大学 3
106	12:45:30	杉原 未奈	奈良女子大学 4
107	12:46:30	伊部 琴美	名古屋大学 1
108	12:47:30	森谷 風香	千葉大学 3
109	12:48:30	三浦 やよい	相模女子大学 4
110	12:49:30	山内 美輝	新潟大学 2
111	12:50:30	宮本 和奏	筑波大学 1
112	12:51:30	青島 千映里	京都女子大学 4
113	12:52:30	岡本 ひなの	奈良女子大学 3
114	12:53:30	高橋 利奈	日本女子大学 2
115	12:54:30	長谷川 真子	東北大学 4
116	12:55:30	櫻井 彩葉	相模女子大学 4
117	12:56:30	木村 るび子	立教大学 3
118	12:57:30	長崎 早也香	名古屋大学 4
119	12:58:30	横山 結女	椋山女学園大学 3
120	12:59:30	金澤 めぐみ	奈良女子大学 3
121	13:00:30	★勝山 佳恵	茨城大学 3
122	13:01:30	小竹 佳穂	筑波大学 2
123	13:02:30	伊東 加織	東北大学 2
124	13:03:30	香取 瑞穂	立教大学 1
125	13:04:30	佐野 萌子	京都女子大学 3
126	13:05:30	★香取 菜穂	千葉大学 3
127	13:06:30	山下 桃子	早稲田大学 2
128	13:07:30	佐久間 文香	新潟大学 3
129	13:08:30	小野 花織	椋山女学園大学 3
130	13:09:30	羽鳥 咲和	京都女子大学 2
131	13:10:30	★出田 涼子	大阪大学 2
132	13:11:30	鈴木 友紀乃	新潟大学 4
133	13:12:30	伊佐野 はる香	東北大学 3

134	13:13:30	平松 夕衣	横浜市立大学 3
135	13:14:30	山森 汐莉	金沢大学 3
136	13:15:30	★山岸 夏希	筑波大学 3

〈ロング・ディスタンス〉ME 参加人数 62

No.	スタート 時刻	氏名	学校・学年 (My-card No.)
101	11:30	小林 大悟	筑波大学 4(220406)
102	11:32	田中 創	大阪大学 3(222733)
103	11:34	谷口 文弥	東京大学 3(221760)
104	11:36	岩井 龍之介	京都大学 2(502509)
105	11:38	坂梨 敬哉	慶應義塾大学 4(221971)
106	11:40	齋藤 佑樹	早稲田大学 3(222752)
107	11:42	杉浦 弘太郎	名古屋大学 4(208404)
108	11:44	長谷川 望	早稲田大学 2(502197)
109	11:46	宮本 樹	東京大学 3(185352)
110	11:48	長井 健太	東京農工大学 3(180887)
111	11:50	高見澤 翔一	一橋大学 2(231082)
112	11:52	今泉 将	名古屋大学 4(208249)
113	11:54	北見 匠	東北大学 2(228245)
114	11:56	平山 遼太	東京大学 4(208281)
115	11:58	平原 誉士	京都大学 4(196143)
116	12:00	長岡 凌生	東北大学 2(228345)
117	12:02	南河 駿	名古屋大学 4(208358)
118	12:04	佐藤 誠也	東北大学 3(211118)
119	12:06	本村 汰一朗	金沢大学 3(231784)
120	12:08	竹内 元哉	東京大学 4(208156)
121	12:10	中谷 鴻太	東京工業大学 4(501021)
122	12:12	瀬川 出	東京大学 4(208438)
123	12:14	小原 和彦	東京工業大学 3(501744)
124	12:16	是永 大地	名古屋大学 4(208286)
125	12:18	渡邊 壮	金沢大学 4(231676)
126	12:20	青芳 龍	東北大学 2(228169)
127	12:22	岡本 洸彰	東京大学 3(221644)
128	12:24	森河 俊成	京都大学 2(196162)
129	12:26	殿垣 佳治	東京大学 3(221808)
130	12:28	小平 修	東北大学 3(210741)
131	12:30	大田 将司	一橋大学 3(221607)
132	12:32	小泉 惇平	東北大学 3(200731)
133	12:34	角田 貴大	横浜市立大学 4(500349)
134	12:36	林 雅人	名古屋大学 3(220307)
135	12:38	高野 兼也	新潟大学 4(222816)
136	12:40	加藤 岬	東京大学 4(208486)
137	12:42	三浦 一将	名古屋大学 2(232061)
138	12:44	下江 裕貴	広島大学 4(232317)
139	12:46	堀江 優貴	東北大学 4(200628)
140	12:48	松本 萌希	京都大学 3(196157)
141	12:50	種市 雅也	東京大学 2(231191)
142	12:52	★佐藤 俊太郎	東北大学 4(200541)
143	12:54	近藤 恭一郎	京都大学 4(196125)
144	12:56	柴沼 健	早稲田大学 3(222758)
145	12:58	椎名 晃丈	東京大学 1(236023)
146	13:00	伴 広輝	京都大学 3(171640)
147	13:02	★伊藤 樹	横浜国立大学 3(221813)
148	13:04	大石 洋輔	早稲田大学 1(183067)
149	13:06	下江 健史	広島大学 2(502875)
150	13:08	三好 将史	早稲田大学 2(502297)
151	13:10	久米 悠介	東北大学 2(231592)

152	13:12	★松尾 怜治	東京大学 4(208555)
153	13:14	前野 達也	名古屋大学 3(220382)
154	13:16	横堀 聖人	東京大学 3(221825)
155	13:18	友田 雅大	早稲田大学 4(222763)
156	13:20	糸 潤哉	東京大学 4(208314)
157	13:22	★稲森 剛	横浜国立大学 3(502502)
158	13:24	上野 康平	東京工業大学 3(501781)
159	13:26	大橋 陽樹	東京大学 2(231445)
160	13:28	富田 涼介	東北大学 4(220436)
161	13:30	濱宇津 佑亮	東京大学 3(221817)
162	13:32	★上島 浩平	慶應義塾大学 3(221880)

〈ロング・ディスタンス〉WE 参加人数 34

No.	スタート 時刻	氏名	学校・学年 (My-card No.)
201	11:31	立花 和祈	実践女子大学 3(221919)
202	11:33	上妻 紅音	慶應義塾大学 4(221809)
203	11:35	宮本 和奏	筑波大学 1(185368)
204	11:37	山森 汐莉	金沢大学 3(231806)
205	11:39	和田 あゆみ	慶應義塾大学 3(502752)
206	11:41	森谷 風香	千葉大学 3(220278)
207	11:43	臼井 沙耶香	東北大学 3(211004)
208	11:45	木村 るび子	立教大学 3(221923)
209	11:47	高橋 友理奈	東北大学 3(200643)
210	11:49	出田 涼子	大阪大学 2(502186)
211	11:51	高瀬 優衣	金沢大学 2(231685)
212	11:53	村田 茉奈美	フェリス学院大学 3(500351)
213	11:55	河村 優花	名古屋大学 2(231387)
214	11:57	佐野 萌子	京都女子大学 3(505004)
215	11:59	三浦 やよい	相模女子大学 4(205206)
216	12:01	長崎 早也香	名古屋大学 4(208353)
217	12:03	成澤 春菜	フェリス学院大学 4(501126)
218	12:05	佐久間 文香	新潟大学 3(222818)
219	12:07	★香取 菜穂	千葉大学 3(220277)
220	12:09	増田 風見花	実践女子大学 3(221922)
221	12:11	高橋 利奈	日本女子大学 2(502196)
222	12:13	藤井 菜実	椋山女学院大学 4(208176)
223	12:15	小山 智子	千葉大学 4(228231)
224	12:17	★勝山 佳恵	茨城大学 3(221578)
225	12:19	増澤 すず	筑波大学 2
226	12:21	平松 夕衣	横浜市立大学 3(221973)
227	12:23	長谷川 真子	東北大学 4(200593)
228	12:25	古谷 直央	横浜市立大学 2(501839)
229	12:27	★山岸 夏希	筑波大学 3
230	12:29	鈴木 彩可	金沢大学 4(231681)
231	12:31	塚越 真悠子	大阪大学 2(502181)
232	12:33	櫻井 彩葉	相模女子大学 4(205196)
233	12:35	大類 茉美	フェリス学院大学 4(221786)
234	12:37	★伊佐野 はる香	東北大学 3(210419)

<スプリント競技部門 各責任者>

実行委員長	糸井川 壮大	(京都 12)
競技責任者	安中 勇大	(京都 11)
運営責任者	川上 雅人	(名古屋 11)
コース設定者	五百倉 大輔	(京都 12)
イベント・アドバイザー	近藤 康満	(名古屋 10)

<ロング・ディスタンス競技部門 各責任者>

実行委員長	糸井川 壮大	(京都 12)
競技責任者	松下 睦生	(京都 11)
運営責任者	前田 悠作	(名古屋 10)
コース設定者	細川 知希	(名古屋 10)
イベント・アドバイザー	菅谷 裕志	(名古屋 08)

<共通部門 各責任者>

広報責任者	穂崎 康良	(名古屋 10)
Web 責任者	高橋 秀明	(金沢 12)
会計責任者	小石原 暉	(東京 10)
人事責任者	足立 将城	(名古屋 13)
資材責任者	朝野 椋太	(京都 12)
エントリー責任者	段塚 裕貴	(名古屋 13)
宿泊・輸送責任者	平野 大輔	(名古屋 12)
モデルイベント責任者	山下 恵右	(静岡 10)

<各チーフ>

フィニッシュパートチーフ	小野 真嗣	(京都 12)
スタートパートチーフ	牧 宏優	(名古屋 11)
会場パートチーフ	高橋 秀明	(金沢 12)
演出パートチーフ	稲吉 勇人	(名古屋 13)
救護パートチーフ	黒木 結花	(津田塾 12)
受付パートチーフ	段塚 裕貴	(名古屋 13)
誘導パートチーフ	谷 祐樹	(名古屋 08)

以下、順不同

<その他の役員>

橋本 八洲馬、牧ヶ野 敏明、林 武彦、星 美沙、佐藤 充晃、山本 匡毅、小澤 宏紀、大村 拓磨、糸賀 翔大、蜂須賀 久晴、堀 滉司、中村 由紀子、山口 雅弘、武田 惇、濱田 佑、笠間 悠輔、久保 志穂子、池田 慧、久保 実穂子、浅井 迅馬、大岩 正裕、渡仲 祥太、渡仲 優、太田 裕士、瀬尾 峻汰、今井 健人、中田 茂夫、中田 啓子、松下 綾、葛野 力、木村 雄大、郷田 侑希、堀野 太郎、北川 太一、仲田 宗平、下川 千晴、福田 雄希、福田 瑞希、岡田 佐和子、竹内 孝、山本 敦史、鵜飼 須彦、横山 莉沙、戸田 篤希、山田 茂夫

<併設大会実行長>

渡辺 菜央美 (名古屋 12)

<併設大会コース設定者>

五百倉 大輔 (京都 12)
細川 知希 (名古屋 10)

<オーガナイザー>

山川 克則 (東京 79)

大会当日役員配置

<11 月 11 日 (土) スプリント競技部門>

・本部	糸井川 壮大	安中 勇大	川上 雅人	近藤 康満
	前田 悠作			
・フィニッシュ	小野 真嗣	大岩 正裕	浅井 迅馬	濱田 佑
	笠間 悠輔	木村 雄大	武田 惇	小石原 暉
	山口 雅弘			
・スタート	牧 宏優	渡仲 祥太	渡仲 優	堀 滉司
	林 武彦	小澤 宏紀	松下 綾	山田 茂夫
・会場	高橋 秀明			
・演出	稲吉 勇人	佐藤 充晃	朝野 棕太	瀬尾 峻汰
	久保 志穂子	池田 慧	五百倉 大輔	葛野 力
・救護	黒木 結花	穂崎 康良	中村 由紀子	岡田 佐和子
・受付	段塚 裕貴	山下 恵右	久保 実穂子	下川 千晴
	山本 敦史	渡辺 菜央美	横山 莉沙	足立 将城
・誘導	谷 祐樹	竹内 孝	鵜飼 須彦	戸田 篤希
	北川 太一	今井 健人	仲田 宗平	郷田 侑希
・ロング準備	松下 睦生	細川 知希	菅谷 裕志	山本 匡毅
	大村 拓磨	太田 裕士	蜂須賀 久晴	
・駐車場	平野 大輔	福田 雄希	福田 瑞希	橋本 八洲馬
・地図調査	山川 克則			
・裁定委員	高橋 厚	加納 尚子	堀田 遼	

<11 月 12 日 (日) ロング・ディスタンス競技部門>

・本部	糸井川 壮大	松下 睦生	前田 悠作	菅谷 裕志
・フィニッシュ	小野 真嗣	大岩 正裕	浅井 迅馬	濱田 佑
	笠間 悠輔	木村 雄大	武田 惇	小石原 暉
	山口 雅弘	蜂須賀 久晴		
・スタート	牧 宏優	星 美沙	渡仲 祥太	渡仲 優
	堀 滉司	太田 裕士	安中 勇大	川上 雅人
	池田 慧	郷田 侑希	竹内 孝	中田 啓子
	小澤 宏紀	下川 千晴	山田 茂夫	
・会場	高橋 秀明	山本 匡毅		
・演出	稲吉 勇人	佐藤 充晃	朝野 棕太	瀬尾 峻汰
	久保 志穂子	今井 健人	五百倉 大輔	葛野 力
	細川 知希			
・救護	黒木 結花	穂崎 康良	中村 由紀子	岡田 佐和子
	近藤 康満	糸賀 翔大	山下 恵右	久保 実穂子
	足立 将城			
・受付	段塚 裕貴	渡辺 菜央美		
・誘導	谷 祐樹	松下 綾	中田 茂夫	大村 拓磨
	仲田 宗平	平野 大輔	福田 雄希	福田 瑞希
	橋本 八洲馬	堀野 太郎		
	北川 太一	郷田 侑希		
・地図調査	西村 徳真			
・裁定委員	堀田 遼	長縄 美春	藤生 考志	

大会公式マスコット



マスコットキャラ考案者：
名古屋大学2013年度入学
川島 実紗さん

名前：

カエル将軍

身長：6cm

体重：200g

一句：「天下賭け 熱き戦よ 甦らん」

2017 年度日本学生オリエンテーリング選手権大会

スプリント、ロング・ディスタンス競技部門

発行元： 日本学生オリエンテーリング連盟

所在地： 〒329-2441

栃木県塩谷郡塩谷町船生 6082-68 山川克則記念館内

Web サイト： <http://orienteering.com/~icsl2017/>

発行責任者： 糸井川 壮大

編集責任者： 穂崎 康良